
友達の存在...

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達存在・・・

【Nコード】

N2844B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

“友達なんて必要ない”と、思っていた主人公、高萩^{たかはぎ} 荊太郎^{けいたろう}。彼は、冬休み前の期末テストの世界史で赤点を探ってしまい、冬休み中に補習を受けなければならなくなり憂鬱感に浸っていた。そんな時、高萩と同じく補習を受ける、クラスの男子からモテている女子の、千駄木^{せんたぎ} 萌^{もえ}に声を掛けられた事から物語は始まる。彼女やその周り、その都度出会う人達等により、彼は徐々に心を開き、人と人との関係を築き上げていく事となる。

これは、彼の高1の冬から高2の夏休みに掛けての私立芹沢学園高^{せりさわ}

校内や、高校がある東京都駒宮市内等での出来事による、彼と接する様々な人達とのふれあいを通じ、彼自身が“真の友達”とは何かと考える、普通の学生物語である。

プロローグ・憂鬱の2学期終業式の日…(前書き)

…ここだけの話…この小説の主人公の素性は少し作者を意識しています

…

プロローグ：憂鬱の2学期終業式の日…

親友なんてクソさ。

“友達”という言葉は実にくだらない。

実際、そんなのいなくても生きていけるのさ。

俺の名前は高萩^{たかはぎ} 荊太郎^{けいたろう}。高1で身長161cmというでこの低身長ながら、4月から今までの時間を私立の進学校で適当に過ごしていた。

今、俺は憂鬱感で一杯だった。その理由は2学期の中間・期末テストにおいて世界史のテストを連続で赤点を探ってしまった、冬休み返上で補習を受ける事となってしまったからである。どうせ、俺は勉強出来ない奴だし…補習なんて夏休みも受けたし。はあ…。

2学期終業式、俺はいつも“仮ダチ”としてつるんでいる福本^{ふくもと}、成増^{なります}と、校長が話している間中ずっと話していた。

話の内容としては、冬休みをどう過ごすかであった。福本は友達の家押し掛けるらしい…。全く相手にとっちゃ、とんだ迷惑野郎だ。一方の成増は、成績優秀のために悠々とテニス部に集中するらしい。俺はもちろん…補習だ。

終業式が終わり、教室に戻った俺らに担任から通知表が配られた。俺の通知表はバリエーションというモンを知らない。ほとんど2か3だ。ただ現代文と物理が4だった。まあ…、いつも通りさ。

そして、帰りのホームルームが終わり、荷物をまとめて出ようとした時だった。

?????

「ねえ、高萩君？」

誰かに声を掛けられた。

面倒臭くも一応振り返ってみると…俺は自分の目を疑った。

何故なら、俺に声を掛けたのはクラスの女子の中で男子に結構モテる、千駄木せんだぎ 萌もえだった。僕は彼女と話した事は一度も無い。

高萩：

「何、千駄木さん？」

千駄木：

「あのさあ…、高萩君も…う、受けるの？」

高萩：

「え？ 何を？」

千駄木：

「世界史の…補習。」

高萩：

「ああ、受けるけど。」

千駄木：

「あゝ良かったあ、私と一緒にだね！」

高萩：

「あ…うん、そ、そうだね…」

俺は、生返事しか出なかった。

千駄木：

「24日、一緒に頑張ろうね！じゃあねえ。」

高萩：

「あ…う、うん。それじゃ。」

千駄木が教室から出て行くのを、後ろから見ていた俺はこう思った。

高萩の心の声：

「確かに、噂通りの天然癒し系だ。これが、彼女がモテる秘密なのかもしれない。まあ、別に俺には関係ねえけど。」

俺は、自宅へ帰ろうと教室を後にした。

f r i e n d s 1 : 俺に対して、妙に馴れ馴れしい女… (前書き)

高萩は依然として、クラスメート相手に心を開かない。そんな中、クリスマスがやって来た。千駄木からカラオケに誘われるが、高萩は断わってしまう。

friends 1 : 俺に対して、妙に馴れ馴れしい女…

到頭、憂鬱な冬休みがやって来てしまった…。家で世界史の予習を少ししてから、学校へと足を運ぶ日々が俺に課せられた。

高萩の心の声：

「冬休みぐらいつつと寝てたいのに…。」

しかも、補習はクリスマススイブの日から始まったのだった。

高萩の心の声：

「世間では今日、大切な人と過ごす日なのに俺は世界史と過ごさなければならぬのか…。まあ、別に良いけどさ。」

トボトボと駅から歩いて15分、見慣れた…。いや、見飽きた5階建て校舎が現れた。

俺は溜め息を吐きつつ、学校の中へ入っていった。

上履きに履き替え、階段を重い足取りで上り、5階の一番端のクラスに入った。

?????

「よお、高萩！お前も受けるのかあ。」

馴れ馴れしく話し掛けてくるこのデブが、ふくもと福本 しゅうた秀太だ。一応、俺の“仮”のダチだ。

今までの学校生活の中の教訓として、学生で真つ先に必要なのは調和らしく、一匹狼はいけならしい。なので、仮としても俺は要らないと思っていたダチを作らざるを得なかったのだ。

高萩：

「ああ、一応な…。あれ、成は？」

福本：

「アイツは、優秀だから補習など受けない。この世界史なんて、こないだの期末で92点採ってクラスのトップ。ひゃあ…羨ましい！」
高萩の心の声：

「さすが成、見過ごせない奴だ。」

成増なります 龍樹たじきは、俺の“仮”のダチの一人である。入学してから、学力は学年のトップクラス。運動神経抜群。テニス部の期待の新人とも呼ばれ、更にはいつも人には（てか女子に対してが多い）低い姿勢を保っているので、人気だ。多分バレンタインデーには、学校内の女子からチョコをわんさか貰えるだろう。

?????

「おはよー、高萩くん。」

後ろのドアから入ってきたのは、あの千駄木だった。今まで、話した事が無いのに最近妙に話し掛けてくる。何か企んでいるのか…。

こうして考えている間に、補習を受ける奴らが登校してきた。しかも、その中にはクラスの女子では成績優秀、更にクールビューティで男子からの人気ナンバー1である、蒲原かんばら 理佳りかもいた。何故、世界史の補習に成績の良い蒲原もいるのかが不思議だ。
こうして、1教師対10人未満の生徒達での世界史の補習が始まった。

俺は世界史なんか、興味無かった。自分が興味ある教科は地理、理科の天体部門などだ。一応、理科のテストはいつも80点代を採っていた。俺は、世界史の単調な説明に飽きてきた。世界史なんてどうでも良い、早く2年になって地理がやりたいと思っていた。

俺は、次第に眠くなってきてしまった。あくびも出始めた。俺は、やがて眠ってしまった。

「夕刻」

目が覚めたら、世界史の補習がとくに終わってしまった。俺は、頭を掻いた。

高萩：

「ああ、クソツ…寝ちまったよ。」

?????

「あれえ、起きたあ？」

その声に驚いた俺が振り向くと、側で千駄木が立っていた。

千駄木：

「高萩クン、寝てたから配られたプリントを渡し損ねちゃってえ…。」

高萩：

「ああ…、わざわざどうも。」

彼女に軽く会釈し、荷物をまとめ、家へと帰ろうとした時、

千駄木：

「待って、折角だから一緒に帰ろうよ。」

と、彼女が言ってきた。

高萩の心の声：

「はあ？ 何故、あんたと一緒に帰んねえといけないんだ。」

高萩：
「ごめん、一人で帰りたいから。」

面倒くさくて、抑揚の無い声で言った。すると彼女は、一瞬だけ驚いた表情を見せたがすぐに微笑み、

千駄木：

「えー、つれないなあ。一人で帰るより、二人で帰った方が楽しいと思うな。」

と、言った。

高萩：

「何で、俺と帰りたいの？」

鬱陶うつとうしいと思いつながら、彼女に言った。すると、彼女はふと哀しそうな顔して言った。

千駄木：

「高萩クンとただ何となく帰りたい…、これじゃダメ？」

俺は、女子とは帰りたくない。周りから変な風に思われたく無いからだ。クラス中の男子からモテている女子が相手なら尚更そうだ。

高萩：

「いや、まだ明るい方だし。千駄木さんはバスでも使って一人で帰りなよ。それじゃ。」

俺はそう彼女を諭して、そそくさとその場から立ち去った。

冬場は夜に掛けて冷え込みが厳しいし、暗くなるのが早くなる。俺は鞆から手袋を取り出して手に填めたその時、

千駄木：

「高萩くん、待ってえ！」

千駄木が走り寄ってきた。俺は急ぎ足にしたが、それでも追い付かれてしまった。

千駄木：

「高萩くん…何で逃げんの？」

千駄木は、息を切らしながら俺に質問する。

高萩：

「別に…、寒いから早く駅に行きたかっただけ。」

と、俺は彼女にそう言った。すると、千駄木は彼女のコートのポケットから携帯を取り出して、

千駄木：

「ねえ、高萩クンのメルアド教えて。」

と、言ってきた。昼間の件もあるし、メルアドぐらいは教えておいても良いかと俺はズボンのポケットから携帯を取り出し、千駄木とメルアド交換をした。

千駄木：

「これからはメル友だね！」

微笑みながら言う彼女は、嬉しそうだった。

高萩の心の声：

「別に友達では無い、単なるクラスメートの一人だろ。」

俺は千駄木と一緒に駅まで歩き、改札の所で別れて、ベンチに座って列車を待っていた。ふと、ポケットにしまっていた携帯が振動したので確認した。メールが、一通入っていた。相手は、なんと千駄木だった。

千駄木のメール：

「高萩くん、急だけど明日暇？」

と、打たれていた。

高萩のメール：

「特に予定は無いけど、何かあんの？」

と、送信した。すると、数分後に千駄木から返信されてきた。

千駄木のメール：

「じゃあ、補習受けてる皆で明日カラオケ行かない？」

と、打ってあった。カラオケ自体苦手だし、女子がいる時点で行く気が失せた。

(ゴメン、予定は無いけどやっぱり行けない。)
と、打った。

すると返信されてきて、
(そうなんだあ…、残念。また今度行こうよ！)

と、打たれていた。

「今度は、と言っか一生無いよ。」

俺はそのメールに返信せずに携帯をポケットの中へしまった。

一夜明けて、クリスマス。俺は昨日と同じく、学校へ行く。今日の補習の時間は何故か真面目に受けたと思う。そして、補習が終わり帰ろうとした時、

「おい、高萩。カラオケ行かないのか？」

と、カラオケ好きの魚谷うおたにに止められた。

「悪い、俺パスするよ。」

と、答えた。

「そうかあ、残念。まさか、彼女とか出来たんじゃ？」

俺は、魚谷の質問に苦笑いしながら、

「冗談言うな、キモくて最低なこの俺に彼女なんか出来るか？」
と、答えた。

「ハハッそうか、じゃ良いクリスマスを！」

魚谷はそう言って、カラオケに行く仲間の所へ走って行った。

俺は一息ついた後、学校から出てバスに乗った。バスは異様に空いていた。何だか変な気分だった。自分が悪いんじゃないのに。その迷いを絶ちきろうとしている自分が、何だか切なかった…。

駅から電車を乗り継ぎようやく家に着くと、父親が帰宅時にクリスマスケーキを買っておいたらしく、テーブルの上に箱があった。俺はそれを一瞥して、階段を上り2階の自分の部屋へ入った。俺の部屋は衣類で造られた山と机、テレビとゲーム機、ベッド、そして何となく観葉植物としておいたサボテンが置いてある。俺は、私服に着替えて真っ先にベッドへ潜り込んだ。そして今は古いとされるMDプレイヤーで好きなアーティストの曲を聴いた。この瞬間が結構幸せだと感じるのだ。俺は、いつの間にか夢の中に入っていた…。

俺は中学生に戻っていた。 あれは…そう、榮波だ。彼は、複数の奴らにいじめられていた。俺は助けようとした。が、その結果、俺もいじめられてしまった。

(イヤだ、誰か助けてくれ！誰か助けてくれ！誰か…。)

(バツ！)

「ハアハア…、夢…だよな？」

起きた時は全身が汗だくだった。なので、即シャワーを浴びた。その時に、もう夜だと解った。

着替えてから居間で夕食を採り、部屋に戻って電気も点けずにわざと暗くしたまま、俺はベッドの上で体育座りしてしていた。ふと気がつくと、携帯のランプが光っていた。確認してみると、一通のメ

ールが入っていた、カラオケの光景の写真付きで、送り主はまたも千駄木からだった。

（カラオケ、楽しかったよお。高萩くんもくればよかったのに…。）と、打たれていた。

俺はこの千駄木からの柔らかなメールに内心ホツとしたのか何故か、自然と目から涙が溢れていた…。

f r i e n d s 2 : 優しいヒト (前書き)

高萩は、また憂鬱な世界史の補習を受けていた。そんな中、千駄木が倒れるが高萩はただ見てるだけで何も出来なかった。その時、彼に後ろから声を掛けてきたのは気と声は小さいが心優しい女子、潮見だった…。

f r i e n d s 2 : 優しいコト

翌日、クリスマスが終わり普通の冬休みに戻った。俺は、別にいつもと変わらない様子だった。全体の成績が落ちて苦しんでいるのは別だが。

教室では、昨日のクリスマスの事で話が盛り上がっていた。俺は、自分には関係無いと感じていたので仲間の話に加わなかった。そして、隣を見ると千駄木が必死に勉強している。俺は取りあえず、世界史の補習授業が始まるまで冬休みの課題をやり始めた。

「お、偉いなあ。待つてる間に宿題やってるよ。」

クラスメートの川端かわはた 康介こうすけが俺の姿を見て言った。俺は、

「何だ、康介か。蒲原と一緒にやねえのか？」

と、川端に質問した。川端と蒲原は付き合っていると噂されていたからだ。

「いや、別に高萩には関係無いだろう。」

と、川端に言われて、俺はこれ以上詮索するのを止めた。

また、いつもと変わらない世界史の授業に俺はつまらなかった。成績は下がる一方。世界史の授業を俺はこの日、何となくやり過ぎた。

授業が終わり、教室を出ようとした時だった。

(バタツ)

いきなり千駄木が膝から崩れ落ちたのだ。直ぐに近くにいたクラスメートが保健室へ千駄木を運んでいった。俺はその様子を呆然と観ていた…。

呆然と観てるしか出来なかった俺に、誰かが不意に後ろから声を掛けた。

「…た、高萩君？大丈夫…？」

その声に俺は我に返った。
声の主はクラスメートの潮見しおみ 麻衣まいだった。潮見とも話した事が無い俺は何を話しかけたら良いのか解らなかった。

「えっ…あ…うん、平気。」

「…なら、良いけど…。」

潮見は性格が大人しくて誰にでも優しい、真の“女の子”と周りから言われている。背が低く、女子高生とは普通では到底思えない程の妹系の口リ顔だが彼女の笑顔は自然体で、男子から“天使スマイル”と称されている程、可愛いらしく人気だ。

女子からぶりっ娘と噂されているがデマである。

常に誰に対しても優しく接する心を持つ女子の一人である。

しかし元々、気も小さくて声も小さかった事が災いに転じ、彼女は
一時期クラスの女子から虐めいじめのターゲットにされて学校に来なくな
ったが、今は何とか学校に来ている状態だった。

俺は、一応“アレ”を尋ねてみた。

「今は、大丈夫なのかい？精神的に苦しんだり、病んだりしてない
か？」

潮見は、一瞬驚いた顔をして少しうつ向きながら、

「う…うん、何とか…。ねえ高萩君…あたし、どうしたら良いのか
解らないんだ…」

と、言った。俺は、

「そうなんだ…」

としか言えなかった…。

俺が言い終わると何か潮見の様子がおかしい事に気付いた。潮見は
うつ向きながら少し肩が震えていた。

「し、潮見？」

俺は驚いた。床を見ると潮見が溢した涙の雫で濡れていた。

「ご、ごめん…余計な詮索せんさくをしてしまった。」

と、俺はとつさに潮見に謝った。潮見は泣きながら首を横に振って、
「う…うん…高萩君は悪くない…。全て…あたしが悪いの…。ゴメン
ね…高萩君に迷惑掛けちゃったね…。」

と、言ってきたので俺は、

「自分自身を責めるな。」
と、言って自己嫌悪に陥っていた彼女を優しく慰めてあげた。

「う…うん…ありがとう。」
と、潮見は言って彼女のバッグから紙を取り出して何か書いた後、その紙を俺に渡した。

「…あたしの携帯番号とメルアドなんだ…。高萩君…受け取って欲しいな。」
と、言った。俺は、彼女から紙を受け取り、自分の携帯のメモリーに潮見の名前を入れた。潮見も自分の携帯を取り出して、俺の名前をメモリーに入れた。

「これから少しずつだけど…連絡して良いかな？」

と、潮見が言ったので俺は、
「もちろん。」

と答えた。彼女は少しだけ笑顔になった。

帰り道、俺は駅まで潮見と歩き、駅で別れた。
駅に着くと上が騒がしく感じたので上がってみた。

すると何と、プラットホームで福本と川端がいがみ合いの口論をしていて、一歩間違えたら多分暴力沙汰になりそうである。しかも、その近くには蒲原がいたのだった…。

f r i e n d s 3 : 男女の修羅場 (前書き)

高萩は、駅のホームで口論していた福本と川端を止めてくれと蒲原に頼まれた。高萩は蒲原の頼みを拒み続けるが…

friends 3 : 男女の修羅場

(ああ…嫌な気分だな)

と、目の前の現実には俺は思う。

2人の男が対峙し、側に1人の女…アレだ、修羅場。

「オメエ、理佳に何やった?!」

「テメエみたいな奴に、蒲原さんを愛す権利は無い!」

と、2人から聞こえてきた。蒲原はというと…二人のいがみ合いに困り果てているようだった。まあ…何にせよ、俺には到底関係無いが。

しかし、不運な事に、

「あ、高萩君。」

と、蒲原に見つかってしまった俺…。当然、無視できずに、

「何、蒲原?」

と、言った。別に特別な関係では無いがいつの間にか彼女を呼び捨てしていた、潮見の事も同様に。

「あのさ、あの2人のくだらない喧嘩を止めてくれない?」

明らかに、俺より蒲原の方が止められる筈だ。しかも、俺が入ったとしても止められる保証は無い。

「俺より、蒲原の方が止めやすいと思うよ。それじゃ。」

と言つて、俺は立ち去ろうとした…が、現実は厳しかった。

彼女は妖艶な笑みを浮かべて、

「ねえ、助けてくれるよね?ねえ?ねえ?」

と、ほぼ脅しに近い言動をしてきた。当然ながら断り続ける俺。し

かし、次の瞬間…

「うっ…うっ…」

蒲原が両手で顔を覆った。多分、嘘泣きをしようとしているのだろう。

「しょうがない、後で針屋の豚キムチ丼奢れよ。」

俺は折れて渋々了承して口論している二人に近付いた。

「おい、みっともない争いは止める。」

俺が言っていると福本が反論してきた。

「おい、高萩。コイツ（川端）より俺の方が、蒲原さんを愛せるだろ？」

すると、川端も言ってきた。

「俺は正式に理佳と付き合ってるんだ。なのにこのデブが“お前に蒲原さんを愛す権利は無い。”とほざいて、いきなりつつかかって来たんだ。どう思う？」

俺はかなり困惑した。

普通なら川端の方が正論なので応援するが、福本の方も蒲原を一生懸命に愛す熱意も伝わってくる。

「おい、どっちが理佳の彼氏に適してる？」

と、二人に言われて更に困った。が、やはり…ここは康介が正しいと俺は判断した。

「俺は、正式に蒲原と付き合っている康介の方が正しいと思う。康介には悪い言い方かもしれないけど、福本は康介が蒲原と別れたらアタックしろよ。多分、それは無いと思うけど。」

「さすがハギ、解ってんじゃん！」

と、川端が笑みを浮かべながら言っつて俺の肩に手を置いた。

「クソ！死ぬ！ファ…グフツ！」と、怒り狂って危険なワードを言いそうになった福本に俺は拳と蹴りを順に腹に入れてその場を去った。

蒲原がすれ違いざまに、豚キムチ丼の代金を俺のポケットに入れた。

「ぶっも…」

と、軽く蒲原に会釈し、俺は丁度到着した列車に乗って帰った。

f r i e n d s 4 : 少女の涙 : (前書き)

正月早々、高萩は潮見からメールを貰い、会う事になった。高萩が待ち合わせ場所に着くと、潮見は高萩の方にやってきていきなり泣きついたのであった…

f r i e n d s 4 : 少女の涙 :

年が変わり、1月の第2週の火曜日。俺は始業式が終わって成（成増）と福本とで話をしていた。

「どうだった、冬休みは？」

と、まず俺が成に聞いた。

「俺は…テニスだな。高萩は？」

「えっ…まあいろいろとあって…。」

「何だよお、教えるよお！」

と、福本。

2人に教えられるはずがない、シリアスな出来事に遭遇してしまったのだから…

あれは、年明けした1月初旬のある日。

補習が一段階終わり、俺は何にもする事がなくて家で適当にゲームしていた。すると、携帯のメールランプが点灯した。相手は潮見だった。

（逢いたい…。）

たつたの一行では、さすがに俺には解らなかった。でも、何かがあったと察知した俺は即、隣の市にあるターミナル駅へ潮見を呼び出して、そこへ行くために自転車のペダルを漕ぎまくった。

ターミナル駅に着くと、潮見はこちらから見える場所で待っていた。顔つきは暗かった。

「どうした、助けてって…。」

「ゴメンね…高萩君しか頼れる人が居なくて。」

「別に良いけど。一体何が起こったんだ？」

俺は聞いて後悔した。潮見が泣いて寄って来たのだから。

取りあえず俺は、彼女が落ち着くまで待っていた。

約30分程要した後、潮見が口を開いた。

「…ここでは、話せないから場所を移して良いかな？」

俺は、黙って頷いて潮見の示した場所へついて行った。

ターミナル駅から約10分程歩き、辿り着いた場所は円山公園まるのやまという場所だった。非常に静かな場所で、一人も人が居なかった。

俺達はベンチに座った。もちろん、距離をとって。俺から静かに口を開いた。

「潮見…どうしたのかい？」

「実は…」

…次に彼女の口から出た言葉に俺は言葉を失った。

「あたし……また”義理の父親と兄から強姦されそうになったの……」

「……………えっ？」

出来れば聴きたく無かった

でも、もう…遅い。

潮見は静かに俺の方を向いていた。彼女の目は微かに潤んでいた。

俺は、苦しくて目を背けてしまった。でも、これじゃ…。

ただ時間だけ流れる…

気がつけば俺は、潮見の手を握っていた。

「えっ…高萩…君？」

「大丈夫。」

「えっ？」

「潮見には俺がいる。俺はいつだって潮見の味方だ、信じてくれ。決して潮見を裏切ったりしない！」

何故、俺はこんな事を口走ってしまったのか解らない。けど今、潮見は確実に助けを求めている。それを俺は無視出来ない、出来るはずが無い。

俺は、出来る限り潮見の手助けをしてやろうと思った。

「ありがとう…高萩君…。」

潮見は、俺の胸で声を上げて泣いた。

俺は、ただ彼女が泣き止むまでただ目の前の景色を観ているしか無かった…。

帰り際、俺は潮見に自分が持っていた幸福の御守りをプレゼントした。潮見は受け取ってくれた。

「ありがとう…絶対大切にするね。」

俺は少し微笑んで、潮見も少しだけ笑顔になった。

「じゃ…また。」

俺は潮見に言った。潮見は下を向いていた。俺が帰ろうとしていた時、

「…待って、高萩君。」

潮見は小さく呟いた。

「今日は…あ、ありがとう。」

「…あ、ああ。」

と、俺は返事した。すると、潮見は頬を赤らめて小さく呟いた…。

「それと…あたしの事、潮見じゃなくて…ま、“麻衣”って呼んで欲しいな…。」

「…えっ？」

俺が聞き返す前に、潮見は帰ってしまった。

俺は何が何だか解らなかつた。
結局、彼女を追い掛けずに自転車にまたがり、家へ向けて漕ぎ始めた。

f r i e n d s s : 徐々に揺れ動いていく人間関係… (前書き)

高萩は、メールを通じて徐々に潮見と仲良くなっていた。そんな時、高萩は風邪をひいた。高萩が寝込んでいると、千駄木こもから心の籠こもつた温かいメールが届く。それによって、また千駄木と仲良くなる高萩。

風邪が治り、学校に登校した高萩は、神妙な顔をしていた成に、放課後に話があると言われた。

friends：徐々に揺れ動いていく人間関係…

1月下旬。

今は模試も終わり、もうすぐ2月になりそうな時だった。冬休みが懐かしく感じる。俺は、昼休みに潮見にメールした。

(どう、そっちは慣れたかい?)

2、3分ぐらいで返事が返ってきた。

(うん、何とか慣れたよ。てか、こっちにいると安心する…。)

潮見は、別室登校が許可されて始業式からそっちに通いだした。俺は時々、担任から頼まれて彼女の様子をメールで伺う。でも殆ど、彼女の方からメールが来る。俺はシカトせず、彼女からメールが来たら返信する、という感じでやっていた。

月日は過ぎ、2月に入った。俺は風邪をこじらせ、学校を休んでいた。

「ああ…暇だ。」

と、呟いているとメールが入った。潮見かと思ったが、しかし違った。

(from 千駄木 萌 : Title : 風邪、大丈夫？)

(千駄木？彼女からメール貰うの久しぶりだな…)

そんな事を思いつつも、俺はメールを見た。

(熱、下がったあ？笑

高萩君が休んだ日の分の授業で書いたノートは、私が見せてあげるから早く良くなってネ！それじゃ、バイ×2！)

(何故俺とあまり親しくないのに彼女はこんなにしてくれるのだからか)

と、俺は思ったが一応、

(ありがとう…。)
と、打って返信した。

俺はようやく熱が下がり、久しぶりに学校に登校した。福本は相変わらず、イジられキャラだった。俺は少し笑って、横目で成を何となく見た。

しかし、成はいつもの成では無かった。その証拠に、俺を発見すると自ら近付いてきて、

「放課後、話がある。」

と、一方的に俺に話をつけて去っていった。

言われた後、俺の頭の中はクエツションマークで一杯だった。取りあえず、放課後に成が重要な話をしてくるのは解った。

そして、約束の放課後。俺は成に連れられて、学校近くの駄菓子屋に行った。駄菓子屋はテーブルと椅子が設置されていて、良く俺らの学校の生徒の溜り場に利用され続けている。この日は、前もって成が予約してあったのかテーブル席が空いていた。俺らは、対面に着席した。

成は、一息ついてから口を開いた。

「お前に話がある。……………千駄木とお前は、どういう関係なんだ？」

俺は正直、成が何を言っているのかが解らなかった。

「成…一体どうしたんだよ？」

と、俺が言った瞬間…

(バコッ!!)

…俺は、よろけて倒れた。

成は右拳を戻して、肩をきらしていた。

口の中が苦く感じた…。口の端っここから赤い液体が流れた。

「な、成?!」

「最低だな…下衆野郎!!」

成はこの言葉を大声で言っつて、静かに駄菓子屋から出ていった。

俺は、止血しながら何故、彼は俺を殴ったのかを考える事となっつてしまっつた…

f r i e n d s 6 : お互いに深まる関係へ… (前書き)

高萩は、昨日成増に殴られた事を潮見に話す。潮見は話を聴き終わるとクスリと笑った。何故、彼女は笑ったのか高萩には解らなかったが彼女の口から答えが出される。

一段落した後、高萩は潮見にある御願い事を頼まれる…

f r i e n d s 6 : お互いに深まる関係へ…

俺は、成に殴られた。

何故、彼が俺を殴ったのかは不明のまま。別に成に殴られて奴の事を嫌いになった訳では無い。けれど、その殴った理由が解らない以上、彼には話しかけ難い。

奴に殴られた翌日。俺は、授業中に腹が痛いと言いついて教室から抜け出し、保健室に行く素振りをして潮見のいる特別教室へ足を運んだ。何故か、この頃の俺は彼女と話す機会が多いような気がするが…。

今日の特別教室にいた人は、潮見だけだった。俺を見ると彼女は、読んでいた小説を綴じて椅子から立ち上がった。

「どうしたの？授業受けないの？」
と、潮見が言った。俺は取りあえず、授業をサボって出てきたと話してから本題である昨日の出来事を話した。

話を聴き終わった潮見はクスリと笑った。俺は、潮見のその姿が不

思議に感じた。

「な、何？」

「あ、いや…高萩君は鈍感だなあーって思って笑っちゃった。ゴメンね。」

と、潮見が慌てて言った。

「鈍感？何が？」

俺は疑問が募るばかりだった。そんな俺の疑問顔を見ていた潮見は、溜め息について少し置いて言った。

「恋だよ、高萩君…。」

俺は混乱した。

コイ？この“恋”の事なのか最初解らなかった。

「へっ？こ、恋…だって…？」

「そう、恋。成増君は千駄木さんの事が大好きで、高萩君が千駄木さんと仲良くしてた事にヤキモチを妬いていたんだよ。」

「はあ…。」

俺は、潮見が出した驚きの解説にただ生返事するだけだった。潮見は、窓を見て思い更けながら言った。

「良いなあ…あたしも恋したいなあ。」

「恋ねえ…。てか、ヤキモチ妬いたぐらいで殴る事は無いだろうけ

ど。」
「フフ、それも一里あるね。」

潮見が自然に笑っている……。やっぱり、彼女には笑顔を絶やさずいて欲しい……

しばらく彼女の姿をブーツと見ていた俺に、

「ねえ…高萩君？」

と、潮見が不意に話し掛けてきた。

「え？何だい、潮見？」

俺がそう返事すると、潮見は少しだけ不機嫌になった。

「高萩君…また“潮見”って言ったあ！あたしの事を“麻衣”って呼んでって何回言えば解ってくれるの？」

と、言って小さく頬を膨らませてそして、徐々に微笑んだ。

俺の中の疑問の一つに“何故、潮見は俺に下の名前を呼ばせたいのか？”がある。別に彼女と付き合って訳では無いし、かと言って幼馴染みでも無いから疑問である……。

「……………萩君？ねえ、高萩君？聴いてる？」

「えっ?!」

潮見の声で、我に返る俺。

「また、ブーツとしてたあ！」

と、潮見に注意された。

大抵の人もそうだが、俺も会話中に考え事してる時は相手に返答

がろくに出来ないのだ。これも、僕から友達が去る原因の一つだと思う。

「ホントゴメンな！で、何かな潮…おっと麻衣だったな。」

潮見は俺のおかしい言動に少し笑ってから少し経ち、顔を下に向けてながら小さな声で言った。

「た…高萩君って…バレンタインデーの日は…あ、空いてる？」

「ああ…空いてるけど、何かあるの？」

すると、潮見はうつ向いて体をモジモジしながら、たどたどしく言った。

「2月14日は、丁度あたしの誕生日なんだあ。でさ…そ、その…良かったら高萩君…その日あたしの家に来て…、一緒にいて欲しいなあ…。」

「えっ?!」

…信じられなかった。

潮見の彼氏でも無い俺が彼女の誕生日を彼女から招待されるとは…。

「だ…ダメかなあ？」

「べ、別に…良いけど…。そ、そっちこそ大事な誕生日に…お、俺

みたいな奴に祝られて良いのかい？」

驚きのあまり、俺の方も言葉が震えてしまった。潮見は顔を赤らめて小さくコクリと頷いた。

「…ウン、高萩君に祝って貰えるならホント嬉しいし…。じゃ、じゃあ…バレンタインデーに、あの“公園”で13時に待ち合わせでどうっ。」

俺はその時間で了承した。

「解った、必ず行くよ。もしかしたら俺の所為^{せい}で最高の誕生日にならないかも…。」

「アハハ、そうかもね。」

「フツ…そう言うか。じゃあ、行かない事にしようかなあ？」

「ゴメン、ゴメン！ホント冗談だから！必ず来てよあ。来なきゃ泣いちゃうから、しかも大泣きだからネ！キヤー！！！」

……………。

こうして、俺は2月14日に人生初となる、女子の家に上がる事となった。まあ…今、潮見となら俺は“友達”になれるかもしれない。

f r i e n d s 7 ・譲れぬ思い…（前書き）

今回は成増の話です。

f r i e n d s 7 : 譲れぬ思い…

俺は、恋をした。相手は、クラスの中で結構モテる千駄木 萌さん。

ああ…愛しいよ、君が好き。

俺が高校に入学して、最初に女子で声を掛けられたのが彼女だった。たわいもない話だったけど、彼女の天真爛漫な笑顔に俺はドキッとしたんだ。それから彼女の事を意識し始めてもうすぐ1年が過ぎようとしている。

俺は、彼女に告白しようと思った…けど、その決心も直ぐに崩壊した。

アイツだ…アイツが彼女の周りにいるから…出来ないんだ。彼女に告白する時は目障りだけどアイツは俺の…友達なんだ。

高萩荊太郎…お前がいるから俺は彼女に告白できないんだ！

なあ…高萩、高校に入って約1年。お前は何回彼女に話し掛けられた？数えられる程度だろう。俺の方が彼女と沢山話しているから優勢…のハズだった。

なのに、奴と話している時の方が彼女が自然な笑顔でいて一段と可愛く見えたのさ…。俺と話していても、彼女はそんな顔をしない。何故…何故さ！俺より高萩の方が良いっていうのか？絶対に有り得ない！アイツに俺が負けてる要素は何一つも無いのに…彼女は俺に

振り向いてくれない。いつも高萩を見つけると積極的に話し掛けている彼女。

俺は我慢出来なかった。何故、彼女に話し掛けられてから俺より日が浅い奴の方が彼女と仲良くしているのか信じられなかった。だから、あの日は俺は奴を呼び出し、罵声を浴びせて更に奴を思いつきり殴った。フツ…良い気味さ。

これで奴は解つただろう。もう俺の恋路は誰にも邪魔させはしない。

千駄木さん…好きだ、本気で愛してるよ。

f r i e n d s 8 : 恋する乙女。(前書き)

今回はもう一人のヒロイン、潮見麻衣の話。

friends : 恋する乙女。

高萩君： ホントに来てくれるのかなあ、正直不安だなあ…

あれから高萩君は、サボっている所を先生に見つかって強制連行。でも高萩君は、部屋から出ていく時にニツと笑っていた。きつと、あたしを安心させようとしてたんだと思う。ホント優しいな…つてあれ？あたしつて、もしかして…高萩君の事を…んな事はないよネ、アハハ…。

……………えっ?!あたし、ホントにこ、恋してる?!あの高萩君に?

まさか…ね…。

嘘でしょ?嘘だつて言つてよあたし!中学時代、あの出来事が起き
てからあんなに“もう恋愛なんてしたくない!!!”つて言つてた
あたしが本気で高萩君に惚れているなんて…。

嘘つて思う度に胸が苦しくなるあたし。これは隠せないかも…。

でも、高萩君は千駄木さんと結構良い感じだし…今あたしが高萩君
に告白しても叶わぬ恋で終わっちゃう…。

あ、あたし…どうしたらいいの?

高萩君に気持ち伝わらないし…このままあたしの恋は終わっちゃ

うの？

…でも、あたし“もう恋はしない”って決めたんだっけ。

高萩君は、あたしの大切な友達なんだよ！高萩君は、あたしの大切…な…とも…あれっ？

何で…何で…あ…アハハ…あたし…何で頬が濡れてるの…？

「うっ…くっ…ひっく…うわぁーん！！」

自分の気持ちにずっと背いていたから…苦しくて、苦しくて、到頭堪えきれずにあたしは声を上げて泣いてしまっていた…。

50

でも、あたし…泣いて自分のホントの気持ちに気付いて嬉しかった。

あたし…高萩君の事がだぁーいすき！だから…ずっとずっと…高萩君の側に居たいの…。

あたし…今度こそ本気で恋していいんだよね？いいよね！

f r i e n d s 9 : たった一文の手紙… (前書き)

潮見への誕生日プレゼントで悩む高萩に、千駄木が突如現れて…

friends9: たった一文の手紙…

(さて…困ったよ…。潮見が貰って嬉しいモンって何だろうか。)

俺は潮見へ誕生日プレゼントの事で悩んでいた。

(何をあげたら良いか見当もつかないから。ホント困ったよ…)

「あつれえ？どうしたの？そんな顔してえ。」

「うわっ！びっくりさせんなよ。」

「フフッ。」

ハナっから俺の近くにいたのか解らなかったが、いつの間にか千駄木が横にいた。

「何か考え事？」

「いや…今度ダチの誕生日があつてさ、何を買っていいか解らないんだ。」

すると、いきなり千駄木が顔を近付けてきた。

「な、何だよ？」

「フムフム…さてはそのダチは女の子だな？当たり前でしょ？でしょ？」

簡単に見破られるとは俺も成長してないな。

「女の子なら手作りのモノをあげたら悦よろこぶと思うよ。」

「手作りって…俺には無理。手先が不器用だからさ。」

「そお？じゃあ…グロスとか…」

「千駄木。」

「何？」

「あ、ありがとう…。」

俺は無意識の内に千駄木へ御礼を言っていた。

「えっ？いいんだよ、私の方からお節介してるから。高萩クンから御礼を言わなくていいんだよ！」

「そ、そうなのかい？」

「ウン！」

そう言って千駄木は、俺にとびっきりの笑顔を見せてくれた。

「…で、そのコってカワイイの？」

突然、千駄木が言った言葉に俺は正直驚いた。

「た、多分…第三者から見たら可愛いと思うよ。」

「へえ…。」

千駄木は納得したらしく頷いていた。そして、衝撃の一言を言った。

「ふーん。じゃあ…その口と付き合っちゃいなよ!」

「なっ?!」

「だってカワイイ人なんでしょ? どうして付き合いたいと思わないの?」

「それは…」

俺は言葉に詰まった。到頭、アレを言うしかないのか…。

「俺…恋愛って今ん所、正直興味無いんだ。てか、俺さ…恋愛感情持ってないんだ。だから、人を真っ向から愛する事が出来ないんだ…。」

俺の言った事に、千駄木は目を瞬まはたきながら、

「…えっ? 何それ…? じゃ、じゃあ…高萩くんって…ゲイなの?!」

「なっ?! 何でそちらの方に考えを持っていくかな、君は!」

「だってさあ、そうじゃん。高萩くんは異性に恋をする事が出来ないんだから同性愛者って事でしょ? 違うの?」

そう言って千駄木は責めかけてきたので、俺は少したじろぎながら答えた。

「俺が同性愛者なら、恋愛感情があるはずだし。てか、俺は同性愛者じゃないし！」

「あつ、そうかぁ！その通りだよね！ゴメンね！」

「まあ…許すけど…。」

俺がそう言つと、千駄木はニコリと微笑んだ。

「じゃあ、また後でね！」

と、言つて千駄木は僕の席から立ち去つた。俺と千駄木の様子を後ろで成がずつと見ていたのは気がつかなかつたが。

「はぁ…どうしようか…。」

俺は、ますます悩んでしまった。そこに鶴の一声のように蒲原が通り越しに、

「手紙って良いね。」

と、言つたので俺は手紙を書く事にした。

(潮見へ手紙って…何を書けば…。)

また悩む、俺。取りあえず一言だけの手紙にした。

“これからもずっと素顔のままですいてください。”

我ながら恥ずかしい文面に思わず噴き出した俺。潮見…こんなんで悦ぶのか？

益々誕生日プレゼントに不安が募る、潮見の誕生日2日前の午後の俺。

f r i e n d s 1 0 : 真の友… (前書き)

潮見の誕生日の日がやってきた。

高萩は潮見と待ち合わせをして、潮見家にお邪魔する事に…

friends 10 : 真の友 :

2月14日 : 土曜 : 天気 : 曇りのち降雪

世間の男女の間では今日は“バレンタインデー”であり、好きな男に女がチョコをあげる日である。しかし、俺には関係ない。俺には一つの約束があるから。

…そう、俺の真の友になりそうな奴、潮見の誕生日を祝ってやる約束。

潮見にプレゼントとして書いた、短く拙い手紙を片手に約束の待ち合わせ場所、円山公園にいる俺。公園にある時計の針はもうすぐ1の数字を指そうとしていた。

「潮見 : 大丈夫かな…。」

と、ぼやく俺の前に一人の少女が見えた。潮見だった。彼女はパークにジーンズとラフな格好だった。

「ホントに来てくれてありがとう…。嬉しいな、高萩君に祝って貰えるなんて…。」

と、潮見が言ったので少し苦笑いしながら、
「ホントに俺で良いのかよ？ホントは後悔してるんじゃないか？」
と、言った。潮見は笑顔で首を横に振って、

「後悔なんてしてないよ…。あたしは、高萩君に誕生日を祝って貰

いたって心から本当に思っていたから、エヘッ。」
と、小さく舌を出して微笑んだ。俺はその姿を見て一先ず安心した。

「じゃ、行くところか…あたしの家に？」

潮見が一息ついて放った言葉に少し戸惑った。

「だって…麻衣の家って…その…。」
「大丈夫。」

俺の言葉を潮見は遮った。

「丁度、あたしの家族は全員外出中。暫くは帰ってこないから、二人だけの誕生日パーティーがやれるよ。さ、行こっ！」

そう言った潮見にいきなり手を握られ、俺は呆気に取られた。

(潮見って…前はこんな活発な奴じゃ無かったのに…)

そう思ってる内に、俺は潮見に連れられて彼女の家に着していた…。

潮見は、玄関で丁寧な事にスリッパを用意してくれた。俺は、履き替えて中に入った。

「お…お邪魔します…。」

俺のぎこちない言葉に潮見は笑っていた。

それから俺は、潮見に応接間へ案内され、ソファアに座った。意外と心地よく、肩の力が抜けた。

すっかりリラックスしていた俺は、キッチンにいた潮見から声を掛けられた。

「コーヒー、紅茶、ジュース…どれが良い？」

「とんでもない、用意しなくて良いから。今日は麻衣が主役なんだからさ。」

と、俺は言った。それでも彼女は微笑みながらコーヒーを用意してくれた。

「わざわざ来てくれたのに、何も出さないなんて悪いから。さっ、クラッカーがあるから鳴らしてよ！」

と、潮見が言ったので俺は手元にあったありったけのクラッカーを鳴らした。

(パーン！パーン！パーン…)

「おめでとう！今日で麻衣も16歳だな。」

「ありがとう！高萩君に祝って貰えて…ホント…嬉しい…あれっ…？」

俺は、潮見が突如涙を流したので驚いてしまった。

「お、おい、大丈夫か？」

すると、潮見は涙を拭って無理に笑顔を作った。

「ウン…大丈夫だよ。ありがとう、高萩君…。」

あれから一段落して、潮見は突如何か思い出した様だった。

「あ、そうだ！あたし、今朝に手作りのケーキを作ったんだっけ。実はね…高萩君に食べて欲しくて、手間暇掛けて作ったの。」

それを聞いた俺は、更に驚いた。に驚いた。そして自分が情けなく感じた…。

（潮見が俺の為に一生懸命、ケーキを作ってくれたのに俺はこんな一文の手紙でプレゼントを済ますなんて…。）

そう思うと益々自分が情けなくて、俺は潮見の目を見れなかった。そんな俺を見た潮見が心配しているのか声を掛けてくれた。

「ど、どうしたの？」

「いや…別に何でも無いさ。」

俺は、苦し紛れに吐き棄てたように言った。潮見に心配を掛けさせたく無かったから。

「麻衣…そのケーキ…いただいて良いかな？」

俺はケーキの話に戻した。潮見は冷蔵庫からケーキを取り出し、俺の目の前に置いてくれた。チョコレートケーキだった。

「高萩君のお口に合うかどうかどうか解らないけど…」

俺は切り分けられた中から一つ貰い、少しずつ口に運んだ。

「う…美味しい…。美味しいよ…」

俺は、ホントに美味しかったので思わず声を洩らしてしまった。

「えっ？ホントに？うわあ、嬉しいな！高萩君に“美味しい”って言われると作った甲斐があった！」

と、言った潮見は嬉しそうな満面の笑顔をしていた。俺の方も、何だか幸せな気分になっていた。

（もう躊躇う事は止めた。）

意を決した俺は、潮見に宛てた手紙を無言で潮見に渡した。

「えっ？何これ…手紙？」

俺は、うつ向きながら言った。

「たった一文しか書いてないけどさ…」

手紙を開き、読んだ潮見は微笑みながら、

「嬉しい！ありがとね、高萩君。」

と、言ってくれた…。

ケーキも食べ終り、俺らはホントたわいもない雑談をしているのが

楽しくて…かなりの時間が経ったと思う。俺と潮見が時間を忘れて話して盛り上がったその時、

（ボーン、ボーン…）

と、時刻を知らせる音色が聞こえた。時刻を見ると午後7時を回っていた。

さすがに、こんな時間だ。俺は帰ろうとした。しかし、外は雪がちらついていて、更に少し積もっていた。

「ああ…どうしよう。」

俺は、困ってしまった。乗ってきた自転車は走行不可能だし、無理矢理乗ったとしてもこれじゃあ危険で事故る可能性だってある。すると、外の銀世界を見ていた潮見が驚きの言葉を言った。

「良かったら高萩君…あ、あたしの家に泊ってく？」

「えっ?!」

俺の頭の中では、道德と欲が戦っていた。

(クラスメートである女子の家に男子が泊まるなんぞ言語同断な行為。しかし、この雪の中を何時間も掛けて帰るなんて無謀だし…。)

「…萩君…高萩君…大丈夫？」

「へっ？」

またポオーツとしてた俺。気がつくとな俺を潮見が心配そうに見ていた。

「外はこんな様子だし…高萩君の家はここから遠いし、帰るなんて

無謀だよ…。あたしの家族の事なら前に言った通り、数週間は帰って来ないから大丈夫だよ！」

しかしまだ、俺の決断に道德心が邪魔をしていた。

「で、でも…一応俺は麻衣のクラスメートの男子だぞ…。家の人がいなくて麻衣だけしかいないこの家に俺を泊めるなんて言語同断な行為だろ。それに麻衣って…」

「大丈夫。」

「えっ？」

潮見は真面目な顔付きだった。

「高萩君は何もしないって信じてるから。」

(な、何もしないって…ハア…俺って変態扱いされてたのか?)

そう思いながらも俺は、そんな彼女の言葉に甘えて泊まる事にした。一応、家族に連絡を取ってから。

「嬉しいなあ 高萩君がウチに泊まってくれるなんて！」

潮見はさっきからこんな調子だった。俺はソファ―に座ってた黙って外を見ていた。すると、潮見が突如言った。

「お風呂…どっちから入る？」

(ああ…風呂の問題か…。)

「細かい事は麻衣に任せるよ…。」

「じゃあ…高萩君が先に入ってよ。」

「了解。」

潮見に俺は脱衣所に案内されて、脱衣所の手前で潮見と別れた。

「ふう…潮見には厄介になっちゃってしまったなあ…」

と、思いつつ脱衣所で服を脱いで風呂場に入った。

頭を洗ってお湯で流そうとした時、突如ガラツという音が聞こえ、潮見が入ってきたのが解った。次の瞬間、俺は信じられない言葉を耳にする…。

「高萩君？背中…流してあげようか？」

「な?!」

(何ということだ…。)

潮見がこんな言葉を言つとは思わなかった。

「ひ、必要無いから…」

「別に遠慮なんてしなくて良いよ…」

俺は驚き、言葉が一瞬だけ詰まってしまった。

「てか、麻衣って何て言うのか…その…気にしないのかよ？」

と、俺が何^{つか}と潮見の声色が変わったのが解った。

「別に…気にしない…。」

俺は言葉が出なかった…。

潮見の哀しい声…。今まで性的な事で家族から苦しめられた彼女。弱くて…何も出来ない彼女…やるせない気持ちが募る…。

彼女は一人で苦しんでいた…。それを解ってあげられなかった俺って…何だよ？情けない奴…

「うっ…うっ…ぐすん…」

「し、潮見?!」

そっだ、今一番苦しんでいるのは潮見の方なんだ。

「潮見…。」

「…えっ？何…高萩君…」

「俺達…ずっと…ずっと…友達だからな。潮見が嫌な事にあつたとしても俺はいつでも話し相手になるから。何でも話せよ！」
「…うっ…あ、ありがとう…高萩君…。」

あんな事を言ったのは生まれて初めてだった。でもさ…

俺は潮見の真の友達になれると思うんだ…いや、なるんだ！

f r i e n d s 1 1 : 次 の 展 開 … (前 書 き)

高萩が潮見家で朝を迎えた所から始まる。

f r i e n d s 1 1 : 次 の 展 開 :

2月15日：日曜：天気：晴

俺は、朝の陽射しで目が覚めた。隣を見ると潮見がまだ寝息を立てていた。俺は起こさないように、ベッドから起きて寝室を抜け出した。

俺が居間で荷造りをしていると、潮見が目を擦りながら起きてきた。

「おはよう、麻衣。」

「おはよう、高萩君。」

「昨日は、ホント助かったよ。泊めて頂けてさ。」

「そんな…気にしなくていいよお。しょうがなかったんだし…。」

潮見は少し照れていた…。何で照れているのかは解らないが。

「んじゃ、荷造り終わったし…帰るよ。」

と、言っただけで俺が立ち上がった時、潮見は朝食をご馳走すると言った。俺は遠慮したが、潮見はキッチンで勝手に作り出してしまったので仕方なくテーブルに座った。

数分後、俺の前に豪華な食事が現れた。トーストとバターにケチャップの掛ったスクランブルエッグ、サラダに牛乳…まさにホテルの朝食だった。金を徴収しても良いぐらいだ。

「さっ、食べようよ。」

「じゃあ…いただきます…。」

俺は、何故か不安で恐る恐る口に運んだ。口に運ぶと幸福な瞬間がやってきた。

「う…美味しい！」

「そお？あたしも腕をあげたかな？」

「ありがとう…こんなにしてくれて…。」

俺は、潮見に感謝した。潮見は微笑んでいた。

「いえいえ、どういたしまして。あたしの方こそ…昨日はホントにありがとう…。」

それからというもの、俺は潮見と少し雑談して潮見家を跡にした。

（ああ…楽しかったなあ。）

帰り道、俺は染々と感じていた。

（まさか、こんな展開になるとは思わなかったしな。しかし…）

昨日の事だ…。俺はホントに彼女にとって必要な存在なのかと思う…。勝手に潮見へ友情を押し付けたような感じがしてならなかった。そうだとしたら、潮見には申し訳ないと思う…。

その時、ポケットに入っていた携帯が振るえていた。俺は携帯を取

り出して見た。

（今、会えない？話したい事があるんだけど…。）

送り主は、中学時の仮ダチ、佐伯さえき 那奈ななだった…。

f r i e n d s 1 2 : 彼の死 : 私の思い。 (1) (前書き)

この話から数話、高萩の中学時代の仮ダチである佐伯と榮波の中学時代の話が続きます。暫くは、高萩や千駄木、成増、潮見などは出てきませんのでご注意下さい。

f r i e n d s 1 2 : 彼の死 : 私の思い。 (1)

.....。

... もう... イヤだよ

こんな残酷な結末おわりなんて... イヤ...

榮波君が…死んだ。

昨日の朝、私はいつもより早く高校に着いた。昇降口で上履きに履き替えて階段を上り、私は教室に到着した。

教室には、既に榮波君がいた。

…しかし私が見たのは、既にロープで首を吊っていた状態の彼だった…

「榮波君っ!!」

私は、急いで職員室に先生を呼びにいった。

「せ、先生！」

私の青ざめた顔を見た先生は感付かれたのか急いで職員室から抜け出していった。

私は無意識に床にへたり込んでいた。

「ねえ…夢…だよね…？」

私は、自分の手で少し強めに床を叩いた…。ヒンヤリとした冷たい感触と同時に、手に鋭い痛みを感じた…。この瞬間…私は悟った…。

“これは現実なんだ”と…

「い…イヤあああ！！！！」

泣き崩れた私の意識は、徐々に薄れていった…

目が覚めると、私はいつの間にか誰かに保健室のベッドに運ばれて
いたようで、側にはうつ向いてる先生が座っていた。

「…ううん…せ、先生？」

「佐伯…気が付いたか。」

先生は…虚ろな目をしていた。私は怖くなり、恐る恐る質問した。

「先生…榮波君…死んでないよね…？」

しかし、運命は残酷だった…

先生は、黙って首を横に振った。

「亡くなったよ…搬送先の病院で…」

ショックだった…。必死に声を出そうとしても出なかった…。

先生は泣きながら静かに言った…。

「榮波は…もう還ってこない…」

私は目の前が真っ暗になった。

彼が亡くなった日のその夜、私は堪えきれず声を上げて号泣した。
枕が涙で濡れていた…

（榮波君…どうして…）

私が、彼の死に人一倍悲しんでいたのは理由があった。それは…

榮波君は、私が以前から…好きだった…うっん…大好きなヒトだったから…

… 中学に入学した頃から、
榮波君はクラス内や他クラスの同級生で構成されたグループによつて酷いイジメを受けていた。公立の高校に入っても彼に対するイジメは止まらなかった。

彼は耐えていた。ただひたすら、耐え続けていた…。

私と榮波君は中学、高校と一緒に、更に同じクラスだった。

彼が同級生らにイジメられていたのは知っていた。けれど、私はそのイジメに対して見て見ぬフリをしていた…。彼を助けようとする、今度は私がイジメのターゲットにされてしまうから…。

正直、自分が情けなかった。榮波君から“卑怯者”と言われても仕方がなかった…。

だって過去に、榮波君が私を助けてくれた事があったから…。

…それは、中学2年の時だった。

私はクラスの女子の1グループからイジメのターゲットにされた…。

私が、そのグループの人達に何もしてないのに、

「あの娘、少しいい子ぶつてて生意気だから。」
という理由でいじめられていた…。

私に対するイジメは、徐々に酷くなっていった。私の持ち物が盗まれていたり、教科書が刃物でスタスタに切り裂かれていたり、私の机の上に菊の花が添えられていたこともあった…。

「もう…イヤ…。」

毎日、クラスメートから視られる嫌な視線…。

「あーあ、またあの子いじめられてるよ。」

「別に…俺らには関係ねえじゃん。関わると面倒くさいからアイツから無視しようぜ。」

そう言われて、私はイジメに参加してない周りの人達に助けを求めても、無視され続けていた。挙げ句の果てに、担任の先生までも私の事を無視し始めたのだ。

だけど… たった一人だけ… 私を無視せず優しく接してくれたヒトがいた。それが… 榮波君だった。

ある日の放課後、私は筆記用具などが入っていた通学鞆かばんをグループの一人に隠されて、必死に探していた。

「私の鞆、一体どこにあるの？」

その時、後ろのドアから教室に誰かが入ってきた。私は、あのグループの一人がやってきたのかと思い、過剰反応してしまった。

「だっ、誰?!」

すると、相手はゆっくりとした口調で返してきた。

「えっ… えっと… その… 忘れ物を取りに…」

その声を聞いて私は、ひとまず安心した。入ってきたのは榮波君だった。

「… 榮波君？」

「へっ？ そっ… そうだけど… 何か？」

「うっん… 何でもない。」

「あの… 佐伯さん？」

「はっ、はい？」

私は少し驚いた。初めて榮波君に、話し掛けられたのだから。いつも周りを気にして、自分から発言しない彼が…

「佐伯さんは…何してたの？」

「えっ、わ、私？」

「うん。」

すっかり、キョドっている私に飾らない自然な笑顔で話す彼…。

私の初恋は…始まった。

f r i e n d s 1 3 : 彼の死 : 私の思い。 (2) (前書き)

教室には佐伯と榮波：二人しかいない放課後。榮波は、隠された彼女の鞆と一緒に探すと言った。その榮波の優しい気持ちが佐伯は嬉しくて…。

f r i e n d s 1 3 : 彼の死 : 私の思い。(2)

「ほ、ホント…どこにあるのかなあ？」

私は、榮波君の事が直視出来なかった。見ると見とれてしまいそうだったから。だから、いきなり鞆探しを再開しようとした。

「佐伯さん？」

「えっ？な、何？」

振り向くと彼は、そんな不自然な態度をとった私を見つめていた。

「僕も…探しても良いかな？佐伯さんの鞆。」

「えっ？」

彼からの思いがけない言葉に、私は驚く反面…彼の気持ちが嬉しくて…嬉しくて、しょうがなかった。

「二人で探した方が、早く見つけられる。」

「い、いや…でも…」

私は、彼の気遣いに対して申し訳ない気持ちで一杯だった。

「ご、ゴメン…。やっぱ、余計なお世話だね…。」

彼は、申し訳なく謝ってきたので私は慌てて言った。

「あつ…うつん、余計なお世話じゃないよ。でも…。」
「でも？」

私はやはり、彼に迷惑を掛けなくなかった。

「こんなくだらない事に榮波君を手伝わすなんて…出来ないよ…。」
私は、彼のその優しさが嬉しかった。だって、私の事を考えてくれたヒトは家族以外に今までいなかったから。

でも、彼に迷惑を掛けなくなかった。これで私が彼に迷惑を掛けてしまい、もう二度と彼が私と話してくれないかと思うとイヤだし…怖かったから…。

「榮波君の気持ちは嬉しい…嬉しいよ。でも、これは私が探さないといけない気がするの。だから…」

「嫌だよ。」

「えっ?!」

彼の言葉に驚き私が振り返ると、彼は真面目な眼差しまなびをしていた。

「嫌だ。今、目の前の人困っているのに無視するなんて…僕には出来ない!」

「さ…榮波君…」

“嬉しい”

私が彼の気持ちに対して感じた事。

「ほら、早く探そうよ!暗くなる前に。」

「…うつんっ!」

彼の全ての言葉に込められたホントの優しさ……。私は嬉しくて…いつの間にか私の目から涙がとめどなく溢れてた。榮波君がボヤけて見えていた。

「あ…あり…ありがとう…榮波君。」

私は泣きながら、必死で感謝の気持ちを伝えた。彼は、頬を赤らめていた。

「い…いいよ、感謝しなくて。」

「でも…」

「さ、さあ、探そうよ！さて、どこだ…鞆。」

そうやって彼は、私の鞆を探し始めた。

私の為に一生懸命に鞆を探してくれている榮波君…。そんな彼の優しい姿を見て、私は自分では気付かない内に、彼に聞こえない程の小さな声で一言呟いていた…。

「
∴あなたが好きです。
」

f r i e n d s 1 4 : 彼の死 : 私の思い。 (3) (前書き)

ようやく佐伯の鞆が見つかり、二人は安心する。

鞆が見つかり帰ろうとした榮波に、どうしても御礼したい佐伯は、彼を呼び止めた。そして彼女自身、今まで言った事の無い、一番大胆な御礼を言う…。

friends 14：彼の死：私の思い。(3)

「あつ…あつたあ!!」

私の鞆は、探し始めてから約2時間…ようやく見つかった。埃まみれで、みすばらしかった。ほこり

「榮波君…ホントにありがとね。榮波君がいなかったら、見つかるまで更に時間が掛ってたかもしれないから…」

私が御礼を言うと、彼は笑って言った。

「僕はただ、目の前に困った人がいたから助けただけで…別に御礼を言わなくて良いよ。それじゃ、また明日。」

と、言つて彼は私に手を振ると教室を出ていった。私は、彼に何かしらの御礼をしなくちゃと思い、走つて彼を呼び止めに行った。

「榮波君っ!!」

彼の姿を下駄箱で見つけた時、私は精一杯の声で呼んだ。

(< >) 余談だが、その時の私は必死で、こんな顔をしてたと思つ。

「何?どうしたの…そんな一生懸命な顔して…?」

榮波君が、心配そうな顔をして尋ねてくれた。
私は、途切れ途切れだったけど息を整えながら言った。

「あのね…ハアハア…私、榮波君に…どうしても御礼…したくて…」
「いいよ、元々僕から勝手にた事だしさ。それよりも…制服…汚れちやってるよ。」

榮波君に言われてよく見ると、私の制服は埃まみれで凄く汚れが目立っていた。

「…でも、榮波君だって。」

「…ああ、そういや僕も無我夢中で探してたから随分と汚れるまで気がつかなかったよ。ヒトの事を指摘する前に、自分のを確認していないから…ったく、ダメな奴だな、僕。」

そう言って、榮波君は苦笑いした。私は、何か自然に笑ってた。

それから私は、榮波君といろんな話をした。テストや友達の話など。私は彼と話している中、御礼の事を考えた。ようやく決めただけど…少し言うのが恥ずかしかった。

「それでね…榮波君。明日の土曜…って用事とか入ってる？」

私が恐る恐る尋ねると、榮波君は首を横に振った。

「特に…予定は無いけど。」

それを聞いてホツとして、私は胸をなでおろした。

「じ、じゃあ…さあ…私と…1日デートしよう！」

榮波君に言った瞬間、物凄く恥ずかしくなった。今まで、こんな可愛い言葉なんて言った事が無いから、もう頭の中は真っ白だった…。

「で…デート…」

榮波君は、明らかに困惑していた。

「私じゃ、ダメ…かなあ？」

私は、彼が迷惑だったら諦めようと思った。

でも、神様は私にチャンスをくれた。

「…相手がこんな僕でホントに良かったら…宜しくお願いします。」

私は、彼のこの言葉を聞いた瞬間、凄く嬉しくて心の中で舞い上がっていた…。

「ありがとう！榮波君。じゃあ…土曜日の朝10時に駅前の喫茶店で待ってるよっ。」

「…解った。」

この時の私は、榮波君のホントの気持ちを知らずにただ彼とデート出来る嬉しさで舞い上がっていた…。

f r i e n d s 1 5 : 彼の死 : 私の思い。 (4) (前書き)

この話から高萩と、もう一人…驚きの人物が出てきます。

佐伯と榮波のデート。そして、デート後の2人の思いはどうなったか…。どうぞ、ご覧下さい。

(デートの内容は詳しく書かれてません。)

f r i e n d s 1 5 : 彼の死 : 私の思い。(4)

約束の土曜日 : 榮波君とのデート当日。

今日1日、私は榮波君とデートだと思つと…何だかドキドキしてきただ。普段、オシャレなんて気にしない方なのに、今日の私は妙に張り切つて自分なりにオシャレしていた。

肩まで伸びた髪を丁寧に櫛でとかして、この日に用意したりボンを付けた。服も、普段着ないスカートを着用。塗れたかったのか、何故かママのピンク色のグロスを借りた。これで準備は出来た。

約束の時間までまだあるけど、私は待ちきれなくて家を出た。

この時は、秋から冬に季節が移り変わる時期だった。首にマフラーをして、上着を一枚はおり寒さ対策はバッチリ。今日、私は好きなヒトとのデート…と考えると胸の鼓動が徐々に高まった。

待ち合わせ場所の喫茶店には、約束の30分前に到着した。店内に客がいたが、少数だった。私は、温かいミルクティーを注文して外の景色をボンヤリと眺めていた。

時計の針が10を差した時、

(カランカラン…)

と、音がした。私が後ろを振り返ると、そこには榮波君がいたのだ。

(さ…榮波君…。)

彼は、キャップを被っていて黒いジャンパーをはおり、下はジーンズというラフな格好だった。

「…あつ、佐伯さん。待たせてゴメン！」

と、彼が謝ってきたので私は首を横に振って、

「ううん、全然待ってないよっ！」
と、笑顔で答えた。

喫茶店を出た私達は、とりあえず駅に向かって歩きだした。デートなど初めてだったので、何を話していいか解らず、
「寒くなってきたけど…、風邪とかひいてない？」
など、変な質問しか彼に出来なかった。彼は、私の質問にちゃんと答えてくれた。けど…彼は時々、哀しそうな顔をしていた…。

駅の改札で偶然にもクラスの男子、高萩君を見掛けた。

「高萩くーんっ！」

私は、彼の後ろから声を掛けた。

「ん…ああ、佐伯…それに、蔵瀬。どうした？」

“蔵瀬”は、榮波君の下の名前だ。中1に彼の名前を初めて知ったとき、私は“一風変わった名前だなあ”と思った。

「高萩君こそ、どこか行くの？」

「ああ…ちよつと。で、佐伯は蔵瀬と何してんの？」

「えっ?!」

(デートです…なんて恥ずかしくて言えない。)

私は、顔が熱く感じた。

「萩ちゃん、時間は平気なの？」

榮波君が、突然口を開いた。

「…ああ、ヤバいな。んじゃ二人共、楽しいデートを。」
「なっ?!」

私が言う前に、彼は改札を抜けて行ってしまった。彼には、全てお見通しだったんだと思うと更に恥ずかしくなった。でも、お見通しされて逆に嬉しかった。

「さっ、行こうよ。佐伯さん。」

私が振り向くと、榮波君は笑顔でこっちを見ていた。

「あっ…」

その瞬間、更に彼の事が好きになってしまった。

「…大丈夫、佐伯さん？」

「…ふえ?!あ…うんっ、大丈夫。榮波君、行こっ!」

そう言っつて私は、榮波君の手を握った…。

午後7時。私は、家に到着した。

榮波君との初デートは、とっても楽しかった。水族館やバツティン
グセンターに行き、そして…夕暮れの公園で二人きりで話した。

榮波君はデートしてる間、いろいろ私に気遣ってくれて嬉しかった。
彼はホント優しかった。デート中、私はドキドキが止まらなかった
…。

彼への好きな思いが私を苦しめていた。

私は自分の部屋に入って、ベッドに潜り込んだ。

「榮波君、好き…大好きだよ…。」

私は、小さな声で呟いた…。

「はあ…。」

佐伯さんとのデートの帰り道、僕は溜め息ばかりついていた。

(別に彼女とのデートが楽しくなかったワケじゃない。彼女は、優しく性格も良いし、とても可愛い。…でも)

僕は、心の中で葛藤していた。

(僕は、好きじゃない人とデートしたのだ…。佐伯さんに対して…悪いと思ってる。彼女は、素直に僕とデートしたかったらるうに…。)

その時、後ろから誰かに声を掛けられた。

「く・ら・せつ。」

僕はその声を聞いて、ハツとした。振り向くと、僕は驚いて目を大きく開いた。

「ま…麻衣…。」

僕の目には、微笑みを浮かべた無垢な少女の姿が映っていた。

f r i e n d s 1 6 : 彼の死 : 私の思い。 (5) (前書き)

榮波の前に現れた少女、沼田麻衣。彼女とは昔から友達だった榮波。ただ、沼田に対する榮波の思いは“友達”として…じゃなくて。

friends 16 : 彼の死 : 私の思い。(5)

「何よ…その驚いた顔は？さては…何故、あたしがここにいるのか、でしょ？」

僕の目の前にいる少女の名は確か…沼田^{ぬまた} 麻衣^{まい}。彼女は昔、僕の家
の近所に引っ越してきた家族の一人娘だった…。

「麻衣…何故ここに…。」

僕が尋ねると、麻衣は少し顔色が曇った。

「ま、麻衣…？」

「…実はさ…あたしの両親、離婚したんだ。」

「そうなんだ…って、ええっ?!」

(麻衣の両親は、あんなに仲が良くって、近所で評判になる程の夫婦
円満なはずだったのに…何故?)

疑問が積もるばかりだ。

「…で、今ね…あたし、お父さんの家にいるんだあ。」

麻衣の家庭環境は、彼女の父親がここいら辺では名家と称されてい
た沼田家へ嫁ぎ、彼女の父親は沼田家の婿養子になった。て、いう
ことは…

「麻衣…名字が変わるんだ。」

麻衣は、コクリと頷いた。

「うん。お母さん家の名前の“沼田”からお父さんの旧姓“潮見”
に変わる…だから、あたしの名前は潮見^{しおみ} 麻衣^{まい}になるの。」

(潮見…か。)

「でね、蔵瀬…。」

「うん？」

僕が振り向くと麻衣は、哀しそうな顔をしていた…。

「あたし…この街から去るの。」

「えっ?!」

麻衣は、僕と同じ街に住んでいたが通っている学校は違った。

「…そうなんだ。」

「ねえ…蔵瀬。悲しい顔しないで…。あたし…辛くなるじゃん。」

「あ…ゴメンな…ゴメン…」

麻衣が、歪んで見えた、ああ…

「蔵瀬、いつまでも…いつまでも友達だから…友達だからネ！」

麻衣がニコツと笑った。僕は…どうすれば良いんだ？

「ま、麻衣…あのさ…。」

「ん、何？」

僕の前には、飾らない笑顔の麻衣…。

言っぞ…

“麻衣が好きだから行かないでくれ!”

と。

「ま、麻衣……」

「おーい、麻衣。そろそろ行くぞ。」

時間切れ……。

「あ、お父さん。……じゃ、行くね。」

「あ……うん。げ、元気だな！」

「うん！」

そう言っつて、麻衣は僕の前から去っていった……。

…麻衣がもう行ってしまっても、僕はその場から動けなかった。夜になって周りが見えなくなつて良かったと思う。涙でクシャクシャな顔を、見られなくなつたから。しかし、僕が泣いたつて彼女は決して戻つてこない…。だから…空に向かって叫ぶんだ。

「麻衣っ！僕達い、ずーっつと友達だからなあ！！！」

きつと、僕の声は彼女には届かないだろう。だけど、彼女の心には届いて欲しかったんだ。

f r i e n d s 1 7 : 彼の死 : 私の思い。 (6) (前書き)

時は過ぎ、佐伯達は中3になり、受験生になった。

しかし、佐伯は大好きな榮波の事ばかり考えてしまい、勉強どころではなくなっていた…。

f r i e n d s 1 7 : 彼の死 : 私の思い。(6)

…あれから月日が経ち、私たちは受験生になった。目標の高校に合格するため、日夜勤勉していた。

(はぁ…辛いなあ。また、榮波君とデートしたいな！)

そんな事ばかり考えている私。当然、私の学力は大幅に低下していた。

榮波君とは、あのデートの翌日から良く喋るようになった。でも、榮波君は私と話しているとき、たまに悲しそうな顔をしていた…。

(榮波君…私の事をどう思ってたのかなあ。)

いつの間にか不安になっていた私。より一層、受験勉強に身が入らなくなっていた…。

そろそろ本格的に、受験する高校を選ばなければならなくなったある日、私は榮波君に話し掛けた。アレを聞くために…

窓際でボンヤリと外の景色を眺めている榮波君。私は、勇気を出して聞いてみた。

「ねえ、榮波君。」

彼が、私の声に気がつき振り向く。

「ん、何？佐伯さん。」

「榮波君はさ…何処の高校を受けるの？」

そう…私は榮波君と一緒に高校に行きたかった。レベルが低くても彼と一緒にならそれで良いの！…それほど彼の事が大好きで、心から愛していた。

「まだ具体的には決まってるけど…公立に行く予定。」

「そうなんだあ…。」

彼の目指すのは公立高校。一緒に行けたらどれだけ嬉しくて毎日が楽しくなるのか…そればかり考える毎日。私は、早く彼が行く高校が知りたかった。

やがて、彼は公立の木原高校を選択した。偏差値はちょうど平均だった。私も、目標校を木原高校にした。

それから私は、落ちた成績を元に戻そうと必死に勉強した。全ては榮波君と一緒に高校に合格するため…

そして、公立一般試験当日が訪れた…。

私は、持てる力を全てこのテストに注ぎ込むつもりだ。

榮波君は、もう受験会場に行ったらしく私もそこへ向かった。

「それでは…始めて下さい！」

この声に伴い、私と榮波君を含む受験生達は、テストという名の聖戦へ向かっていった…。

合格発表当日。私は、榮波君と一緒に見に行く事となっていた。私の胸のドキドキは最高潮だった。半分は、私と榮波君が合格するか、という不安からのドキドキ。もう一つは…

「…佐伯さん？」

「えっ？な、何、榮波君。」

「一緒に合格してれば良いね。」

…私の側にいる彼の自然な笑顔。私をドキドキさせるもう一つの原因。

「ええーと、3214…3214と…あ、あった!！」

合格掲示板には彼の受験番号があった。

「おめでとう!！ああ…私の番号、あるかなあ。」

次は、私の番。私は自分の受験番号を探した。

「3284…3284…あっ!！」

私の番号は、掲示板にくつきりと書かれてあった…。

「あったあ!やったわ、榮波くん!！」

私は、無意識に彼に抱きついていた。

「さ、佐伯さん…やめようよ、周りが見てるから恥ずかしい。」

「えっ?!…あ、ああ…ゴメン!！」

私は、恥ずかしさでカーツと顔が熱く感じた。榮波君も、顔が赤くなっていた…。

「合格…おめでとう!」

「うん、ありがとう!…これからも、私達はずっと一緒だよ!」

「ああ!」

私と榮波君は、自然に抱き合った…

そして卒業式も終わり、4月になった。

「那奈あ、遅刻するわよ！」

「はあい！」

今日から私は高校生。しかも、榮波君と一緒に高校だと思つと凄く幸せだった。

…1年後、この“幸せ”が簡単に脆く崩れるなんて…今の私は思つ
筈が無かった。思いたくなかった…。

f r i e n d s 1 8 : 彼の死 : 私の思い。 (7) (前書き)

ついに、佐伯達は晴れて高校生になった。佐伯は、榮波と一緒にクラスになり、とても嬉しくて心から幸せだった。

しかし…その幸せの終わりが佐伯のすぐ側に迫っていたのは、彼女自身もまだ知るはずが無かった…。

f r i e n d s 1 8 : 彼の死 : 私の思い。 (7)

ついに、榮波君との高校生活が始まった。同じクラスになって、とても嬉しかった。でも…不安な事があった。

その前兆が見られたのは、入学してからだいぶ経った7月の頃だった…。

私は、いつものように登校して榮波君に声を掛けた。

「さくかなみ君っ！」

しかし、彼は振り向いてくれなかった。聞こえなかったのかと思い、もう一度声を掛けた。

「榮波君っ！おはよう。」

それでも彼は振り向いてくれなかった。

(いつも挨拶したら、「おはよう、佐伯さん。」って返してくれるのに…どうしたのかなあ。)
と思い、少し不安になった。

「あのさ…佐伯さん。」

榮波君が、突然口を開いた。

「な、何、榮波君？」

私が返事をすると、榮波君は振り返って私の顔をまじまじと見た。
…その顔は、明らかにいつもの榮波君の顔では無かった。

「…ウザい、死ねよ。」
「っ！！！！」

榮波君の口から出た衝撃の言葉に、私は大きなショックを受けてしまいい…苦しんで泣き出しそうになった…。

彼が言った言葉は、私を心から苦しめた。精神はボロボロになり、学校へ行きたくなくなった。

翌日から、私は時々学校を休むようになった。

学校を休んだ日は、1日中鍵を閉めて部屋に閉じ籠り、まるでナマケモノのように何もせずじっとしていた。時々、目から雫が頬を伝って下へ溢れ落ちてゆく…。

「ああ…ああ…」

私は、苦しくて言葉が出なくなっていた。ママは私を心配し続けて、かなり疲れていた。

結局、1学期の終業式の日も登校しなかった私は、夏休み中でも外出はしたくなかった。そんな8月のある日の事。

私は、いつものように何も考えずただジツとしていた。その時、私の携帯のランプが光った。また友達の誘いかと思ったが一応、携帯を取って見た。

“ 着信・榮波蔵瀬 ”

「 え… 」

突然、榮波君から電話が掛ってきたのだった…。

f r i e n d s 1 9 : 彼の死 : 私の思い。 (8) (前書き)

夏休み、ずっと部屋に閉じ籠っていた佐伯に、突然榮波から携帯に電話が掛ってきた。佐伯がそれに出ると榮波は、“夜に公園で待ってる。”と言って一方的に電話を切ってしまった。

佐伯は、先日の出来事で榮波の事がもう嫌いになっていたのだが…

friends 19 : 彼の死 : 私の思い。 (8)

「今から水窪公園みづくぼこうえんに來い。」

私が電話に出ると、榮波君がこう言った。

「……………」

今まで彼が私に対して、命令口調をした事なんて一度も無かった…

「…聞いてんのか佐伯？」

彼が私を呼び捨てしたのも、これが初めてだった…。

「じゃ、午後7時に水窪公園な。遅れんなよ！」

こうして、榮波君から一方的に電話を切られた…。

…正直言って、今の榮波君の元へなんて行きたくなかった。今の彼は、本当の彼じゃないから。

約束の時間はとっくに過ぎていた。時刻は午後9時を回っていた。パパとママは外出していて遅くまで帰って来ない。私は、冷蔵庫に入ってたモノで早々と夕食を済ませていた。

(カチツ…カチツ…カチツ…)

時計の針の音だけが部屋中に木霊する。

「……………榮波君、まだ待ってるのかなあ？」

ふと、自分の口から出た言葉に戸惑う私。

(もし、彼がまだ公園にいたなら…)

いつの間にか、私は無意識に玄関のドアを開けていた。

「はっ…はっ…はっ…」

私は、公園に向かって一生懸命走っていた。

（今の彼と逢いたくないのに、何で私は彼の元へ向かっているんだろ…）

走ってる内に目から涙がとめどなく溢れて来た。

「…うっ…くっ…もう榮波君なんて嫌いになつたのに…何で…何で、私はこんなに彼に逢いたくなるの？」

自問自答しても解らない…それが恋なのかもしれない。

「…遅い。一体、何やってたんだよ？」

私が公園に着くと彼は、ベンチに座っていた。もう彼の顔には、あの日の“優しい笑顔”は無かった…。

f r i e n d s 2 0 : 彼の死 : 私の思い。 (9) (前書き)

榮波は、呼び出した佐伯が既にいるのに一向に口を開かず、早1時間経とうとしていた。

そして、ついに榮波が口を開いたが、彼が言った言葉に佐伯は…

f r i e n d s 2 0 : 彼の死 : 私の思い。(9)

今、私の目の前には昔と変わってしまった彼：榮波君が無言でベンチに座っている。既に会ってから1時間近く経過していた。少しだけ蝉せみの音が公園内に響きわたっている。その中、無言でただ立っている私と座っている榮波君：と、その時だった、彼がついに口を開いた。

「何故、俺がここに呼び出したか：佐伯には解るはずが無いよな。」

私は、静かに頷く。彼は、顔をうなだれて小さく息を佩はいた。

「俺さ：学校辞めようかと思ってってるんだ。」
「っ？！」

榮波君が放った、その衝撃の一言が私の耳に響き伝わって、通り抜けた。

「やっぱ、中学と全然変わんなかった。：高校に行ったら、何か変わるかなあって思ってたけどさ：結局、高校でもイジメのターゲットにされてさ：。」

淡々と覇気の無い声で私に話す榮波君が、とても惨めに見えた。

「そっいや：佐伯。」

「：何？」

彼が突然、話を変えた。

「俺の所為…だよな？佐伯が、学校に来なくなったのは。」
「！…！」

彼は、彼自身で解っていたのだ…私が、学校に行きたくなくなった理由を。

「あの時さ…俺自身、ボロボロだったんだ。毎日…毎日、悪質で陰湿なイジメを受け続けててさ。」

「……………」

彼が私に放った“あの言葉”は、私の心の奥深くで未だに刺さっていた…。

(痛くて…苦しくて…辛いのに…そんな理由で言われたなんて、信じられない…いや、信じたく無い！)

「もちろん、今更謝ったってもう遅いって解ってる。だからさ、もう…！」

(だから、二度と佐伯を傷付けないため、学校を辞める……って言うんでしょ？それは、ただ自分を傷付けないために逃げてるだけじゃん。卑怯者っ！…！)

彼に対し、私は率直にこう思った。

「…卑怯者。」

「…えっ。」

「そう言っただけじゃ、私を守る振りして、ただ自分が傷付かないために自己防衛してるだけじゃん。卑怯者っ！…！」

「……………」

到頭、私は我慢出来ずに口に出してしまった。彼は黙ってうつ向いたままだった。

「…そうやって榮波君が目の前から居なくなったら私、一生あなたを恨み続けるからっ！」

一方的に彼へ吐き捨てて、私は泣きじゃくりながら公園から家へ向かって走り出した…。

「…くっくっ…ひっくく…つわぁーん…！」

私の両目からとめどなく溢れ出る大粒の涙。そして…彼への何ともやるせない気持ち、私を苦しめる。

榮波君は、決して私を嫌いになつてはいなかった。ただ、ムシヤクシヤしてただけ…。なのに私は、彼に本気で嫌われたのかと思つていた…。

そんな誤解から生じた彼との深い溝。その溝を、どうやって埋めたら良いか解らない。だけど…絶対に埋める…埋めてみせる！

(嫌だよ…。私、榮波君と離れたくない。だって、ずっと…ずっと彼と一緒に居たいから。)

f r i e n d s 2 1 : 彼の死 : 私の思い。 (1 0) (前書き)

2学期が始まるが、依然として佐伯は学校に行きたくなかった。そんなある日の午後。佐伯は気分転換にと、外出した。しかし、立ち寄った公園で不覚にも眠ってしまふ。

彼女の名前を呼ぶ声に気がつき、佐伯は目を開ける。彼女の目に映ったモノとは…

f r i e n d s 2 1 : 彼の死 : 私の思い。(1 0)

まだ夏の蒸し暑さが残っている9月初旬…

2学期に突入しても、私は学校に行かなかった。ママには、“スクールに通わない？”と誘われてるが、私は断り続けていた。何故か解らない。何故か解らないけど、私は高校を休学してまでスクールには通いたくなかった。

…多分、まだ“あの人”の側に居たいという気持ちだが、私の判断を鈍らせているのだろう…

(彼は今頃、学校で何しているのだろうか?)

相変わらず、彼の事ばかり考えてしまう私。周りから見れば、“そんなに彼の事考えてしまうなら、学校行って彼と会えば良いじゃん。”と思うだろうが、それは…出来ない。

あの日から、榮波君から電話やメールが来なくなった。

別に寂さびしくない…って言ったら嘘になる。ホントは…寂しくて…彼が居ないと辛く、死にたくなる。

今の私はまるで、飼い主からほっとかれたウサギのようだった。

2学期は、体育祭や文化祭、1年生秋季短期旅行が木原高校の行事となっていた。だけど、私は参加したくない。参加しても楽しくないから。

そんなある日の午後。私は、ママには無断で外出していた。

並木通りに植えられた木々の葉が徐々に、黄色く色付いていた。いつの間にか私は、“あの日の”公園の前にいた。足先は、自然に公園内へ向かっていた。

私はベンチに腰掛け、たまたま持ち合わせていた読み掛けの小説を読み始めた。

この頃やつと風が涼しく感じられるようになり、心地よい。無意識の内に、私の瞳は瞼でカバーされていた…

…き？…い、…えき？…丈夫か？

聴き覚えのある声に、私はゆっくりと目を開けた。そして見えたのは…

「佐伯っ！！」

「っ……！」

「ふう… やつと目を覚ましたか。こんな所で何やってんだよ、ったく… しかもこんなトコで寝てたら風邪ひくぞ。」

「さ… 榮波… 君？」

（榮波君… いつの間に…。はっ！まさか… 私の寝顔見られちゃった？ そうだったらサイアクだあ…）

私は、恥ずかしさのあまりにうつ向いてしまった。

「佐伯… ゴメンな、いきなり目の前に現れて驚かせて。」

私は、首を横に振った。

「…ううん。でも… どうしてここにいるの？」

「え？… ああ、ここは俺がいつも帰りに寄っていく秘密の場所なんだよ。」

（ここが榮波君の秘密の場所…）

周りを見渡すと、確かに人気ひんげは無く、静かな公園だった。

「で、佐伯の方は俺の秘密の場所で何してたんだい？」

「えっ？！」

（ここで、ただ転寝うたたねしてた… なんて言えないし、どうしよう…）

私が戸惑っていると、榮波君が私に顔を向けて口を開いた。

「佐伯… 折り入って御願いがあんだ。」

彼の顔はいつもの柔らかい感じじゃなくて…至って真面目な顔だった。

「な、何？」

私が尋ねると次の瞬間、彼は深呼吸して何かふっきったような顔で言った…。

「来月の短期旅行の自由行動中、俺の最期の思い出に“親友”としてずっと一緒にいてくれないか？」

「えっ？」

（榮波君の最期の思い出？それに、“親友”として？）

私は榮波君が言った言葉が、よく理解出来なかった。何故、その旅行が彼の最期の思い出なのか？それに、私が彼を嫌っている事を承知済みで彼は私に御願いするのか…

「そ、それじゃな。頼むぜ！」

「ちよ、ちよつとま…ああん！」

私の言葉は届かず、彼は足早に去って行ってしまった。

「一体…私はどうしたら良いの？」

彼には、“親友”と視られていて、私は彼の事を恋愛対象として視ている…

私と榮波君…この2人の違う思いが、後にあの辛い出来事へのカウントダウンの口火を切る事となる…。

f r i e n d s 2 2 : 彼の死 : 私の思い。 (1 1) (前書き)

秋季短期旅行当日。

佐伯は、先日榮波が言った言葉の真意を知りたかった。それを聞くため、彼と約束した事を果たす。

最終日の前日の夜、佐伯は榮波に呼び出された…

f r i e n d s 2 2 : 彼の死 : 私の思い。(1 1)

秋季短期旅行当日。

私は、朝6時に家を出た。外はまだ薄暗く…まるで、私の心の中のモヤモヤ感が現実リアルに映し出されている感じだった。

「おはよ、那奈！」

「……………お、おはよう……………」

集合場所で久しぶりにクラスの親友に声を掛けられたのに…何か怖く感じて気が付かない内に避けてる私。やっぱり、参加しなければよかったかもしれない…。

「…おい、佐伯。」

「うん?…っ?!」

榮波君が、いつの間にか後ろに立っていた。

「約束…頼む。」

「う…うん、解ってる。」

一言だけ言葉を交わし、榮波君は離れていった…。

「なあにい、那奈ってあんな陰湿な奴と付き合ってるのぉ？」
「っ？！」

その言葉に驚いて振り向くと、側にいた親友がニタニタと笑っていた。私は声が裏返りながら必死で思いを隠しながら弁解した。

「べ、べ、べ、別に付き合ってるじゃないよぉ？／＼／」

「那奈…そこまで必死にならなくても…」

「…うえ？あ…ハハハ、そうだネツ！何で慌てるんだろ…私。ハア…」

この時に、もう彼への気持ちを抑えきれない所までできていたのを悟った。

バスに乗って富士山の周りを観光して、そして…他の人達に見つからないように榮波君と沢山ツーショット写真を撮った。

そして、最終日の前日の夜。私は、榮波君に呼ばれて班員が寝静まったのを確認してから部屋を抜け出してホテルの近くの空き地に行った。

秋から冬に季節が移り変わる頃だったから少し肌寒く感じた。

「佐伯：来てくれてありがとな。」

榮波君は先に空き地に到着して、横たわる土管に登って座っていた。

「うん、別にそんなの気にしなくて良いよ。」

「…そうか。」

それからしばらくの間、会話は無かった。秋風の吹く音が耳にしっかりと聞き取れるぐらい周りは静寂せいじやくだった…
私はその状態が窮屈きゆうくつに感じ、口を開いた。

「ねえ、あの時の言葉…」

「えっ？…ああ、あれか。」

そう言って、榮波君は少し笑った。

私は、とにかく彼のホントの真意が聞きたかった…

「あの意味って…」

「別に…深い意味は無い、言葉通り。」

そう言われて、私はすぐに不安を感じた。

（言葉通り？まさか…）

「さ、榮波君？もしかしてさ…変な事なんて考えてない？」

「うん？別に考えてないけど…」

そう言って、彼はおどけて見せた。無理してるのがバレバレだったけど…

「だ、ダメだよっ！そんな事考えちゃ…っ?!」

私は必死で彼に思いを伝えようとした時、彼が目の前に接近してきたのを認識出来た。そして、次の瞬間…

(ギョッ…)

榮波君がいきなり私を抱きしめた。

「え、え、え、ちよつ、ちよつとお！／＼／」

「…佐伯、今まで俺の友達で居てくれてありがとう…元気だな。」
「…えっ？」

榮波君は、たつたそれだけ呟いて私から静かに離れた。そして、何も言わず、ホテルの方に体を向けて一度も私に振り向かず歩いていた…

「榮波君…」

私はその場にしゃがみ込み、声を抑えて泣きじゃくった…

そして、秋季短期旅行が終わった翌週…

榮波君は…自殺した。

f r i e n d s 2 3 : 旧友の死 - 俺は、彼に何もしてやれなかった…。 - (前書

榮波は自殺して亡くなり、彼が埋葬されてから数ヶ月経った。

佐伯は、彼の遺書に書かれた“意思”を伝える為、彼の旧友である

高萩を呼び出した。

高萩は、榮波が自殺したなど到底思わなかった…

f r i e n d s 2 3 : 旧友の死 - 俺は、彼に何もしてやれなかった…。

(佐伯か…懐かしい。そういや、中学卒業からお互い会ってないな。元気にしてんのかな?)

そう思いながら、俺は待ち合わせした喫茶店で呑のど気に温かなミルクティーを煤すすっていた。

この後、自分の耳に残酷な通告が届くとも知らずに…

(高萩君…もう着いてるかな?)

私は、少し急ぎ足で待ち合わせ場所へ向かっていた。

榮波君が埋葬されて、私は彼のいない世界に苦悩した。でも…

どんなに落ち込んで、もう榮波君は還ってこない。それが解ったから、私は前より強くなった気がした。

(榮波君、今からあなたの一番の親友に逢いに行くの…。あなたの遺書に書かれたあなたの重い意思…今、あの人へ伝えるから…)

私は、その思いを胸に抱きながら高萩君の待つ喫茶店のドアを開けた…。

「さ…佐伯かい?」

佐伯のあまりの変わり様に、俺は少し驚いた。

「ゴメンね…日曜にわざわざ呼び出ししてしまって。」

そう言って佐伯は軽く会釈してきた。

「いや…別に良いんだけど。佐伯、最後に会った時より随分と変わったな。」

彼女の瞳は、よどんでいてまるで今まで散々と汚れたモンけがを見てきた…そんな感じ。

「高萩君…話があるの。」

「あ、ああどうぞ。」

彼女は少し戸惑っているのか口をモゴモゴさせていた。しかし…次の瞬間、彼女は口を開いた。

「榮波君…覚えてる？」

「蔵瀬？当たり前だ。佐伯、俺を馬鹿にしてんのか？俺と蔵瀬は…」

「榮波君ね…去年の11月に…」

「ん？」

…愚か者の俺は、佐伯が何故虚ろな瞳^めでいるのかが、次に彼女が言うまで理解する事が出来なかった…

「死んだの……」

「っ?!」

「……首を吊って自殺しちゃった。」

「う……嘘だろ……?」

俺は、一瞬で暗黒の闇へ叩き落とされた…。

f r i e n d s 2 4 : 重責… (前書き)

佐伯から榮波の死を伝えられ、高萩は無言で肩を震わせつつ向きながら静かに涙を溢している。

佐伯はその姿を見て、榮波を死なせてしまった自分に重責を感じてしまつ…

(高萩君…、やはり彼にこの事を伝えたのは間違いだったかもしれない…)

先程、私は榮波君の死を高萩君に伝えた。すると、彼はうつ向いたまま何か唱えている。第三者から見たら彼は鬱病者に見える…まるであの時の私のように。

「蔵瀬…何でだよ…何で死んじゃったんだよ…」

私は、滅多に嘘はつかない。その事を彼は前々から承知していた。だから彼はあんな風になってしまったのだ…

「高萩君。」

「……………」

彼の目の下には、一筋の透明な線が出来ていた。

「榮波君…高校に入ってから彼はクラスメイト数人にいじめられてたの。」

高萩君は、何も言わずにうなだれて肩を震わせながら聴いてくれていた。

「私…彼の側に出来るだけ居たけど、結局何も出来なかった…。」
「……………」

(高萩君…)

「突然だけど…高萩君にカミングアウトするよ。私さ…榮波君の事を、誤解していて一時期嫌いになってた時があるんだ…」

「っ?!」

「そりゃ、驚くよね…。自分で言うのもなんだけど、あんなに彼にベタベタしてた私が彼の事を嫌いになるなんて…中学時代に私達の事を見てた人なら驚くよね。」

私は一気に捌いた。この事を言っ、相手が何と言おうが思おうがどうでも良くなったから。

「…何でだよ…何でさ?」

高萩君は、声を震わせながらも言った。

「正直言っちゃうとね…榮波君にヒドイ事を言われちゃって…“ウザい、死ぬ”ってね。」

「っ?!…う、嘘だ!そんな事…」

「そう…“いつもの”榮波君なら言わないわ。だけど…あの時の榮波君は、何ていうか…精神異常状態だったの。」

「精神…異常…だと?」

私はコクリと頷いた。

「夏休みに入る前ぐらいから榮波君…私に対する態度と口調が急に変わったの。最初は、私の事を嫌いになって突き放したかったのになって思った。けど…」

「……………」

「夏休みに入って数日経ったある日、彼から急に呼び出されて…私行ったの。そしたら、榮波君が急に謝ったから、理由を聴いてみたの。」

「…イジメを受けて、心身共に辛いから佐伯につい暴言を吐いた…そういう事か？」

（高萩君…何故、あなたはそこまで榮波君の事が解るのよ…？）

私は、何だか敗北した気分だった。そこまで彼の事が解ってる高萩君に対して、私はずっと彼の側にいたのに少しも解らなかったから…。

「…で、自殺する素振りを見せたのはいつ頃からなんだ？」

高萩君が聞いてきた。

「私を呼び出した時から、その兆候うらひごころがあつたわ。」

「佐伯…」

「えっ?!」

いつの間に、高萩君が私の目の前にいた。そして…

（ガシッ!）

「何故、止められなかった!!佐伯っ、答えろ!」

高萩君は私の服を掴み、私に怒鳴った。周りの客が私達の方を向いていたので慌ててそれを制した。

「ちよ…高萩君、声が大き過ぎるよ…周りの人達も見てるから…理由はあとで話すから。と…とにかく恥ずかしいから、早くここを出

ようよ。
「くっ…」

…私は、あんなに怒った高萩君は今まで見た事が無かった。

(…榮波君の事がホントに解ってるのは高萩君かもしれない。)

そう思いつつも、私と高萩君は会計を済ませて足早に喫茶店を立ち去った。

私達は、駅前の喫茶店から“ある場所”へお互いに無言で歩いていった。

私は、話し掛けようとするも、何だか話し掛けづらくて…ずっと黙り続けていた。

ある場所へあと半分近く来た所で、突如高萩君が口を開いた。

「佐伯…」

「ん、何？」

「さっきは取り乱してゴメンな。」

「ううん、あれは別に気にしてないから謝らなくていいよ…。それより…聴かないの…あの事。」

「…もっいいよ。」

「えっ?!」

「元々、佐伯は悪くないし…今更佐伯に問い詰めてもお互いに辛く苦しくなるだけで…意味ないと思うからさ。」

「た…高萩君…」

私は、高萩君に対して申し訳ない気持ちで一杯だった。ほんの少し

で、私自身が潰れそうだったから。

「…で、これから行くんだろ、蔵瀬の墓に。」

「…うん、お水とかあげにね。」

「…そうか、ありがとな佐伯。」

彼が私に言ってくれたその言葉が、私の背負っていた重責を取り除いてくれた。その瞬間、私の感情の奥から何かが出てくるのを感じた。

「う…うわぁーん!!」

私は到頭、感情を抑えきれず、道端の側面で顔を伏せて泣き出した。

「佐伯…今まで辛かったよな……すまない…。」

高萩君がぼつりと呟いた。

私は、感情が抑えられるまで延々と泣き続けた…。

高萩と佐伯は、榮波が眠る墓地へと到着した。榮波の墓石に水をあげようと高萩が近くの寺院まで杓つしやくと手提げ桶を借りてこようとしますが、それを佐伯が“私が行ってくる”と言って、走って行ってしま

う。

彼女がそうしたのも、ある訳があった…

(この話で、中学時代編は終わります。次の話から高校編です。)

(深山墓地・みやまぼち)

「榮波君がここで眠ってるの…」

「……………」

俺と佐伯は、ゆっくりと榮波家の墓石に歩み寄る。

蔵瀬の墓石の前に立つと既に、一輪の花が花瓶かびんに手向けたむられていた。

「線香…上げようか。」

「…ああ。でも先に、墓石に水をあげよう。杓ひしゃくと手提げ桶おけ…近くの寺の住職に借りてこよう。」

「あ…じゃあ私が。」

「だ…だけど…」

「いいの。」

「えっ…」

「じゃ、行ってくるね。」

「お、おい佐伯…行ってしまったか。」

俺は一人、蔵瀬の墓の前で佇んでいた…。

(ゴメン、高萩君…。やっぱり、榮波君と正直に向き合えないよ…)

私は、うつ向きながら近くの寺院じいんまで歩いていた。すると…

「あら、那奈ちゃん？」

不意に聴き覚えがある声に、私は振り返った。

「あ、あなたは…」

私に声を掛けた女性は少し微笑んだ…

寺院に到着し、杓と桶を借りた私とその女性は高萩君が待つ墓地へ向かった。

「高萩君？…あれ？」

高萩君は、榮波君の墓石に向かって何か語り掛けていた。話す彼の顔は時々、暗くなっていた。

「萩ちゃん？」

女性は、彼の側に寄って話し掛けた。

「…はい？つ？！」

「久しぶりね、萩ちゃん。」

「蔵瀬の母さん…お久しぶりです。」

「は…萩ちゃん？」

私は、目を瞬またたいた。

「ああ…蔵瀬の母さんにこう呼ばれてたんだ。」

「それにしても…二人とも蔵瀬の墓参りに来てくれてありがとね。」

「いえ…」

「…蔵瀬も天国あつちで喜んでいると思うわ。」
「母さん…」

榮波君のお母さんは、少しうつ向いていた。

「と…とにかく水をあげませんか？」

「そ、そうね…萩ちゃん？」

「はい…じゃあ佐伯、それ貸して。」

「うん。」

私は、高萩君に杓と水の入った桶を渡した。

(ザバー…)

墓石は滴したたり、光り輝いていた。

「…これで蔵瀬も潤おほっただろう…。」

「うつ…うつ…」

「母さん…」

榮波君のお母さんはしゃがんで、ハンカチで目を抑えて震えていた…。

「萩ちゃん…那奈ちゃん…本当にありがとうね…」

「母さん…泣かないで下さい。多分…母さんに泣かれたら蔵瀬が哀しくなると思います。」

「うつ…そ、そうよね。…さ、二人とも拜んで帰りましょ。」

「はい。」

「そうですね。」

…こうして、榮波君へのお墓参りは終わった。

蔵瀬の母親と墓地の入口で別れて、俺と佐伯は駅の方へと歩いていった。

「母さん…やはり辛そうだったな…。」

「…そうだね。」

そして二人の間に、暫く沈黙しんもくの状態が続いた。

駅に近付いた頃、ようやく佐伯が口を開いた。

「あのね…あなた宛てに榮波君が遺した文書があるの。」

「えっ…」

「これ…」

佐伯は、一つの文書を懐ふところから取り出した。

「読むよ…。」

と言って、佐伯はゆっくりと読み始めた…。

『萩ちゃん…ゴメン。俺、またクラスメイトからいじめられているんだ。中学の時のイジメレベルと遥かに違い過ぎる…。』

…もつ耐えきれないよ…ダメだ。俺、死にたくなつたよ…。逃げた

いよ、この現実から。
でも…最後に一目だけ、萩ちゃんに逢いたかったよ…。逢って、色々話したかった…。
萩ちゃん…お前がこの手紙を読んでもう…俺はこの世にいないだろう。だから、萩ちゃんに一つだけ俺から頼みがあるんだ。

それは…、俺の宝物の翡翠ヒスイを萩ちゃんに受け取って欲しいんだ。
翡翠の場所は、俺の祖母の家に飾ってある。ここからかなり遠いけれど、長野県大町市おおまちに祖母がいる。地元では祖母の家は有名な方だから、駅員に聞けば解ると思う。祖母には、萩ちゃんが来る事は了解を得ている。

それは、俺の形見なんだから絶対に貰ってくれよ。

萩ちゃん、これで最後になっちゃったけど…、中学時代、ずっと友達でいてくれて本当にありがとう…ありがとう…

それじゃあ、バイバイ…

蔵瀬』

「くっ…くそ…身勝手な奴だよ…蔵瀬。」

「高萩君…」

俺は、片手で両目を覆ってしゃがみながらまた泣いてしまった…

「高萩君…榮波君の頼み、受けようよ。」

「…くっ…ああ、そうだな。」

二人で相談した結果、俺と佐伯で春休みを利用して蔵瀬の形見、翡翠を貰いに行く事にした。

(蔵瀬…安心して天国で見守ってくれよな。)

俺は空を見上げながら、天国の蔵瀬へ思いをはせた…。

f r i e n d s 2 6 : 親友…それぞれの思い。(前書き)

3月の第2週目。

この日：高萩が、福本にホワイトデーについて話し掛けられた事から始まった。

この和みのある会話からやがて、友達関係について徐々に歪んでゆく…

f r i e n d s 2 6 : 親友…それぞれの思い。

3月の第2週目。

もう少しで高1が終わり、進級が待っている。

クラスでは、バレンタインデーで男子に義理（あるいは本命）チョコをあげた女子達が集まってホワイトデーの話をしている。

「高萩い、お前は返したのかよ。」

福本が席に座って窓の外を眺めていた俺に話しかけてきた。

「何を？」

「“何を？”…ってホワイトデーだぜ。お前、どうせ貰ったんだろ？」

「バカ言うな。貰えるわけねえだろ。榎故^{えのもと}じゃ、ねえんだから。」

「…俺を呼んだか、高萩。」

後ろから俺に声を掛けたのは、クラス内一のカッコイイ男子と賞さ
れている、榎故^{えのもと} 草太^{そうた}だった。

彼は、髪をワックスで立てていて身長は180cm代と高い。野球
部に所属している彼の身体には無駄な肉が付いていない。

彼の性格は、穏和で誰にでも優しく平等に接して尊重し、決して人
を馬鹿にしたりしない。

そんな彼だからこそ、女子達から人気があり、しょっちゅう喋り掛
けられるのだ。

「お前や成とかなら、バレンタインデーに女子からチョコをわんさ
か貰えただろうから、返すのが大変だろうなって話してたのさ。」

榎故は、頬杖をつきながら言った。

「…そんな事かよ、別に考えてねえよ。元々、俺には関係ないし。」
「榎故よお、嘘つくなよ。お前には関係ありだろ？」

福本は、にやけながら榎故の肩に手を置いた。

「だから…俺には関係無いって。てか…肩に手を置かないでくれな
いか？一応、ピッチャー（投手）だし…」

「肉っ！（福本のあだ名。彼は少し太っていた。）」

「…ゴメン。」

「あ…そんなに怒らなくて良いよ、高萩。別に…気にしてないから。」

「榎故…」

福本の所為で気まずい雰囲気になったので、俺はとっさに話題を変えた。

「あっ、そういやテレビで見させて貰ったぜ。お前が高校に入ってから
の初登板の試合。」

「ああ…ありがとっな。グダグダだったろ…見事に相手から打ち込まれたし。」

「いや、あのジャイロはキレがあって良かったぜ。」

「なあ、高萩？」

「福本、何だよ？」

「ジャイロって何だよ？」

「お前は中学の時、野球部だったのに解らないのか？」

「いや、俺はライト（右翼手）だし…」

「ふう、ジャイロ…正確にはジャイロボールっていう変化球の一つでな。まあ…ストリート（直球）とあまり変わりはないんだけど、打者の手元で少し落ちるんだ。だけど、球速が速いから打者にはホームベース付近で球が浮き上がって来るように見えるんだ。また、ストリートはバックスピン（縦回転）だろ？だけどジャイロは、ドリルのような回転をするから周りからの空気抵抗を受けにくく、投げてからキャッチャー（捕手）に届くまでの時間が少しだけストリートより短いんだ。」

「へえ…。」

知らなかったというような顔をしていた福本の隣で榎故が、感心したように言った。

「…よく知ってるな、高萩。」

「まあ…下手だけど地元で草野球やってて、一応ポジションがピッチャーだから。」

「成程な。投げてるから知ってるのか。」

「ジャイロリリース（ジャイロボールの放り方）を取得すんのは難しいから、結構練習…。」

「榎故くん、ちょっと来てえ。」

向こうにいた女子のグループが榎故を呼んでいた。

「ワリイ、二人とも…ちょっと行ってくるよ。」

「おう。」

「このモテモテ野郎がっ！」

「肉…それは言わない方が良いぜ。」

「うっ…。」

榎故は、女子達の所へ行ってしまった。

「まあ、色々人には問題があんだな。」

「そうだな。」

「おい。」

「…ん？」

不意に、後ろから声を掛けられた。俺は、振り返った。そこには、仁王立ちした成が立っていた。

「…何だよ、成。」

「お前さあ、千駄木さんから貰ったのか？」

「何を？」

俺がそう言つと、成はいきなり声を荒げた。

「とぼけんなつ！…お前、バレンタインデーに千駄木さんからチョコ貰ったんだろ？」

「貰うわけねえだろ。」

「本当か？」

「…ああ。」

「なら、いい。」

「あれえ、高萩クン達どうしたの？」

いきなり、俺達の前に千駄木が現れた。

「せ、千駄木さん…」

「成ちゃん、ホワイトデー忘れないでネ！」

「も、も、もちろんっ！」

「フフっ…高萩クンも…ネっ。」

「えっ？」

千駄木は、何故か顔を赤らめてうつ向いていた。

「っ！！！テメエ、嘘ついたな！実は渡されていたんだな！許さん……」
「えっ？何…どうしたの？」

当の千駄木は、ポケットとじていた。

「ちよつと、待てっ！千駄木…俺は貰ってないけど。」

「あれっ？…もしかして高萩クン、私のあげたモノ…ロッカーから取り出してないの？」

「えっ？千駄木…俺のロッカーの中に何か入れてたのか？」

「…ヒドイっ。」

「えっ？」

（ダッ！）

千駄木は、左腕で両目を押さえ隠し、走って行ってしまった。

「お、おい千駄木！…何だよアイツ。」

「…おい、高萩い。萌さん少し涙目だったぜ。」

「テメエ…！」

（ビュンっ…！）

唸る成の右拳を、ギリギリで何とかかわせた。

「止める、成！何故、お前は高萩を殴るんだ？最近、お前変だぜ？」
「…黙れ。お前には、関係無いだろ。」
「ふざけんなっ！」
「福本…」

俺は、一言だけで制した。

「何だよ、高萩？お前も、何か言っつてやれよ！」
「解るだろ？もう俺達は、無垢な人間じゃねえんだから。」
「……………」
「……………」

3人の間に暫く沈黙ひびの時間が流れた。

突如、窓の隙間すきまから春風が吹いた。すると、成が何かを振っ斬った
ような顔をして俺に話しかけた。

「…高萩。」
「何だ、成。」
「俺さ…決めた。」
「…何を？」
「千駄木さんに…」
「…告白すんのか？」
「いや…一から友達関係で始めてみようと思う。」
「そうか…」
「…出来るかな、こんな欲求心が強い俺に。」
「解らない。だけど…一生懸命に何かをした人は何かを得られるっ
てよく聞くけどな。」

「高萩……」

成の瞳には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「あんま気にすんなよ。お前のやりたいようにすれば良いからよ。」

「ごめんな……」

「えっ？」

「あの時……本気で殴っちゃまってさ……」

「いや、あれは……」

「ごめん……すまなかった……」

「成……」

目の前で泣き崩れた成。

俺の所為で深く傷つき泣いてしまった千駄木。

親友関係…それは、難しい壁を越えなければならない時がある事。

俺は、徐々にここから深く知っていくのだ…

f r i e n d s 2 7 : 真逆… (前書き)

暦は4月となり、高萩らは高2になった。

高萩が教室の中にある自分の席に座って榮波の形見の翡翠を眺めていた時の事だった。

教室のドアが開き、新しく2人の転校生が担任に連れられて同時にやって来たのだった…

f r i e n d s 2 7 : 真逆…

春休みが終わり、俺は進級して高2になった。

俺の手元には春休みに佐伯と一緒にいき、受け取った蔵瀬の形見の翡翠がある。

(蔵瀬：こんな綺麗な宝玉ほうしゆ…俺には勿体無い気がするよ…)

俺は、翡翠をまじまじと眺めながらそう思っていたその時だった。

教室のドアが開き、担任が意気揚々と入って来た。

「おはよう！挨拶と共に…早速だけど、新しくこのクラスかいせきに在席する転校生を2人紹介します。どうぞ、入って！」

担任の呼びかけと共に、男女一人ずつ順に教室の中へ入ってきた。男子の方は、うつ向きながら歩き、とても暗い雰囲気を出している。女子の方は、明るそうな顔だった。

「じゃあ2人共、順に自己紹介してね。」

担任がそう言うと、女子の方から喋り出した。

「新川しんかわ 亜未あみです！埼玉さいたま県立苗木高校から来ました。この学校の中で学部に妹がいます。好きな事は、友達と喋りまくる事と食べる事、それに寝る事ですっ！これから2年間、宜しくお願いします。」

彼女のハキハキとした自己紹介は男女問わず、拍手喝采だった。

続いて、暗い雰囲気を出していた男子が喋り出した。

「…藤浦ふじうら 成一せいこう。…神奈川県立栗桜高校から来ました。…これから宜しく。」

彼の暗く覇気の無い声での自己紹介に、一気に皆が黙り込んだ。その状況を見かねた担任が慌てて言った。

「ま、とにかく2人と仲良くしてね。新川さんは、一番後ろの窓側から2つ目に席があるから座って。藤浦君は、5列目の窓側にあるあそこの席に座ってね。それじゃあ、朝のHRホームルーム終わり。成増、号令お願い。」

「礼。」

俺の席は、一番後ろの窓側。

早速俺は、転校生の2人と対面する事になってしまった…

f r i e n d s 2 8 ・ 冷 酷 … (前 書 き)

今回は、藤浦の話です。

(ふう…隣は馬鹿そうな女。そして後ろはさっき俺を見ていた糞野郎か…)

転校早々、俺は学校に行きたく無くなった。周りの人間と俺は合わない…合わせない…絶対に。

(トントン)

後ろから肩を叩かれた。後ろと言えば…

「初めまして。俺、高萩 荊太郎。で、こっちの太ってる方は、福本 秀太。で、背が高くて…少し焼きもち焼きのテニス部エースがこっち、成増 龍樹な。宜しくな、藤浦。」

「よろ。」

「高萩、余計な事言っな。」

……。

(何なんだ、このバカトリプル。ウザい、目の前から消える。)

「藤浦君…私、千駄木 萌。これからも宜しくネ!」

何なんだ…このクラスの奴らは。皆、クソばかりじゃねえか。

「初めまして!…てか、一緒に教室まで来たから覚えてるよね。私、

新川 亜未。改めてよろしくね、藤浦君。」

ウザい…ウザい…ウザ過ぎて…正直苦しい。

「おい、藤浦あ。そんなふてくされた顔しないでよあ、もっとフレンドリーに行こうぜえ。」

このクソデブ…馴れ馴れしい奴…少し黙らせるか…

「…あのだ。」

「何だ、藤浦あ。そんなに、睨みつけんなよ。」

(キツ！)

「うっ…」

「おい、福本。藤浦、明らかに嫌がつてるぜ。ここいら辺で一旦話を区切…」

「高萩い！」

「な、何だよ…」

「コイツ…転校生のくせにかっこつけてないか?!素直じゃねえよっ!!」

「くっ!!」

「おいおい…キレイなよ藤浦あ。」

「おい、福本…」

「黙れ、成。」

「何い！」

「落ち着け、成っ!」

「高萩…だっけ？」

「藤浦？」

「そこ…どけ！」

「っ!!」

「…何だ、藤浦。」

「黙れ、デブ。」

(スツ……)

「何だ……手のひらを前に出して？」

「はぁ……………」

「……お、おい？」

「ハッ……！」

(バゴッ……！)

「っ……！！！」

……デブの胸に俺が手のひらを思いっきり当てたその瞬間……
デブは後ろへ吹っ飛んだ。

「ふ……福本おおお……！！！」

(ふ……哀れな奴め。)

俺にたてつく奴は、全て^{リムッ}廃除する。

人間関係など……くだらない。

そんなモノ……俺は……棄^すてる！

f r i e n d s 2 9 : 太陽と月… (前書き)

高萩は、藤浦の行動が何故か気になって仕方がなかった。

色々思考していた高萩に、話しかけたきたのはもう1人の転校生…
新川だった。

(…藤浦、何故あんな事を。)

俺は、藤浦がいきなり目の前で福本を吹っ飛ばした事が理解出来な
かった。

しかも、掌で福本を吹き飛ばしたなんて…現実には有り得ない芸当
だ。だが、藤浦はそれをやってのけたのだ。

その後、藤浦は何も言わずにゆっくりとドアの方に近づいて、開け
て出ていった。

(しかし…あれは威合い系か？それとも…忍術？)

「ねえ…高萩君？」

俺が考えてる中、声を掛けたのは…

「っ！…ああ、君は確か…」

「新川 亜未。…これで名前言ったの三回目なんだけど。」

(そっぴゃ、そうだったよな…)

「ゴメン。で、新川さん、何だい？」

すると、新川は少し首を傾げた。

「んー、“新川さん”っていうのはよそよそしいって感じがするか
ら…そうだなあ…よしっ！じゃあ私を、呼び捨てか名前で呼んでよ
っ！早くみんなと仲良くなりたいたいからさ。」

(そ、それじゃ…“新川”…で良いのか?)

「なあ、亜未？」

「ふ…福本！身体は平気なのか？」

福本は、服に付着した埃などを叩きながら応えた。
こた

「なーんのこれぐらい、大丈夫、大丈夫。」

「でさ…なあに、福本君？」

「…っ！！！！」

「福本、いきなり名前かよっ？！ちよつと早くねえか？そりゃ、新川だつていきなりは嫌がるだろ…」

「良いよっ！」

「…ええ？！」

「てか、名前で呼んでくれた方が私は嬉しいな。」

「じゃあ、これから遠慮なく名前で呼ばせて頂きます！」

「調子に乗んな、福本。」

「アハハ…」

…俺は、何故か素直に笑えなかった。やはり、あの藤浦の行動の事が心の隅で“疑問の塊”となっているのだろう。

多分…藤浦は、俺らに何を伝えたかったのだ。しかし、伝えるのが困難な状況下だったからあんな行動を取ったのだ。

「…高萩クン？」

「……………」

「高萩クンっ！」

その大きな声で、俺は思考を一旦中断し、すぐ横で足をパタつかせ

ていた千駄木に振り向いた。

「…へっ？な、何だよ、千駄木。」

「やっぱりい…また考え事してた！ダメだよ、皆で話してる時に自分の世界の中に入っちゃ。」

「自分の…世界？」

「要するに…皆で話してる時は、その話に集中しなきゃねっ！」

「…解ったよ。」

この日、新たに2人の存在が俺の頭にインプットされた。

太陽のような…明るく、何事においても裏がない真面目な少女。

それとは対の月のように、まだまだ真の姿の部分を見せない少年。

何か…これからの高校生活に、少しだけ面白味を感じたのは気のせい
いか？

f r i e n d s 3 0 : チームとしての誇り… (前書き)

体育の時間。

高萩達のクラスは、他クラスと野球の試合をする事になった。

3組のAチームとの初戦。高萩は見事にヒットを放ったが、得点には繋がらなかった。

1回表の終了時、突然控えの藤浦が口を開いた。

藤浦の言った言葉に、成増は激怒して…

(野球の詳細が解らない方は、この話を飛ばしてお読み下さい。この話を読まなくても物語上に支障はございません。)

f r i e n d s 3 0 : チームとしての誇り…

体育の時間。

高校の体育は、結構ハードである。例えば、サッカーにおいて、もちろん技術も必要だが、戦略も考えないといけない。このような事から、ハードと言える。

しかも、今日は体育の時間を利用した学年球技大会なのだ。

「あーあ、球技大会ならサッカーが良かったな。」

体操着に着替えていた福本が、隣にいた成に話し掛けた。

「しゃあないだろ、体育の石岡が無類の野球好きなんだから。」
「だな。」

「で、1回戦と2回戦の相手は何組なんだ？」

「えーと…1回戦は3組のAチーム。まあ…俺らがマグレで勝てば1組のBチームに2回戦で当たる。」

「はあ…両方とも強いチームだな。」

「まあ…こつちには榎故がいるし、うちのクラスには、丁度9人しか男子が在席してねえんだから。文句は出来ねえよ。」

「確かに。」

「だからよ、気軽にやろうぜ。」

「ああ。」

俺は同意した。

「でもよ…」

「ん？」

福本が、困ったような顔をしていた。

「俺らのクラスに…転校生来たじゃん。」

「…あつ！」

(そうか…藤浦が居たんだよな…)

クラス内を見渡すと、藤浦はもう教室には居なかった。

「アイツのポジションは、一体何処どこにするんだ。」

「取り敢えず…控えじゃん。」

「控えピッチャーか？」

「いや、代打要員。」

「成程な。しかし、アイツがピッチャー出来れば案外頼もしいかもな。」

「そんなに控えピッチャー要らねえよ。第一、もうセカンドとコンバートしている高萩もいるし…なあ高…」

「……………」

「高萩…どうした？」

「…いや、何でもない。」

「お前、顔色悪いぜ。体育休むか？」

「休むもんか。第一、下手くそな俺は休んだら成績が危ないからな。」

「そうか…」

(キーンコーン…)

「おい、高萩い…成。チャイム鳴ったから早く行かねえと。」

「そうだな、よし行くか！」

俺らは、教室を後にしてグラウンドへ向かって走り出した。

「お互いに、礼っ！」

「お願いしまあーすっ！！！」

まず、俺ら2組対3組のAチームとの試合が始まった。先攻は、俺ら2組。

打順、各ポジションは以下の通り。

- 1番、シヨート（遊撃手）：川端かわばた
- 2番、セカンド（二塁手）：高萩たかはぎ
- 3番、センター（中堅手）：成増なります
- 4番、ファースト（一塁手）：瀬戸せと
- 5番、レフト（左翼手）：犀潟さいかた
- 6番、サード（三塁手）：魚谷うおたに
- 7番、ライト（右翼手）：律塔りつとう
- 8番、キャッチャー（捕手）：福本ふくもと
- 9番、ピッチャー（投手）：榎故えのもと

「1回の表、2組チームの攻撃は1番、シヨート…川端君。」
「プレイボールっ！」

エセウグイス嬢のアナウンスと審判が高だかに声を上げたと共に、試合が始まった。

藤浦は、ベンチ（選手控え場）で座って、何やらブツブツと呟つぶやいていた。

（ヒュン…バシっ！）

「ストライクっ！」

（思った以上に球が速いな。）

(ヒュン！)

(ブンっ！)

「ストライクっ！」

(川端…打てよ。)

しかし、俺の願いは届かず…

(ヒュンっ！)

(ブンっ！)

「ストライクっ、バッターアウト！！」

「早速…1アウトかよ…」

バットを持ってベンチへ戻る川端が、俺にこう言った。

「予想以上に速すぎる。無理矢理打つても、フライ（飛球）か精々ゴロだな、ハハハ。」

(はぁ…)

「2番、セカンド…高萩君。」

俺は、溜め息を佩きながらバッターボックスに立った。

(さて、第一球目は…)

(ヒュン！)

(バシッ！)

「ストライクっ！」

一球目は、まず珠筋を見るために見逃した。

(インコース（内側）ギリギリ低めの直球か…結構ウザいな。)

俺は、狙い球を変化球に絞る事にした。

（ヒュン！）

第2球目は、インハイ（内側の高め）のスローボール…判定は、ボール。

（あのピッチャー…打たせない気だな。）

俺は勝負に出た。バットを横に寝かせて構えた。そう…バントの構えだ。

相手のピッチャーもこちらがバントだと解り、わざと打たせて捕る気満々だ。

（ヒュン！）

（ひっかかったな！）

相手のピッチャーが投げた瞬間に、俺はすぐにバントの構えを止め、そして…

「ウォーッ！」

（カキン！！）

相手の守備陣は、皆バント処理で前に出ている。しかし、俺はバントではなく、通常バッティングでスローボールを強く叩いた。その結果、レフト前ヒットで一塁に進塁した。

「ば…バスターだと?!」

明らかに相手のピッチャーは悔しがっていた。

俺が今やった行為は、バスターという打法。これは、相手の守備陣へ意表をつくするためにやるのだ。

「ナイス、萩い！」

「やるなあ…アイツ。」

「3番、センター…成増君。」

（成…打ってくれ。）

俺はそう思いながら、リードの構えを取った。

成は俺に気づき、一回頷いた。

（ヒュン！）

（ダッ！）

俺は二塁へ向かって走り出した。相手は、盗塁したと思っている筈だが実は違う。

（カキーン！！）

成は、見事なバッティングを見せてくれた。

打球は、ライト前に落ちた。ライトが捕って投げようとしたが、俺は既に三塁を踏んでいた。しかし、成は一塁でアウトになった。

（これで2アウトか…）

「4番、ファースト…瀬戸君。」

（ヒュン！）

（カキーンっ！！）

残念ながら彼の打球は伸びず、センターのグローブに収まった。

「3アウト、チェンジ！」

ベンチに戻ると、何故か藤浦が笑っていた。

「ハハハっ！…笑っちゃまうね、このチームは！」

「何だどっ！」

藤浦の言葉にキレた成は、藤浦に掴み掛った。

「止める、成っ！…藤浦も、ちよっとは言葉を考える。」

しかし、藤浦は謝る様子を見せない。それどころか、更に成をキレさせてしまう言葉を放った。

「俺に指図すんな。しっかし…こんな草野球チーム並の力じゃあんな奴らには勝てねえよ！」

「テメエ！！いい加減にしろよ！！！」

「成！乱闘騒ぎを起こしちゃいけない！」

「うっさい！」

「まあ…そんなに怒るのなら見せてくれよ。」

「何をだよ！」

「次の相手の攻撃時、そこにいるピッチャーは、打者にわざと打たせる。内・外野はそれを捕って一塁に送球。…それを3回、やってのけたらお前らの力…認めてやってても良いぜ。」

「フン！そんなの簡単じゃねえか。んじゃ、頼むぜ榎故。」

「…おいおい、冗談じゃねえよ。わざと打たせるなんて…ピッチャーとしてのプライドが許す訳ねえだろ。」

榎故は、成の発言に呆れながら言った。

「なあ、藤浦。」

俺は、藤浦に話し掛けた。

「何だ、高萩…」

俺は、藤浦に少し聴きたい事があった。

「お前は…野球した事あるのか？」

すると、藤浦は嘲笑うかのように言った。

「精々、お前らより野球はやって来たと思っぜ。」

「その時のポジションは？」

俺が尋ねると、藤浦はいきなり得点板の方に指を差した。

「もうそろそろ、相手の打者が準備出来た頃だろ…行って来いよ。」

「…ああ、ガツチリ守ってくるよ。」

「フツ…まあ、精々頑張りな。あ、そうそう。」

「何だ？」

「さっき俺が下したテスト、クリアしたら俺が昔やってたポジション、教えてやっても良いぜ。」

「…行くぜ、皆！」

「オー……！」

俺らは、チームとしての誇りを持って守備についた。

f r i e n d s 3 1 : 一 眼 … (前 書 き)

藤浦との約束を果たす為、俺達は守備についた。
榎故の好投のお陰で、俺らは順調に2アウトを捕った。
しかし、俺らは一つ忘れていた事があった…。

friends31:一眼…

(1回裏、3組Aチームの攻撃)

(榎故…頼むぞ。)

2組チームの誰もが、榎故の配球を注目していた。そして、榎故が振り被った。

(ヒュンっ)

(バシっ!)

「ストライーク!」

一球目は、見事なカーブでストライク。そして、第二球目。

(ビュンっ!)

(ボンっ!!)

「ストライーク!」

榎故の得意な変化球、ジャイロボールにより2ストライク。

(おい…榎故、初回から飛ばすのは良いが、約束を忘れるなよ。)

俺は、そう思いながら第三球目を見据えた。

(ヒュンっ)

絶妙なカーブ…それを相手のバッターは、捉えた。

(カキーンっ！)

打球は、ややライナー気味に真っ直ぐ飛んだ。しかし、それを易々と見逃す俺らじゃ無かった。

「フンっ！…！」

川端が見事なダイビングキャッチで、手堅く1アウト。

「ナイス、川端っ！…」

「へへっ、さあ…！…！…！…！…！…！」

「「おー！…！…！」」

川端の気合い声に、皆奮起した。

(カキーンっ！)

「魚谷っ、ファースト！」

(ヒュンっ)

(バシっ)

「アウトっ！…」

「ヨッシャー！…！あと1アウト、打たせて採ろうぜ！」

「ウオー！…！」

皆のやる気は最高潮だった。しかし、そこまでだった…。俺達は、一つ忘れていた事があったのだ…。

「3番、サード…！永山君。」

エセウグイス嬢の声を聴いた榎故の顔が急にこわばった。

「タイムっ！」

福本が主審にタイムを頼み、全員マウンドに集合した。

「どうした、榎故。急に落ち着かなくなってるぜ。」

「……………」

榎故は福本の問いに、終始無口だった。すると、榎故と一緒に野球部に所属してるファーストの瀬戸が口を開いた。

「榎故が震えるのも無理ねえよ。」

「どついう事だ、瀬戸。」
と、俺は尋ねた。

「相手の3番、永山はこの学校の野球部の次期キャプテン候補で、ミート力が高く打率も常に、4割をキープする奴なんだ。ホームラン数も部内で1、2を争う強打者。榎故の本気の球以外は、簡単にバットに捉えて軽々とバックスクリーンに叩き入れるだろうよ。奴なら、きっとやりかねない。」

「と、いうことは……………」

「榎故が本気で三振を取るか、あるいは四球フォアボールで進めさせるか、だな。」

「じゃあ…結果的に藤浦の約束は……………」

「無理に等しい。」

「そんな……………」

「多分、アイツはその事を前々から知ってて約束をしたんだ。」

「くっ……………」

「さて…榎故がこうなってしまった以上、藤浦との約束は破棄して……………」

三振を取りに行く。皆、それで良いな？」

瀬戸の言葉に、他のメンバーは否応なく賛同した。ただ…1人を除いて…。

「なっさけない奴らだなあ！」

「福本？」

「俺は、このチームのキャッチャー。つまり、このチームの司令塔なのさ。」

「だから…何なんだ、福本？」

「まあまあ、落ち着け瀬戸。つまりだな…」

皆、福本の次の言葉に耳を疑った。

「ピッチャーを、いつそのこと交替しようと思う。」

「こ、交替だと?!」

福本の言葉に、榎故も顔を上げて福本を見た。

「交替つて…榎故以外、対等にあの永山っていう奴に戦えるピッチャーはうちのチームには居ねえぞっ!」

「バツカだな、瀬戸は。」

「何だと？」

「居るじゃねえか、ほら。」

福本が指を差した方向は…ベンチだった。ベンチには、先生ともう1人…

「ふ、藤浦…」

「あつたり!アイツ、どっかで見たことあんなあつて思っつてずつと

考えてたらやつと思い出した。アイツ、去年の夏の高校野球に出場した、神奈川県代表の栗桜高校の1年エースピッチャーだったのさ。

「な、何いー?!」

「君達…もうそろそろ…」

主審の声など、今の俺達の耳には届かなかった。

「って事は…アイツなら永山を打たせて捕る事など…」

「簡単だつて事さ。」

「さつすが、我がチームの司令塔。」

「どーんなもんだいっ!」

福本が得意気になっているなか、俺は一つ引つ掛かる事があつた。

「なあ、皆。」

「何だ、高萩?」

「藤浦…ホントに頼めば出てくれるかな?」

俺の問いに、メンバーは一気に黙り込んだ。

「確かに…俺らに挑発した奴に易々とお願ひしても無理だよな。」

「やつぱ、俺らで何とかするしかねえのか。」

皆が意気消沈としてる中、成は考え事をしていた。

「成、何考えてんだ?」

「いや…永山は榎故の球ばかり見てたんだよな?」

「多分。」

「だったら、俺らの球で何とか出来るんじゃないか?」

「確かにその考えは、一理あるな。」
「じゃあ…誰がピッチャーすんだ？」

ライトの律塔の発言に、皆が困ってしまった。俺は、その姿に呆れて言った。

「俺が榎故の代わりに投げる。」

「「そんな無茶な！」」

瀬戸と魚谷が、同時に言った。

「無茶とか、そんな呑気に言ってる場合じゃねえよ！誰かが投げないと、ゲームは続かねえんだ！」

「うん、確かに。よし、ピッチャー交替だ！」

「ま、マジかよ…」

「マジだよ。」

「榎故…」

「俺は、今まで高萩の守備の高さを見てきたんだ。アイツなら、俺の代わりにピッチャーを委まかせられる。」

「ありがとう、榎故。」

「高萩？」

「何だ？」

「永山の苦手なコースは…ゴニョゴニョ…」

「了解。なるべくそこを狙ってみる。」

「頼んだぜ…」

そして福本は、主審にポジションチェンジを伝え、俺と榎故以外のメンバーは元のポジションに戻った。

「ここで、ポジション変更をお知らせ致します。2組チーム、ピッ

チャーの榎故君がセカンドに、セカンドの高萩君がピッチャーに入ります。」

「プレイっ！」

試合再開。俺は、福本のミットを睨みながら振り被った。

(ビュンっ！)

(カンっ！)

「ファール！」

(さすが、次期野球部キャプテン。そう一筋縄ひとすじなわにはいかないか…) (

第二球目、福本は直球のサインを出してきた。

(直球かよ…絶対に打たれるぜ。)

俺は、即座に首を振った。すると、福本は俺の得意な変化球のサインを出した。

(これなら…)

俺は、親指と小指でボールを挟み、後の三本の指で鷲掴みした。そして、そのまま押し出すように投げた。

(ヒュンっ！)

ボールは、無回転でゆっくりとミットを向かっていった。

「くっ！」

(ブンっ)

「ストライーク！」

永山は思いつきりフルスイングしたが、球はバットの上を通った為、見事に空振り。

「スゲー！高萩、お前：ナックル投げられるのか？」

「まあ…使えるようになるまでには、福本の協力が必要だったけどな。」

「フツ…お前ら自惚れるなよ！」

「何っ?!」

永山は、俺らを睨みつけながら言った。

「次は、完璧にお前の球を校外まで飛ばしてやる！」

「フツ…そんな事出来る筈…」

「成、アイツは打つぜ。」

「榎故…」

「高萩：全力で行け！じゃないと打たれるぞ！」

「あ、ああ！」

俺は精神を集中させ、福本のミットを一瞥いちへつした。そして、ナックルの構えを取った。

「ウオー!!!」

（ヒュンっ!）

全力で投げた球は、大きく左斜め下にゆっくり落ちた。しかし…永山は球筋をしっかりと捉えていた。そして、バットにクリーンヒットした。

（カキーンっ!!!）

打球は、勢いよく上昇し、俺を含む2組メンバーは肩を落とした…
が、しかし…

「トリヤー!!」

と、外野から大きな声が聞こえた。そして次の瞬間…、

(バシっ!)

(ドサっ!!)

と、鈍音にぶが立て続けに聞こえた。

「う…う…」

「き、君…大丈夫かい？」

「…大丈夫です、審判。と、捕りましたよ…ほら…。」

「あ、アウトっ! 3アウトチェンジっ!」

「な…何い?!」

「成っ!」

必死にホームランボールをキャッチしたのは、センターの成だった。
しかし、キャッチした瞬間に肩をぶつけて痛めてしまっていた。

「大丈夫か?! 立てるか?」

「くっ…だ、大丈夫だ…」

「肩を思いつきりぶつけている。成、保健室に行こう。」

「す、すまない…」

「謝るな…良く頑張った、ありがとな。」

「う、うう…」

成は、先生達に連れられて校内球場から出ていった…。

「こうなった以上…試合は続けられないな。」

「ああ…」

皆が成の不慮の事故に落ち込んでみると、1人の男がゆっくりとやってきた。

「よくやったよ、褒めてやる。」

「藤浦っ！テメエ！」

「止めろっ、魚谷！」

「だが高萩、コイツは有り得ねえだろ！」

「今は何にせよ、試合を続行するか止めるかの問題だ。なあ、藤浦。」

「

「何だ？」

「お前、外野出来るか？」

「バーカ、俺がマウンドしか守れないかと、思ってたのか？舐めるな。」

「舐めてねえよ。ただお前に、外野を守れるかって聞いてんだ。」

「守れるに決まってるんだろ。俺は、ピッチャーの他に嘗て、持ち前の強肩を買われて、外野を委された事があるんだよ。」

「なら、やってくれるよな？」

「やんねえよ。こんな相手じゃ……」

「やつぱ、外野守備は下手なんだ。」

「何い？！テメエ、もう一度言ってみろ！」

「藤浦は、外野守備が下手なんだ。」

「下手じゃねえよ！やってやるよ！お前らより、ずっと俺の方が守備が巧いって事、証明してやるっ！」

「よし、これでメンバーは揃った。これからどんどん点を採って、守備ではガツシリ守ろう！」

「「オー！！！」」

この時、やっとチームが一眼となれた瞬間だった…。

f r i e n d s 3 2 : 敗色濃厚… (前書き)

俺らは、成を失って意気消沈としていた。

相手チームはその隙に、どんどん点を探り、気が付けば俺らはワールド負け寸前の状態だった…

friends 32：敗色濃厚…

（2回裏 3組チームの攻撃）

（このまま炎上する事無く、9回まで持続できるのか…）

1回表で、いきなり一人の貴重な戦力を失った俺らは、次の回の攻撃時を三者凡退さんしゃほんたいで終わらせてしまい、益々意気消沈となっていた。

「4番、キャッチャー…山岡君。」

（落ち着け、俺。いつものピッチングで行けば、三振は採れる。）

（ヒュン！）

（カキーンっ！！）

打球は、どんどんライト方向に上がっていった。

「っ！！ライトっ！！」

…葎塔が走ったが、打球はライトスタンドにゆっくりと入った。

「…う、嘘だろ。」

福本が、啞然とライトスタンドを見ていた。

その後、俺は完璧に炎上し…気が付けば7回終了時に、0対7だっ

た。つまり、次の回の攻撃時に俺らが点を入れなければ、自然的に俺らはワールド負けとなってしまう…。

「このまま、ワールド負けかよ…」

「俺達…やっぱ雑魚ちくだったんだな。」

皆が落ち込んでいる時に、一人だけ素振りしているのは藤浦だった。

「なあ、藤浦。」

俺は、藤浦に助けを求めていた。

「……………」

「今までの回、お前だけがずっとヒットで出続けたんだよな。」

「……………」

「何故、ホームラン球を打たない？」

「っ…!」

そう…藤浦は、内角のストレートばかり打って出塁していたが、甘く入ったスローボールやカーブは全てカットし、ファールボールにしていた。藤浦の力でアレをホームランにする事など、容易たやすいと思うのだ。

しかし、彼はわざとカットしてストレートを待っていたのだ。

「なあ、何故なんだ？」

「…勝ちたくないから。」

「えっ?!」

「勝つのが面倒臭いから。」

藤浦の言葉に、魚谷がキレてしまった。

「藤浦っ！」

魚谷が藤浦に突っ掛った。

「止める魚谷っ！！」

「許せねえんだよ、コイツが！！」

「馬鹿な奴だな。」

「何い？！テメエ、ふざけんなっ！！」

魚谷は、藤浦に殴り掛った。が、しかし藤浦の方が一枚上手だった。魚谷の拳を素手で簡単に受け止め、そのまま握り、一瞬の隙にそのまま横に魚谷の身体を投げた。

「ぐわっ！！」

「魚谷っ！！…藤浦、いい加減にしねえと…」

俺は、怒り心頭の葎塔を押さえた。

「葎塔、無駄だよ。今ので解つただろ？藤浦は、お前が勝てる相手じゃ無い。」

「チッ…」

「藤浦、頼む。お前なら、ホームランを打てる筈だ。最終の9回に繋げてくれ。」

「断る。」

「へえ…。じゃあ、この試合に負けた原因はお前一人の所為にして良い？」

「何っ？！」

「だって、お前がホームラン球をわざと打たないから勝てない…それで負けた。キツチリ理由になってるからな。」

「おい、ふざけんなっ！！」

「別にふざけてねえよ。ただ、正論を言っただけさ。」
「ぐっ……」

「3番、センター…藤浦君。」

藤浦は、黙ってヘルメットを被り、バットを持ってバッターボックスに向かって行った。

(ヒュン)

甘く入ったカーブ…それを藤浦は見逃さなかった。

(カキーンっ！)

打球は、グングン上昇していき、そして。

(ポトリ…)

打球は、センター横のフェンスの上を通り越し、見事にスタンドイン。

「ヨッシャー!!!」

「ナイス藤浦あー!」

(これで、コールドは逃れた…。)

藤浦のホームランで、1対7。

「4番、ファースト…瀬戸君。」

(ヒュン)

(カキーンっ！)

「よし、抜けた!」

「回れー、瀬戸お！」

瀬戸は、見事な2ベースヒットを放った。

「5番、レフト…犀潟君。」

（ヒュン）

（ブンっ！）

「ストライーク！」

「犀潟あ！よく見ろっ！」

（ヒュン！）

（カキーンっ！）

犀潟の打球は、レフト方向に飛んだ。

「頼む、落ちてくれー！」

彼の願いが通じたのか、レフトが捕り損ねて打球は落ちた。

「フェアっ！」

「走れっ、瀬戸ー！」

瀬戸が全力で走り、三塁を蹴ってホームに。しかし、レフトも球を捕り、三塁へ中継して本塁に投げていた。

「瀬戸っ、突っ込めー！」

（ザザーー！！）

砂埃が本塁の周りに発生し、ベンチから様子が見れなかった。

「だ…ダメか…」

砂埃が消え、瀬戸の手は捕手より先に本塁に触れていた。

「セーフっ!!」

「やった、2点目だ!」

「瀬戸、よくやった!」

「別に大した事じゃねえよ。」

「6番、サード…魚谷君。」

魚谷：彼は、過去に野球の経験が無かったものの、持ち前の運動神経と反射神経を駆使して頑張った結果、サードのポジションを手に入れた努力者である。

「魚谷、打てよ!」

（ビュン!）

「くっ!」

（バシッ!）

「ストライーク!」

「あのスピードで…いきなり曲がりやがった。」

今の相手の球を見て、俺らは啞然とした。

（ビュン!）

（ブンっ）

（バシッ!）

「ストライーク!」

ボールは、ストレートと球速が何ら変わらないが、打者の手元でいきなり曲がった。

「あ、あれは…」

「瀬戸、あの球種を解るのか？」

「ああ。魚谷が打てないのも解ったよ。」

「何なんだ、あの変化球は？」

「スライダー。しかも、ある程度の野球経験者じゃない限り、まともにはバットに当てられない…高速スライダー。相手の投手は、それを最終兵器として隠してたんだ。」

「こ…高速スライダー？」

「普通のスライダーなら、球速もあんま無くて打てるが、高速スライダーはストリートと何ら球速は変わらない。だから、慣れてない人は、ストリートと混同して打てない。」

「そんな…」

「ビュン！」

「ブンッ！」

「バシッ！」

「ストライーク、バッターアウト！」

魚谷は、肩を落としながらベンチに戻ってきた。

「すまない…」

「ドンマイ、あれは初めて見た奴は打てない変化球だからな。」

「くっ…あれは、何だったんだ。」

「高速スライダー。俺達には、あれはまだ未知の変化球だったのさ。」

次の葎塔も三振りし、福本は当てたが、判定はインフィールドフライだった。

「3アウト、チェンジ！」

俺達に残された攻撃は、次の回のみ…つまり、最終9回しか残されていない。

この5点差を、果たして俺らは覆す事が出来るのか？

f r i e n d s 3 3 : 起死回生… (前書き)

9回表、3組チームの攻撃。

高萩は、相手の上位打線を押さえる為に、未だに完成出来ない魔球を投げようとしていた…。

friends33：起死回生…

(9回表 3組チームの攻撃)

(ふう…何とか9回まで来れた。さて…どう投げて攻めようか…。)

俺は、福本の組み立てに注目していた。

「1番、ライト…藍矢君。」

俺は、福本を見た。しかし彼は、なかなかサインを出さない。

(福本どうした？サインを出せ！)

俺は、なかなかサインを出さない福本に、いらついていた。そしてようやく、福本がサインを出した。

(全部外せ。)

何と福本は、いきなり先頭バッターを敬遠しようとしているのだ。

俺は当然、困惑した。

(おい、まだランナー(走者)も出してねえぞ。しかも、先頭バッターを敬遠するなんて…)

俺は、首を横に振った。

(冗談じゃない、全力勝負だ。)

すると福本は、察してくれたのかアウトロー(外角低め)のストリートを要求してきた。

(よし、行くぜ。)

俺は、ミットを見据えながら振り被った。

(ヒュン)

(バシッ)

「ストライーク!」

文句なしのストライクだった。しかし、俺は相手のバッターの様子が変だと気付いた。

(何だ…まるで打つ気無しって感じだな…。なら、嫌でも打つ気にしてやる!)

既に勝ってる気になってる相手に、俺は気に食わなかった。

(福本…俺、アレ投げるぞ。)

俺は、福本にあるサインを送った。しかし、福本は首を振り、相変わらず外せだった。俺は到頭我慢出来なくなり、サインを無視しようとして決意した。

(ビュン!)

俺の投げたボールは、ドリル回転してインコース低めでミットに収

まった。

(バシッ！)

「ストライーク！」

「っ！！で、出来てる…。」

マグレだと思った。だが、それは真正正銘、魔球の完成だった…。

(ビュン！)

(バシッ！)

「ストライーク！バッターアウト！」

(決して…マグレじゃない)

この瞬間俺は確信した。

“フォーシームジャイロ”の完成だと。

(ビュン！)

(バシッ！)

「ストライーク！バッターアウト！3アウト、チェンジ！」

「なっ！？」

「はあ…はあ…はあ…」

俺は、全力で永山を抑えてしまった。

「よくやった高萩！ナイスボール！」

福本達が駆けよって来てくれた。

「くっ…皆が頑張つて守ってくれたから抑えられたんだよ。」
「よし、皆。後はサヨナラ逆転するだけだ。3組にパンチを喰らわせようぜ!」
「はあ…無謀な。」

藤浦が、溜め息を吐いて言った。

「大体、たった一回の攻撃で5点差を覆くつがえす事なんて…」
「出来るさ。」

「んな馬鹿な。」

「福本、何か根拠があんのか?」

「ある。」

「マジかよ?」

「マジ、大マジ。」

「じゃあ、その根拠を聴かせてくれ。」

「解った。んじゃ皆、俺の近くにに来てくれ。小さな声で話すから。」

福本の一声で、皆は小さな環わを作った。

「皆、集まったな。それじゃあこれから、勝利するための作戦を言い渡すから、よく聴いておけよ。」

それから福本は、長々と作戦の説明をした。説明が終わると藤浦は、ブツブツと呟いていた。彼以外の皆は、互いに説明確認していた。

「んじゃ、作戦開始!」

「オッシャー!」

これから、2組の起死回生攻撃が始まるのだ…。

f r i e n d s 3 4 : 魔球撃破! (前書き)

9 回裏、2 組チーム最終回の攻撃。

現在、フォアボールで榎故が出塁していた。

friends 34：魔球撃破！

(9回裏 2組チームの最終回攻撃)

(果たして…福本の作戦を俺達が出来るのか?)

俺は、正直不安だった。この作戦が失敗したら、併殺ゲッツや最悪の場合、トリプルプレイ三重殺になる。

今はラッキーな事に、先頭バッターの榎故がフォアボールで出塁していて、ノーアウト一塁の状態だ。

「1番…ショート、川端君。」

(川端…必ず塁に出ろよ。)

ベンチでは、早速福本が川端にサインを出した。川端は頷いた。

(ヒュン)

(コンツ)

「ファール!」

川端がしたのは、バント。しかし、残念ながら最初から決まらなかった。しかも、今のバントで相手チームに気付かれてしまった。

(…バントシフトかよ、マズいな。)

ファースト(一塁手)、サード(三塁手)が前進して、バント処理する気だ。これじゃ、1アウト確実だ。

「川端っ！無理すんな！」

しかし、俺の声を無視した川端はバントの構えを取っていた。

「やめる川端っ！既に気付かれてる！普通に打て！」

（ヒュンッ！）

（コンッ！）

何と川端は、プッシュバントをしたのだ。守備の意表を突く攻撃に、俺達を含むこの場に居た全員が彼の行為に驚いた。

「セーフッ！セーフッ！」

判定はフェアで、川端は一塁にギリギリで到達した。

「ヨッシャー、ランナー出たぞ！繋げ高萩い！」

「2番…ピッチャー、高萩君。」

俺は、ベンチから持ってきたバットを一回振って、バッターボックスに立った。

（まず、高速スライダーの球筋を見ないと…）

しかし、俺の思い通りに行かずこの後、相手の投手がカーブやチェンジアップなどを投げてきて、2ストライク、3ボールになった。

「くそ…繋げなきゃ…繋げるんだ！」

投手が振り被って、投げた。

（あの球筋…もしかして…ヨシッ！）

投げてきたのは、待ちに待った高速スライダーだった。

（カキーンッ！）

球はセンター前でバウンドし、センターに捕られた。これで満塁になった。

「3番：センター、藤浦君。」

「打て藤浦！ランナーを一人でも生還すんだ！」

藤浦は、無言でバッターボックスに立った。そして、第一球目：

（シュンッ！）

球は、サイドで大きな弧を描き、藤浦を空振りさせた。

「ストライイク！」

「よく見る藤浦！打てるぞ！」

第二球目：

「ストライイク！」

藤浦は、明らかにボール球を振った。

「藤浦！クソヤロウ！テメエ、勝ちたくねえのか！？」

ベンチで、魚谷と葎塔が藤浦に激を飛ばした。しかし、藤浦は全く表情を崩さなかった。
そして…第三球目。

(ヒュン！)

球は、ストレートの球速で藤浦の手元で曲がった。…だが、藤浦のバットは高速スライダー球を捕えた！

「…チツ！」

(カキーン！)

…打球は、凄いスピードで飛んでいき、ライナー気味に一直線でレフトスタンドに入った。

「ま…満塁…ホームラン？」

俺は、思わず声が漏れた…。その時、後ろから肩を叩かれた。

「おい、早く進めよ…ホームランだぜ。」

少し笑顔気味で立っていたのは、藤浦だった。

「…ああ！」

俺は、我に帰り藤浦と一緒に生還した。これで6対7、あと1点差に追い込んだのだ！

f r i e n d s s u s : 試合終了後のグラウンド。(前書き)

試合が終わり、各自教室に戻っていく中、藤浦だけグラウンド内で立ち尽くしていた。

friends35：試合終了後のグラウンド。

(平成：度 秋季高校野球関東大会 決勝戦)

「はあ…はあ…」

「踏ん張れ藤浦！あとストライク一つだぞ！」

(ビュン！)

「し、しまった！！」

(カキーン！！)

打球は、センターフェンスを越え、ホームラン。

「何と！最後の最後で、帝東の7番バッター湍水はやみが放った打球が逆転サヨナラ満塁打になりました！ここにきて栗桜、急造の1年ピッチャーにより、まさかのサヨナラ負けを喫しました！！」

「そ、そんな…」

(試合終了後のベンチ裏)

「やはり、急造で帝東は倒せなかったな。」

「済みませんでした、監督。最後の最後で…あんな無様な投球をしてしまいました。」

「いや藤浦、君は良くやったよ。栗桜での君の最後の大会に怪我した佐賀さかの代わりに、ピッチャーを引き受けてくれてありがとうな。」

「礼なんて、とんでもないです。佐賀先輩は、もう直ぐ復帰しますし…俺は失礼します。」

「藤浦、向こうでも野球するのか？」

「さあ…まだ考え中です。それじゃ監督、お元気で。」
「藤浦も、達者でな。」

「…いい、藤浦！気付けよ藤浦！」

「…はっ！…幻か？」

「何言ってるんだよ藤浦？さあ、試合も終わったし、教室に戻るぞ。」
「あ…ああ。」

俺は、ゆっくりと得点板を見た。3組との試合は、あれから瀬戸と犀潟が奇跡のシングルヒットで進塁し、最後は魚谷の2点タイムリ―で、俺らが逆転勝ちした。しかし、1組との試合は0対8、4回コールドで俺らの完封負けだった。

「おい、藤浦。置いてくぜ！」

「先行つてろ、あとで行くから。」
「解った。」

…栗桜では、いろいろあった。

甲子園常連校であった栗桜高校に俺が入学した当初、学校は荒れていて、決して良い学校じゃなかった。学校中の窓ガラスは常に割られていて、校内では決して聴こえるはずがないバイクの爆音が授業中に聴こえる始末。不良の中に野球部員もいたから、野球に入部した当時からかなりの嫌がらせを受けた。

それでも監督は、めげずに部を、そして俺ら部員を野球プレイヤーとして指導してくれた。だから、俺が1年の時に神奈川の強豪横崎をコールドで破り、甲子園の切符を手に入れたのだ。結局、甲子園1回戦で敗れたが良い思い出だった。

夏の甲子園が終わって、9月の下旬。俺は秋季関東野球大会が開催される前に、父親から転勤の話をされた。4月に東京の駒宮市こまみやへ移住するという話だった。

俺は勿論、反発したが高校生の分際で、モノが言えるはずが無かった。

結局俺の家族は、高2の4月に駒宮市へ引越して来た。そして、この“私立芹沢学園せいせつがくえん”に編入する事となった。

(キーン…コーン…)

俺は、急いで教室に戻る事にした。

f r i e n d s 3 6 : 青天の霹靂 (へきれき) : (前書き)

いつものように部活から帰宅した成増。しかし、迎えてくれた母親の顔が悲しみに満ちていた…

(成増家)

(ガチャ)

「只今。」

俺は、テニス部の練習が終わって帰宅した。

「龍、ちょっと。」

いつものように、靴を脱いで2階へ続く階段を上がるうとした時、お袋に止められた。

「何、お袋。」

「…ちよつと来て、お父さんから大事な話があるの。」

お袋の目は、何故か悲しみに満ちていた。

「…解ったよ。」

居間のドアを開けるとソファーに腰掛け、テレビの野球中継を見ている親父がいた。親父は、テレビを眺めながら話し始めた。

「龍、済まない。」

いきなり親父に謝られた。一体、親父は何をしたのか？

親父は、少し間を置いて話し始めた。

「父さんな、会社で左遷させんを命じられた。」

「さ、左遷？！」

左遷…その言葉自体、高校生でも解る。でも、どうして…

「会社の重大プロジェクトが上手く軌道に乗らなくなてな。その責任を取らされて、父さんが宮城の子会社に飛ばされる事になった。」
「…そんな。」

昔から、俺ら家族の生活を支える為に必死で仕事をしてた親父。そんな親父を、俺は誇らしく感じていた。しかし、今の父親にはそんな誇らしげなモノは一つも無い。

「龍、今日学校の先生と話してきたの。」

「俺…俺…」

嫌だ…その一言が言えなかった。

「…嘘だろ？左遷なんてそんな…」

「…残念ながら現実なんだ、龍。」

俺は、暗闇に堕ちた。

家族間内ではばらく沈黙が続いていた。

「ゆ…結花は？アイツは何て言ってた？」

結花は、俺の妹の名前である。

「…結は、さつきから部屋に閉じ籠ったままだわ。」

可哀想に…

「…俺達、あと何日ここにいられる？」

単身赴任でもして貰いたいのだが、あいにく俺の家の稼ぎ手は父親か俺しかない。例え、俺がバイトしたとしてもお袋と妹と3人の生活費には足りないだろう。と、いう事は…

「…2、3日にはここを出るつもりだ。」

「…龍と結の転入先の学校にはもう話をつけてるの。」

…俺のテニスバッグが、哀しげな音を立てて床に落ちた。

(千駄木家)

「只今あ。」

外が夕闇に包まれた頃、私は帰宅した。

「お帰り。今日、ちゃんと貰ってきたわよ。」

「ありがとう、ママ。」

クラスの皆にはまだ話してなかったが、私はこの夏からイギリスへ長期留学するのだ。そのためのパスポートを母から受け取った。私は既に、学校からは卒業認定を貰っている。

「あっちに行ったら、いつ帰ってくるんだっけ？」

「今の学年の人達が、順調に大学へ進学したら、大学2年になった春頃かな。」

「そんなに帰ってこないんだ…ママ寂しいな。」

「大丈夫、あっち行ったらちゃんと手紙送るからネッ！」

そろそろ、クラスの皆に話した方が良くかもしれない……そう私は思った。

f r i e n d s 3 7 : 別れの際(きわ) : (前書き)

その日は、生憎の大雨だった。

高萩は、駅前で成増を見掛けて声を掛けたが、無視されてしまった

...

f r i e n d s 3 7 : 別れの際(きわ) …

その日の朝は、生憎あいにくの大雨だった。
俺は学校の最寄り駅、西駒宮駅からバス停へと歩いていた。

「あれっ、あれは成だ。」

俺の前に、成が歩いていた。

「おい、成。お早う！」

俺の挨拶が成には、激しい雨音で聴こえなかったのかスタスタとバス停に行ってしまった。

今日の成は、いつもと違っていた。全くといって、話し掛けて来ない。ずっと窓際の席に座って外の景色を眺めていた。こっちから話し掛けても、全く振り向きもしない。

「おい高萩。アイツ、何かあったのか？」

福本も、どうやら心配のようだ。

「さあ…俺にも解らない。」

成の元気が無い理由が解つたのは、その日の帰りのホームルーム(HR)だった。

担任が一息置いて、こう言った。

「ええ…突然ですが、うちのクラスの成増が明後日、宮城の方へ転校する事になった。」

担任の言葉に教室中がざわめいた。

「そ、そんな…」

俺は、がっくりと肩を落とした。

成は教壇に上がって、ゆっくりと話し始めた。

「皆、急な話で本当にゴメン。皆と過ごせた約一年半、本当に楽しかった。…ありがとう。皆の事、絶対に忘れないから。」

成は、少し涙を流しながら自分の机へ戻っていった。

「あと、千駄木からも話がある。千駄木、ちょっと前に。」

担任の一言に皆が、またしても驚いた。

前に出た千駄木は、声を整えて喋り出した。

「私はこの夏から3年間、イギリスに留学する事になりました。」

涙を流しながら話した彼女の言葉に皆、動揺を隠せない。

「…皆と別れるのは辛いけど、帰ってきていつかまた逢えたら挨拶してね。」

…それを聞いたクラスの大抵の女子は、泣き崩れてしまった。男子

もうつ向いていた。

帰り道、俺は駄菓子屋に居た。ここは成が俺を殴った場所である。ただボンヤリと椅子に座って、鉄板付きのテーブルを見つめていた。

(いきなりかよ…何なんだよ…ふざけるな…)

俺の心の中では、やるせない気持ちで溢れていた。

「いぶつしゃい。」

この駄菓子屋を切り盛りしてる婆さんの、か弱い声が聴こえた。

「…高萩、やっぱここに居たか。」

その声に驚き、俺は振り返った。立っていたのは成だった。

「…座つても良いか。」

「…あ、ああ。」

成は、俺の対面の椅子に腰掛けた。

しばらく二人の間には、沈黙が流れていた。

そして、駄菓子屋の営業時間が終わりに近付いた時、成の方から喋りだした。

「高萩。」

「…何だよ。」

「色々…ゴメンな。」

「何が。」

「色々。」

「別に謝らなくたって…」

「…ゴメン。」

また沈黙に陥った。

「…あんた達、もう終わりだよ。」

婆さんの声に、俺は慌てて待ったを掛けた。

「す、済みません…チーズもんじゃ焼きを用意してくれませんか？」

「…あいよ。ちょっと待っててな。」
「ホント済みません、ありがとうございます。」

お礼を言うと婆さんはニッコリと笑い、奥の方へ材料を用意しに行ってくれた。

「お、おい…」

「良いよ、最期は奢おごらせてくれよ。」

「…済まない。」

成の頬に、ツーツと涙が流れた。

その時、店の外で自転車のブレーキ音が響いた。

「あれっ？二人揃ってどうしたの？」

店に入ってきたのは、新川と一人の女子だった。

「あ…新川か。その娘は誰？」

「私の妹で、亜華梨あかり。」

「こ…こんにちは。」

新川の妹は、か細い声で喋り、ペコリと頭を下げた。

「で、どうしたの二人供。」

「いや…俺は何か気が付いたら駄菓子屋に居たんだ。」

「俺も…」

成が呟いた時、婆さんがもんじゃの素を持って来てくれた。

「…さあ焼いて頂戴。おや…可愛い娘達も食べるかい？」

「えっ……」

「……大丈夫、金は俺が出すよ。」

「でも……」

「これが、成と最期の交わしだと思っただから、良かったら一緒に話そうよ。」

「……うん！御言葉に甘えて、私達も混ぜて下さいなっ！」

もんじゃ焼きを食べ終えて新川姉妹と別れたあと、俺と成は西駒宮駅の方へ歩いていった。

「成。」

「何だよ。」

「あっちに行っても、テニスするんだよな。」

「ああ。」

「頑張れよ。」

「ああ。」

「しょうがねえよ、今は親に従うしか無いんだから。」

「高萩。」

「何だよ、改まって。」

「……木……。」

「えっ？何て言った？」

「……千駄木さん、イギリス行くんだよな。」

「…………。」

そうだ、千駄木も……この夏から居なくなるんだと思うと、心が辛くなった。

「もう二度と逢えないのかな。」

「…………。」

三度、みたひ沈黙する二人。

「成。」

「……何だよ。」

「……最期は成らしく、堂々と千駄木に告白してから行けよな。」

「……それじゃ、俺こっちだから。」

気が付くと、既に駅の前まで着いていた。

「……ああ、また明日。」

「……………」

成は一度も振り返らず、歩いて行った。彼の後ろ姿は、とても哀しげな雰囲気を醸し出していた…。

f r i e n d s 3 8 : 夕闇に消え去っていく飛行機雲。(前書き)

到頭、成増と高萩達との別れの時がやってきた…。

friends38：夕闇に消え去っていく飛行機雲。

翌日、成は学校に登校してきた。そして…4時間目が終わり、成との別れの時間が訪れた。

「成増、元気だな。」

皆、一言ずつ成に声を掛けていた。瀬戸や川端は涙を流し、犀潟と魚谷は皆で密かに買っておいした花束を渡した。

「宮城でも、テニス頑張れよ。」

「ああ。」

ついに俺の番が来た。成に、何て言えば良いか解らなかった。

「高萩…」

俺は、何も言えずにうつ向いていた。

「今まで…ありがとう。」

成の優しい言葉に、俺はやっと声が出せた。

「…約束だ。」

「何だ、約束って？」

「次、会うときには無条件で殴らせる。」

「…ふっ、まだあの事を根に…」

「…解ったなら、早く行きな。」

…成は、哀しい顔をしながら俺に一回会釈し、教室を出ていった。

「…さよなら、成。」

…俺は、歩いて行く成の後ろ姿を見つめながらポツリと呟いた。

成が転校して行った後、俺は数日、虚脱状態だった。福本や潮見などに話しかけられていても、まともに返さなかった。

そんなある日の放課後、俺は藤浦に声を掛けられた。

「お前、時間あるか？」

俺は、虚ろな目で彼を見た。

「キャッチボール…しないか？」

学校から少し歩くと、一級河川が流れている場所に辿り着く。その河川敷で、毎日沢山の人が遊んでいる。俺と藤浦は堤防の上に通学鞆を置いて、グローブを鞆の中から取り出した。

「…さて、投げるぜ。70パーの力だからちゃんと捕れよ。」
(要するに、俺がキャッチャーって事かよ。)

俺は、溜め息をつきながらしゃがんで構えた。

「行くぜ。」

そう言うと藤浦は、振り被った。

(ビュン！)

球は、ライフル銃から放たれた銃弾のように螺旋回転しながら俺のグローブに収まった。

「ほう…よくジャイロを捕れたな。」

「別に…」

「…チツ、今度は全力だからな。怪我したって…」

彼は言い終わる前に、振り被った。

「知らないぜ！！！」

(ビュン！)

球はさっきの軌道と同じだったが、浮き上がる感覚と共にグローブに迫ってきた。

「くっ！」

(バンツ！！)

俺は何とかキャッチしたが、同時に左手が痺れた。

「…痛い」

「やはり、キャッチャーじゃない奴が俺の球を捕っても、たかが一回だけだよな。」

「…当たり前だろ。」

「フンッ！ やつといつもの高萩に戻ったか。」
「！」

（藤浦…お前。）

…藤浦がキャッチボールに誘ったのは、俺を元気づけるためだった。

「おい、ボーツとしてねえで早くグローブ構えろ！」

「藤浦……………ああ、来いっ！」

人には出会いと別れがある、友達同士でもそうだ。これは宿命^{さだめ}なんだ。

（…元気だな、大切な仲間よ。）

俺は、不意に丁度空に夕闇の中を徐々に消え去っていく飛行機雲と轟音を残しながら飛んで行く飛行機を見つめていた。

f r i e n d s 3 9 : 緑髪の後輩。(前書き)

4時間目が終わって、高萩達が昼食を採ろうとした時だった…。

friends39：緑髪の後輩。

(キーン、コーン…)

「それじゃ、授業おしまい！」

「起立、礼！」

4時間目が終わり、昼食の時間になった。

俺はいつものように、福本と転校して行った成の代わりに仲間になった藤浦と弁当を食べるつもりだった。

(ガラガラ…)

「高萩先輩っ！」

いきなり教室のドアが開いて、俺の名前を呼ぶ声が聴こえた。

「…またかよ、ひょうた彪汰。」

ドア付近に立っていた彼の名は、れいその零園 ひょうた彪汰、今年入学してきた高
1。

親が相当な漢字マニアで、難しい漢字を息子につけてしまったのだ。中学時代から、俺は彼と先輩・後輩の仲だった。

髪はツンツンとまるで剣山のようにワックスで立たせていて、更にも優しく、人なつっこい。だが、彼は優柔不断な部分が欠点で、俺へ妙に相談しに来る回数が多く、正直疲れる。

「先輩、聴いて下さいよ。」

零園は言いながら俺の所へ来た。他のクラスメートが、いきなり入

ってきた彼に注目している。

「何だよ…またフラレたのか？」

「そうじゃなくてっ！」

零園は、首を振って否定した。

「その逆ツス。」

「ま…まさか？」

「ここでは話せないんで、屋上に行きましょう！さっき、購買で先輩の好きな豚キムチのおにぎりとミックスサンドイッチを買ったとき
ましたから。」

零園は左手に持っていたビニール袋を上げてヒラヒラさせた。

「はあ…解ったよ。」

ここまでされちゃ、俺は断る事が出来なかった。

「ホントツスか？やったあ！」

零園は、まるで小さな子供のような無邪気に嬉しかった。

「済まない、福本と藤浦。」

「おいちよっと！」

「…福本、行かせてやれよ。」

「ありがとう、藤浦。」

俺は藤浦に礼を言って、零園と一緒に屋上へ向かった。

f r i e n d s 4 0 : 動き出す… (前書き)

高萩は零園と、屋上で話していた。

零園に告白した人の名前を聞いた高萩は、心底驚く。

friends 40 : 動き出す…

(ガチャリ…)

屋上に続くドアを開け、俺と零園は風の強い屋上のフェンスに寄り掛った。

「はい、先輩。」

零園は、先程購入した物が入ったビニール袋を俺に手渡した。

「で、さっきの話の続きを聴かせてくれ。」

俺はそう言いながら、袋からミックスサンドイッチを取り出して、封を開けて一つパクついた。

「それですね、その告白してきた女子の名前が…」

零園は、サンドイッチを食べていた俺に耳打ちした。その名前を聴いた俺は、少し違和感が湧いて、すぐにその違和感が解けた。

「何い?! 新川の妹にだと!」

零園は、何故俺が驚いているのか解らないようだった。

「えっ! 亜華梨さんにお姉さんがいるんツスか? 初耳ツス。」

俺は呆れて溜め息を佩いた。

「あんな、そんな事ぐらい知っとけよ。」
「…済みませんでした。」

零園は、頭を下げた。

「で、どうするんだよ？さっさと結論付けろよ。」

俺は、かなりイライラしていた。

「えっ…うーん…付き合おうかな…って思う…」

「ハッキリしろ！」

「うわっ！は、はい。返事します！ちゃんと亜華梨さんに返事します！」

「付き合おう、と？」

「はいっ！」

「よおし。」

俺は、零園の背中を叩いた。

「先輩、ありがとうございます！」

零園は、満足そうな笑顔で言った。この何とも愛らしい笑顔なら、女子の母性本能をくすぐるのも無理ない。

「ああ。早く行け！」

「はいっ！」

零園は俺に一度頭を下げ、屋上から出ていった。

（ふう…疲れた。）

俺は一旦、地べたについてビニール袋の中から食べ掛けのサンドイッチを取り出し、食べようとしたその時だった。

「そのサンドイッチ、私に頂戴。」

その声には俺は心底驚いた。その声の正体は、新川 亜未なのだから。

「聴いてたよ。高萩君の後輩が、亜華梨に告られたんだって？」

新川は、俺の手からサンドイッチを取って、パクついた。

「…いるんなら、出てこいよ。」

新川は、フフツと微笑んだ。

「しかし…亜華梨やるわね。あの子、昔から引っ込みじあんだっただのじ。」

新川は、懐かしそうに呟いた。

「俺も、後輩の口から新川の妹の名前が出てきた時は驚いたよ。」

「あの子も成長したんだなあ。」

新川は、笑った。

「てか、姉貴さんから見てアイツはどうなんだよ、妹と釣り合う男か？」

「そんなの考えないわ。あの子が好きになった人を評価するなんて、私には出来ない。」

新川は、溜め息を佩いた。

「…そうでっか。」

その時、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「それじゃ、私は先に行くから。次は物理だから、遅れないようにね。」

そう言って新川は、屋上のドアを開けて階段を降りて行った。

「…皆、動き出してんだな。」

俺は、自分だけが取り残された気分だった。

(さてと、俺も行くか。新川の言う通り、授業に遅れるとヤバいな。)

そう思い、俺は屋上のドアを開けて階段を駆け降りようとした。その時、後ろから声が聴こえた。

「…高萩君、新川さんと何話してたの？」

俺は、後ろを振り返った。居たのは潮見だった。

(物陰に隠れてて、見えなかった…。)
「何って…まあ相談事かな。」

俺の口から、とっさに出た答えはこれだった。

「嘘。相談事なら、あんな楽しそうな笑い声は聴こえない。」

潮見にここからずっと見ていたのかと思うと、少し怖かった。

「で…一体、何が言いたいんだよ。」

俺は、授業に遅れているという事から少しイライラしていた。さっきのイライラ感とは別だが。

潮見は、一息置いて言った。

「高萩君、新川さんの事が好きでしょ？」

「なっ?!」

俺は、自分の耳を疑った。

「だって、あんな楽しそうな笑顔は私とか福本君とかには見せない。」

「だからって…」

俺は、困惑していた。

「本当なんでしょ？高萩君は、新川さんの事が好きなんでしょ？」

潮見は、少しヒステリック状態になっていた。

「違う。」

俺は否定した。しかし、潮見のヒステリックは治まらなかった。

「嘘つき！高萩君は、絶対新川さんの事が好きでしょ?!」

俺は、我慢の限界に達した。

「いい加減にしろっ！違うって言ってんだろ！」

潮見の動きが止まった。

「だって…だって…」

潮見は、嗚咽おえつを漏らしながら言った。

「…俺はもう行く。」

俺は潮見を置いて、物理の授業に行こうとした…。

「待って！」

今度は、潮見が俺の動きを止めた。

「…何だよ。」

「あたし…あたし…」

潮見は、泣きじゃくりながら言った。俺は、更にイライラしていた。しかし次の瞬間…俺のイライラ感イライラ感は吹っ飛んだ。

「あたし、高萩君が好きなの！凄く好きなの！」

潮見の精一杯の声は連絡階段の構造上、かなり響いた。

「…はあ?!」

俺は、かなり驚いた。潮見は、しゃがんで声を上げて泣いていた。

「あたし…んくっ…高萩君が…大好きだから…他の…女子と…仲良
く…くっ…してるのが…許せなかった。」

俺は、階段を上がり潮見にポケットティッシュを渡した。

「ありがとう、麻衣。折角の顔が台無しになるから早く処理しな。」

俺は、それだけ伝えて教室へ向かった。

f r i e n d s 4 1 : 謎の強襲者達… (前書き)

いつものように、授業を受けていた高萩達。
だが、今日は違っていた…

f r i e n d s 4 1 : 謎の強襲者達…

5月…ゴールデンウィークに入る前日、ある異変が起きた。それは、5時間目の英語の時間だった。俺の頭の中は、前日の潮見の言葉がずっと駆け巡っていた。

(ガラガラ…)

いきなり教室のドアが開いて、黒服を着た一人の大柄な男が入ってきた。教室中に、ざわめきが起きた。

男は、英語の教師にアイコンタクトした。英語の教師は、静かに教室を出ていった。

男は、教師が出ていった事を確認するとゆっくりと口を開いた。

「…藤浦 成一、高萩 荊太郎はいるか？」

俺はドキツとした。藤浦も、驚きが隠せなかったようだ。

「…いるのか、いねえのか？」

ドスの効いた声は、とても怖い。俺は藤浦に視線を送り、藤浦と一緒に手を挙げた。

「お前らが、そうか？」

男は、鼻で笑った。藤浦が舌打ちした。

「お前らに逢いたがっている方がいる。今直ぐ、教室を出ろ。」

俺は、いきなりの事で何が何だか解らなかつた。藤浦は、ただ男を睨みつけていた。

ポーツとしていたので、後ろの気配を感じられなかつた。俺と藤浦は、あの男と同じような背格好の男達数人によつて、半ば強制的に連れ出された。俺ら在必死に抵抗しても、男達はビクともしなかつた。

「…俺らをどこに連れて行くんだ？」

俺らは、あの後に外まで連れ出されてアイツらが用意した黒の外国セダン車に乗せられた。勿論、俺らが逃げられないように男二人掛りで腕をつかんでいる。そんな中で、藤浦はムスツとした表情で助手席に座っている男に話し掛けた。

「フツ…生意気な口を叩くな若造。今から、お前らをお前らのある方に会わせる。」

「ある方って…誰ですか？」

俺は質問した。

「会えば解る。」

男は、冷たく言い放った。

数分後、車が停車した。

「ここだ。」

男に言われるままに見てみると、いつしか見た事がある巨大な豪邸が目の前に見えた。

「じ、じいじは…」

「…チッ！」

藤浦が小さく舌打ちした。

「さあ、こっちだ。」

男に付いていくと、かなり立派に造られた玄関に辿り着いた。

（ガチャリ…）

「ようこそ。待ってたよ、二人供。」

中に入った時に声が聞こえ、声の主の方を見た瞬間：俺は驚いて声が出なかった。

f r i e n d s 4 2 : 報復の再戦… (前書き)

高萩と藤浦を招待したのは、有名企業の跡取り息子の高校生、茉山
だった…。

f r i e n d s 4 2 : 報復の再戦:

「さっ、上がって。僕の部屋へ案内するよ。」

俺達を迎えたのは、俺達と同じ高校生で日本有名IT企業の5本の指に入る“プログレスグループ”の経営を任されてる時期社長、ま 菜山 やま 卓 すくろ、18歳の高校3年生。

彼は、14歳でアメリカの大学を卒業した超切者であり、かつ個有の野球チームを持つ程の野球好きとも知られ、テレビで野球中継の解説者として出演している程。彼自身の実力も半端無いらしい。そんな彼が、何故俺達に会いたかったのかが解らなかった。

「…菜山さん、久しぶりですね。」

藤浦が、いきなり口を開いた。

「えっ?! 藤浦、菜山さんと知り合いなのか?」

「相変わらず、へらず口は変わってないようだな藤浦。」

俺は、藤浦と菜山の関係が一体何なのか知りたかった。

「藤浦、何でお前が気楽にあの人と喋れるんだ?」

「昔、あの人が入った野球部と対決した事があったんだ。」

「えっ?!」

「ほう…よく覚えていたな、感心だ。」

菜山は、遠くを眺めるようにゆっくりと言った。

「さて、僕の部屋に着いた。遠慮はいらないから、そこに腰掛けて

くれ。」

示されたのは、高級なソファアだった。

「いいです、遠慮します。」

とっさに藤浦が言ったので、俺は腰掛けなかった。

「フフツ、ホント性格は変わってないな。」

茉山は、鼻で笑った。

「…で、一体何の用でここに連れて来たんツスか？」

藤浦が、ムスツとした表情で言った。茉山は、溜め息を一つして話し始めた。

「短刀直入たなぢちくごに言う。僕が入ったドリームチームと対決して欲しい。」

「な、何ですって?!」

俺は、すっとんきょうな声を上げた。

「藤浦がいた高校に負けてから、僕はずっと君を憎いと思ってた、潰そうとした。」

だが、潰す前に君は栗桜を転校した。

僕は、悔やみ切れなくて君の行方を調べたよ。そしたら驚いたよ、全校生徒の80%が女子の芹沢に転入してたんだから。でもそれが、僕にとって嬉しかった。何故なら、君を潰せる絶好のチャンスだからね。」

藤浦が聞き返した。

「……どうして、高萩まで呼んだんですか？彼は関係無いと思います
が。」

茉山は言った。

「噂によればその彼は、あのドラフト候補リストに載られていた
高速ライダーを武器にするピッチャー、武里君からヒットを放ち、
強打者の永山君を三振に抑えたという話を聞いたんでね、君とも是
非、手合わせしたくなってね。」

俺はかなり驚いた。あの二人がまさか、プロからドラフト候補に上
げられているとは思わなかったからだ。

「もし断るつもりでいるなら良いよ。でも、君達の高校に僕から圧
力を掛ける事も可能だからさ、断ったらどうなるか解るよね。」

茉山が妖艶ようえんな笑みをした。

「……解りました。勝負しましょう。」
「藤浦?!」

「高萩：ここは勝負するしかねえだろ。学校にいる皆に迷惑を掛け
ちやいけねえし。」

「だ、だが……」
「ありがとう、藤浦。それじゃ、試合は5日の午後1時から。」
「い、5日って……」

藤浦は、ゆっくりと頷いた。

「野球部が遠征してる時だ。」
「そ…そんな…。」
「うん？どうしたのかな？」
「いえ、何でも無いツス。」
「それじゃ、御互いに健闘を祈るよ。」

「なあ、藤浦。俺達、茉山さんのチームには勝てないと思う。」
学校への帰り道、俺は藤浦に言った。

「…勝てねえな、俺ら2人じゃ。」
「えっ?!」

藤浦の意味深な言葉に、俺の足は止まった。

「何だよ、それ？」

藤浦は、一息置いてから言った。

「いいか？野球は、1人じゃ何も出来ない。9人揃って初めて成立するスポーツだ。」

「…藤浦。」

「さて、クラスの奴らに頼んでみるか？」

「ああ！」

この時、俺と藤浦は軽く考えていた。しかし、この後…予想もしなかった壁に打ち当たる事となる。

f r i e n d s 4 3 : チーム完成！(前書き)

(何か：野球の話ばかりで済みません。)

高萩と藤浦が、クラスの男子に“チームに入らないか？”と呼び掛けたが、何と犀潟以外の全員が拒否したのだ。

friends 43 : チーム完成!

「何故に?! 何でやりたくねえんだよ?」

「あの茉山さんだろ? ボロ負けになるだけだろ?」

「それに、その日は少し予定があるしな。」

「済まないな高萩、藤浦。」

翌日、俺と藤浦はクラスの男子に呼び掛けたが…何と、犀瀉以外の男子全員に、参加しないとやられてしまったのだ!

「どうするんだよ…藤浦。」

藤浦は、悩んでいたが、ある良い考えを思いついたらしい。

「高萩、今直ぐにお前のツンツン頭の後輩を呼んできてくれ!」

「ふんふん…成程です。解りました、俺は参加しますっ！」
「よく言ってくれた、零園！」

これで零園が入ってもらい、4人。しかし、まだ足りない。

「あと5人…どうにかならないか？」

「3人はどうにか出来るツスけど…。」

「残りの2人か…。」

「…そうだ！3年生の先輩に男が1人いたはず！」

「でかした、高萩！早速、行くぞ！」

「済みません、岩原先輩いますか？」

3年生の教室は、2年生の教室に近いので直ぐに到着した。

「何だよ、誰だよ…お前ら。」

窓側の一番後ろに座っていた、明らかにネクラな長身の男が気付いた。

「御食事中、申し訳ないんですけど…岩原先輩に御願いがあって来ました。」

「嫌だね。」

（回答、早っ！）

「え…えっと、今度の5日に岩原先輩と一緒に野球をしたいなあって。」

「ふざけるな、却下。」

岩原は堅くなに、断り続ける。それを見かねたある女子の先輩が隣に座った。

「岩原、可愛い下級生がこんなに頼んでるんだよ？行ってあげても良いじゃん、ねっ？」

（ナイス、先輩。）

「御願いますっ！ただ、外野でつつ立ってるだけで良いですから。」

その時、岩原の眉が動いた。

「…チッ、果南かなんが言うなら。」

俺と藤浦は、見合わせて笑顔になった。

「さて…、これであと1人。藤浦、どうする？」

「うーん、もう学校には男子がいないからな。」

「…ねえ、高萩君？」

「えっ？…うわっ！」

いきなり、後ろから声が聴こえてきた。俺は驚いて、尻餅をついた。

「何だよ…またかよ。」

俺の後ろにいたのは、両手の人差し指を絡ませてうつつ向いていた潮

見だった。

「藤浦、先行っててくれないか？」

「あ…ああ。」

藤浦は先に教室へ戻って貰い、俺と潮見は保健室に行った。

（ガチャリ…）

どうやら、保健の先生はいないようだったので、そこら辺にあったパイプ椅子いすを借りて座った。少しの沈黙の後、俺から話し始めた。

「で、何だよ。あの話は、無理だから…。」

「…違うの。」

「えっ？…じゃあ、何だよ？」

潮見は、また両手の人差し指を絡ませてうつ向いて言った。

「…あたし、入っても良いかな？」

「何に？」

「…野球のチームに。」

「はあ?!」

俺は驚いて、声域が上がった。

「ちょい待て。麻衣は女子だぞ？普通に考えれば危ないだろ？」

「でも…。」

「気持ちありがたいけど、麻衣は入れられな…。」

「でもっ!」

いきなり、潮見が叫んだ。

「なっ、何だよ…。」

「でもあたし、やりたいっ！高萩君と一緒に野球したい！役に立ちたいの！」

潮見は、精一杯の声で主張した。俺は、少し悩んだ。

「麻衣：体力は自信ある？」

「うーん…無いかな。」

「握力は何ある？」

「解らないけど…両手共、16無いと思う。」

「…キツいな。」

「そんなあ…。」

潮見が、涙目になっている。俺は、慌てて言った。

「で、でも…自分からやるって言うてくれたのは、嬉しかったよ。

麻衣、やるかい？」

「…うんっ！」

潮見は、持っていたミニタオルで涙を拭った。

「…ありがとう、高萩君。あたし…頑張る！」

「御礼を言うのは、こっちだよ。ホントありがとう。」

「うん…ねえ、高萩君？」

「ん、何だよ？」

俺が潮見の方へ身体を向けると、背伸びした潮見の顔が俺の顔に近

寄ってきた。

「えっ?! うわっ! 麻衣、何すんだ!」

メンバーが揃い、

俺達は3日と4日に全体練習をしたが、潮見は全然と言うほど、野球センスが無かった。零園が呼んだ3人もあまり上手くなかった。しかも、岩原に関しては2日間の練習に現れなかったのだ。

…そして、運命の試合当日の朝がやってきた。

f r i e n d s 4 4 : 険悪なチームナイン。(前書き)

運命の試合当日。藤浦と岩原以外、全員集合していた。

f r i e n d s 4 4 : 険悪なチームナイン。

「おせえな…藤浦と岩原先輩。」

「…そうだね。」

集合時刻をとつくに過ぎてるのに、藤浦と岩原が現れない。俺と潮見と犀潟は、心配していた。

「済まない！遅くなった。」

向こうから走ってくるのは、岩原を連れだした藤浦だった。

「遅いし！」

「いや…済まん。この人を説得すんに時間が掛ってしまったな。」

無理矢理連れて来させられた岩原は、そっぽを向いている。

「俺は、別に参加するってまだ言ってるねえぜ。」

さすがに、俺もカチンときてしまった。

「何ですか、その態度は？」

「ああ？やんのか、チビ？」

辺りに険悪なムードが立ち込めたが、間一髪で零園のお陰で免れた。

「御互いに、礼っ！」

「「御願いますっ！！」」

先行はじゃんけんの結果、俺らが勝って相手チームになった。各自、グローブやミットを填めてる時に、後輩達が藤浦に質問した。

「先輩、俺達のポジションは決まってるんですか？」

「大丈夫、既に決まってる。」

俺らの打順と守るポジションは、前日に藤浦が決めたらしい。

「ほれ、この通り。」

藤浦から、打順とポジションが書いてある紙を渡された。

(私立芹沢学園高校、メンバー一覧表)

- 1番、セカンド(二塁) : 美作 みまさか 雅臣 まさおみ : 高1。
- 2番、レフト(左翼) : 犀潟 さいかた 空平 くうへい : 高2。
- 3番、サード(三塁) : 屋代 やししろ 光太 こうた : 高1。
- 4番、ピッチャー(投手) : 藤浦 ふじうら 成一 せいいち : 高2。
- 5番、キャッチャー(捕手) : 高萩 たかはぎ 荊太郎 けいたろう : 高2。
- 6番、ファースト(一塁) : 落合 おちあい 正 ただし : 高1。
- 7番、ショート(遊撃) : 零園 れいその 彪盆 ひょうた : 高1。
- 8番、ライト(右翼) : 潮見 しほみ 麻衣 まい : 高2。
- 9番、センター(中堅) : 岩原 いわはら 克彦 かつひこ : 高3。

「っ！？」

俺は、メンバー表を見て藤浦に問いつめた。

「おい！俺がキャッチャーってどついう事だよ?!」

藤浦は、頭を掻きながら答えた。

「まあ…俺の球を受け取れるのはお前しかいねえからな。」

「はあ…何なんだよ。」

俺は渋々了承し、キャッチャーポジションについた。

「締まっていいこうぜ!」

「おー!」

…こうして、俺らの学校の存続を掛けた闘いが始まった。

f r i e n d s 4 5 : 不自然 : (前書き)

到頭、芹沢学園高校の経営存続の運命を賭けた、茉山率いる龍泉高校との試合が始まった。

先攻は龍泉で、1番バッターとして現れた奴は意外な人だった。

friends 45：不自然：

「プレイボール！」

サイレンが鳴って、本格的な試合の雰囲気が出た。

ここは、茉山家が所有している特別スタジアム。自然芝で地面の土も悪く無い。寧ろ、最高級。得点版も電光式で、俺らの打順とポジション番号まで映ってる。まるでプロ野球並だ。

「一回表。龍泉高校の攻撃は、1番：ピッチャー、さいかた犀瀉、まひらめき真空君。」

ウグイス嬢の声と共に、先頭バッターがバッターボックスに入ってきた。

ウグイス嬢のセリフとそのバッターを見て、俺は困惑した。

（えっ？今、“犀瀉”って聴こえたような…。）

すると、そのバッターがいきなりレフト方向に向かって叫んだ。

「久しぶりだな、我が弟よ！」

（えっ?!弟?まさか…）

「た、タイム御願いますっ！」

俺は、主審にそう伝えてレフトの犀瀉の所へ向かった。犀瀉は、明らかにバッターを睨んでいた。

「さ、犀瀉…あの人は？」

俺が言うと犀瀉は、ためらいも無く言った。

「…アイツは、一家離散の時に別れた兄貴だよ。」
「えっ?!」

俺の驚いた声で、皆が犀潟の所へ集まってきた。

「それ…どういう事だよ。」

藤浦が、驚いた顔で言った。

「…昔の兄貴は、下の俺達兄妹に優しかった。兄貴は元々、野球をしていて、実力はプロ並だった。だけど、あの一家離散に遇ってから性格が変わった。」

兄貴は、俺と妹の空莉えありを見捨てて、自分だけ良い生活をする為に、莫大な金が入る菜山のチームに入団したんだ。」

「そんな…。」

潮見は落ち込み、悲しい声で言った。

「君達、早くしなさい!」

各塁審に注意され、藤浦達はそれぞれのポジションに戻った。

俺が戻る時、犀潟に呼び止められた。

「高萩…兄貴を倒そう。勝とうぜ!」

「犀潟………ああ、勝とうぜ!」

俺と犀潟は、御互いに拳を付けた。そして、俺はキャッチャーのポジションに戻った。

「プレイっ!」

(さて…どうしようかな。)

キャッチャーなど、初めてするから俺はどうすれば良いか解らなかつた。

(取りあえず…。)

俺は、ストレートを示した。藤浦は、振り被って投げた。

(ビュン!)

伸びてくる球。犀潟の兄は、完璧に捉えていた!

「カキーン!」

打球は、伸びてレフトに向かった。これは、入ったかと俺は肩を落とした。しかし…一人だけ違っていた。

(ガシヤッ!)

「クソッ!」

(バシッ!…スタツ。)

「アウトっ!」

何と、犀潟がフェンスによじ登って打球を見事にキャッチして、ホームランを防いだのだ!

「なっ、何い?!」

「ナイスっ、犀潟!」

犀潟は、彼の兄に向かって冷たく言い放った。

「久しぶりに会ったけど兄貴、パワー不足で打球をひっぱれない点
は変わってないな。」

「ふっ、さすが我が弟だ。」

犀潟の兄は、鼻で笑ってベンチに戻った。

「2番：サード、かみじょう上条 やすたか泰隆君。」

2番打者と打順で待ってる3番打者は、テレビで見覚えがあった。
去年の甲子園に出場してた福島ふくしま県立郡津ぐんづ高校の1番打者と4番打者
だった筈だ。茉山のドリームチームは侮あなごれないと、俺は感じた。

(ビュン)

(バシッ！)

「スットライーク！」

初球は、インの絶妙なストレートでストライク。

(ビュン)

藤浦が投げた瞬間、上条がバントの構えをした。

(コンッ)

絶妙なバントだった。藤浦が走って捕って一塁に投げようとしたが、
上条は既に一塁に到達していた。

「は…速い。」

「3番：ファースト、霜尻しもじり 賢基君さかき。」

3番打者の霜尻は、去年の甲子園で上条を一塁に置いた時はエンドランを良くやった事を憶えていた俺は、藤浦にインコースの球を要求した。

(ビュン)

(バシッ!)

「ットライーク!」

ベースの端ギリギリの、ストレート。さすがに、エンドランは出来ないはずだ。しかし、次の球を見ているかのように、霜尻の表情は崩れていなかった。

(ビュン)

(バシッ!)

「ットライークツー!」

藤浦の十八番おはこのカーブで、ツーストライク。しかし、コレでも霜尻どころか俊足の上条が動かない。俺は探りを入れてみる事にした。

(藤浦、牽制球を投げる。)

俺が出したサインに藤浦は頷いた。

(ビュン!)

(ザザーッ!)

(バシッ!)
「アウトッ!」

何と、一塁の上条が牽制球でタッチアウトになったのだ。あの俊足なら、あんな失敗はしないと思うのだが。

(ビュン)

(バシッ!)

「ットライーク!バッターアウト!スリーアウト、チェンジ!」

俺は、明らかに茉山のチームの動きがおかしいと思った。あの霜尻が、見逃し三振するなど滅多に無いし、上条が盗塁しない事も疑問だった。

「1回裏、芹沢学園高校の攻撃は、1番：みまさかセカンド、美作まさおみ 雅臣君。」

しかし、俺達に疑っている時間は無かった。

f r i e n d s 4 6 : 鎮 圧。(前書き)

1回の裏。高萩達の攻撃が始まった。
相手ピッチャーは、あの犀潟の兄。さすがに、実力が違いすぎた…。

friends 46 : 鎮圧。

「プレイツ！」

1 回裏、俺達芹沢学園高校の攻撃が始まった。

打席には、こっちのトップバッターである1年の美作。そして相手投手は、あの犀瀉の兄。果たして、どういう球を投げてるのか。

「そっぴゃあ…肝心の菜山がフィールドに居ないじゃねえか。」

藤浦が、相手チームの全体ポジションを見て言った。

「確かに。電光得点板の打順にも、載せられてない。」

「一体、アイツはいつ出てくんのだ？」

藤浦が、少々いらついて言った。

「さあな。それより、今は相手投手の球を見ようぜ。」

俺は、藤浦を諭さとした。

(ビュッ！)

(ボンッ！)

「ストライーク！」

「は…速い。」

俺は、思わず言葉を漏らした。

「外角低めのストレート。140後半は出てるな。」

藤浦は、今の球を分析していた。

(ビュッ！)

(バシッ！)

「ットライークツー！」

内角に切れるスライダー。犀瀉の言う通り、アイツの兄貴は只者じゃない。

(ビュッ！)

(ブンッ！)

(バシッ！)

「ットライーク！バッターアウト！」

「最後のはカーブか…容赦無いな。」

藤浦は、溜め息をつきながら言った。

「だが、次の打者は出るんじゃないか？」

俺は、犀瀉を見て言った。兄が投手なら、弟は兄が投げる球種がある程度解っている筈だ。それに犀瀉自身、選球眼が優れているし、セカンドゴロやショートゴロ、サードゴロでもセーフになる俊足の持ち主だから。

「2番：レフト、犀瀉さいかた 空平君くうへい。」

(ビュッ！)

(バシッ！)

「ボール！」

犀潟への第一球目は、カーブだった。

「兄貴、ちつとも変わってないな。」

犀潟が言った。彼の兄は、弟の言葉を無視した。

（ビュッ！）

「俺が、4年前と同じだと思っなよ！」

（カキーンッ！）

「ファールッ！ファールッ！」

「おっしいー！」

今の犀潟の打球は、レフトポールより少し切れてファールだった。

「犀潟、打てるぜ！」

藤浦が、犀潟に激を飛ばした。

（ビュッ！）

（カキーンッ！）

「ファール！」

またもファールだった。

（次は打てそうだな。）

俺はそう思っていた…だが、それは甘かった。

（ビュッ！）

球は、ゆっくりなスピードで、先ほどのストレートと違い、山なりに落ちていった。

「くっ！」

(ブンッ！)

「ットライーク！バッターアウト！」

「っ？！」

何と、犀潟が空振りしてツーアウトになってしまったのだ。

「犀潟、どうした？あれは打てるぜ！」

ベンチに戻ってきた犀潟に、藤浦が言った。すると犀潟は、悔しそうに呟いた。

「2年前とは違う組み立てになった。しかも、チェンジアップを投げていた。」

「ちえ…チェンジ…？」

潮見が、全く解らない顔をして言った。

「チェンジアップ。別名、パームボール。スローボールの代用で、多くの投手が投げる変化球。山なりの軌道になって、ホームベース付近で急激に落ちる。これを直球と一緒に使われると、バッターの打つタイミングもずれる。だから、空振りしたり打ち損じてゴロになりやすい。」

藤浦が、細かく説明した。

「だから、犀潟君はいきなり投げられたチェンジアップに対応出来ずに空振りしたのね！」

潮見は、理解したようで手を叩いた。

「しかし、藤浦。まだ犀潟の兄は、変化球を隠してる可能性はあるぜ。」

俺が言っていると、藤浦は腕を組んで考えていた。

「3番…サード、屋代やしん 光太君こうた。」

バッターボックスに立った1年の屋代に、藤浦が言った。

「屋代、スト2まで待て！」

それを聴いた屋代は、困惑した顔をしたが直ぐ様、バットを握って構えた。

(ビュッ！)

(バシッ！)

「ットライーク！」

直球…一球目から真ん中。

(ビュッ！)

また同じ直球の軌道。俺は、思わず叫んだ。

「屋代！打て！直球だ！」

俺の大声でびっくりした屋代は、フルスイングした。

（カキーン！）

屋代の打球は、ライナーになってサードに捕られた。

「アウトツ！スリーアウト、チェンジ！」

（う、嘘だろ…。）

屋代が、肩を落として帰ってきた。

「済みません…無様で。」

藤浦は、肩を叩いて無言で屋代を諭した。

「馬鹿じゃねえのか？お前ら。」

いきなり、後ろのベンチに座っていた岩原が言った。相手は先輩だったが、俺は我慢出来ずにつっかかった。

「何い?!」

「落ち着け、高萩！」

犀潟が、怒っている俺を必死に止めてくれた。

「俺らはあのバッテリーに、まんまとハマられたのさ。」

岩原は、サラリと言った。

「それ…どういう事ッスか？」

藤浦が、冷静に尋ねた。

「相手のバッテリーは、1、2番に対して変化球を投げていた。しかし、3番のクリーンナップから直球しか投げて無いだろ？」

「確かに…。」

「屋代は、元々野球をやっていたんだろ？」

「はい、先輩の言う通りです。」

屋代が頷いた。

「敵は、何らかの方法で彼が野球経験者である事を突き止めた。ということとは、彼に甘い変化球など軽く打たれちまうと敵は最初っから解っていたんだ。だから相手キャッチャーは、あえて打ちにくいコースの直球を投げさせた。そして、この馬鹿が打ちにくい直球を無理矢理打てと叫んで、屋代が打ってしまったのさ。」

「くっ…。」

岩原の言う通りだった。俺は、何も言い返せなかった。

f r i e n d s 4 7 : 旧友は時として、壁となる。(前書き)

2 回表。龍泉高校の4番として現れたのは、高萩の天才旧友だった
…。

friends 47：旧友は時として、壁となる。

2回表、龍泉高校の攻撃。

次は4番バッターだが、ランナーが居ないのであまり考えていなかった。しかし、俺はウグイス嬢から名前を言われて、バッターボックスに立った男を見て、考えていなかった事を後悔する事となる。

「4番：センター、氷関ひせき 拓也たくや君。」

「久しぶりだね、荊太郎君。」

「?!」

俺は、フリーズした。

「荊太郎君、大丈夫かい？」

「ひ…氷関。何故、お前が…。」

氷関 拓也。俺の小学校時代の旧友。小4の頃に転校してきて、俺は奴と直ぐに仲良くなった。

それから一緒に野球のリトルリーグチームに入り、俺がピッチャー、氷関がキャッチャーでバッテリーを組んだ。氷関とのバッテリーで、リトルリーグ県大会を優勝し、全国でも一度ベスト8に入った。

しかし突然、氷関は中学に上がる前に北海道へ転校していった。それから彼とは、音信不通の状態だった。

久しぶりの再会が、まさか敵という形になるとは…神様も残酷な方だ。

「荊太郎君。僕達は旧友だけど、今回ばかりは手加減無しで行かせて貰うよ。」

「くっ。」

そう言った氷関の目は、冷たかった。

「プレイツ！」

リトルリーグ時、彼はチームのクリーンナップの一人だった。とにかくミート力があり、空振りが少なかつたし、パワーも中々あつた。

（ここは、外角のカーブだ。）

俺は、藤浦にサインした。藤浦が振り被つた。

（ビュッ！）

絶妙な弧を描き、ミットに入ると思った。しかし、氷関は外し球を捉えた。

（カキーン！）

打球はライトポールを少しずれて、ファールになつた。

（えっ…そんなバカな。）

俺は、ちゃんと外角に外させた。しかし、そんな球を軽々と外野に運ばれるとは思わなかつた。

「うーん…タイミングを外したみたい。次は、絶対にアジャストさせるよ！」

そう言うと氷関は、2、3回素振りをした。バットが風を切る音が、とても凄まじかった。

（マジかよ…。）

俺は、変化球でカウントを稼ぐ事を止めて、内角高めのストレートのサインを出した。藤浦が振り被って、第二球目。

（ビュッ！）

（バシッ！）

「ットライークツー！」

さすがに、氷関でも手が出せなかったようだ。これで、氷関を追い込んだ。

俺が、内角低めのストレートを要求して藤浦が投げた第三球目。

（行ける！）

藤浦の投球が成功し、球はそのままホームベースは通過しようとした…その時。

（カキーン！）

何と氷関が、この打ちにくい球も打ったのだ。

「っ？！」

打球は、センター方向に飛んで行った。

「岩原先輩、捕って下さい！」

しかし岩原は動かず、レフトの犀潟が一回地面に落ちた打球を捕った。その隙に、氷関は二塁に到達していた。

「タイムお願いしますっ！」

俺は、岩原の所に向かった。

「何故、あのフライを捕らないツスカ?!」

俺は声を荒げて岩原につつかかったが、岩原はサラリと言った。

「お前らが言ったよな? “何もしなくて、ただつつ立ってるだけで良い。” って。」

「あっ…クソッ!」

俺は口約束を思い出し、悔しく膝ひざを叩いた。

「5番…シヨート、東 浩樹君。」

現在、ノーアウトで氷関が二塁打で出塁。セオリーなら、バントで氷関を三塁に送るだろう。

(なら、ここは進めさせるか。)

俺はバントされやすい、ど真ん中のストレートを要求した。

(ビュッ!)

(コンッ!)

相手はセオリー通り、送りバントした。

「藤浦、ファーストっ！」

（ビュッ！）

（バシッ！）

「アウトッ！」

何とか1アウトしたが、氷関が三塁に進塁して得点圏に入ってしまった。このまま犠牲フライを外野に飛ばし、タッチアップで確実に1点取られる。

「6番：キャッチャー、石橋 真司君。」

1点取られるのを覚悟で、打ちにくいコースでスライダーを投げさせた。

（ビュッ）

（カキーン！）

まるで前もって計画されてたかのように、打球は外野に飛んで行った。

「潮見っ、捕れ！」

「えっ?!」

潮見が走り出したが、打球まで相当の距離があった。

「えーいつ！捕れてえ！」

（ザザー！）

驚いた事に、潮見が大胆なダイビングキャッチをした。

「アウト！」

「ヨッシャ！って…やはり。」

潮見が捕った瞬間、三塁の氷関がタッチアップし、ホームベース（本塁）へ走り出した。

「高萩！ミット構えろ！」

いきなり、藤浦が叫んだ。

「えっ?!」

（シュボンツ！）

「…なっ!？」

キャッチャーミットを^は填めていた左手が一瞬にしてしびれた。

「痛う…。」

「高萩、早くタッチアウトしろ！」

「氷関、早く戻れ！」

「…えっ? あっ！」

「…し、しまった！」

俺は我に返り、呆然としていて反応が遅れた氷関を追い掛けてミットを氷関の背中に当てた。

「アウト！スリーアウト、チェンジ！」

俺は、氷関を刺せた事より誰があんな速くて重い球を投げたかの方

を気にした。

「藤浦、お前が投げたのか？」

ベンチに戻る途中、俺は藤浦に聞いた。すると、藤浦はアゴでしゃくって一人の人物を指した。

指された方向を見ると……あの剛球を投げたのは何と、センターの岩原だったのだ！

f r i e n d s 4 8 : 新 た な 強 敵 。 (前 書 き)

2 回 の 裏、 芹 沢 学 園 高 校 の 攻 撃 。

いきなり、先頭バッターの藤浦が空振り三振した。これに調子に乗った犀潟兄に対する高萩は、彼の挑発の言葉に惑うが潮見に奮起され、彼の投げた渾身の高速スライダーを無心で打つが…。

friends 48：新たな強敵。

2回裏。俺達、芹沢学園高校の攻撃。

俺は、岩原を問い詰めていた。

「先輩、あの送球は先輩がやったモンなんですよね？」

「…知らねえよ。」

岩原は、さっきからシラを切っていた。

「あれは、レーザービーム…いや、それ以上ツスよ！見直しました！」

「うるさい！…俺は送球してない。ライトの嬢ちゃんが投げたんだ。」

「あ、あたしは、あんなの投げられないよお！」

「黙れ。てか、次のバッターはテメエじゃねえのか？」

岩原に言われて、俺はようやく気付いてヘルメットとバットを持って待機した。

「2回の裏。芹沢学園高校の攻撃は4番…ピッチャー、ふじつら藤浦 せいいち成一君。」

「プレイツ！」

バッターは、強打者の藤浦。しかし、ピッチャーは巧投手の犀瀧兄。まともに、球がバットに当たるかどうか…。

(ビュッ！)

(ボンッ！)

「ットライーク！」

外角のカーブで、1ストライク。

(ビュッ！)

(ボンッ！)

「ボール！」

彼の選球眼は、舐めたもんじゃない。ベースから少し離れたスライダーを、見逃せる余裕があった。

「さすが、藤浦君。俺の球を良く見てくれて、ありがとよっ！」

(ビュッ！)

犀潟兄が投げた球は、進行方向に螺旋回転していた。しかし、フォーシームジャイロの速さを大きく下回っていた。

(ボンッ！)

「ットライークッー！ツーワン！」

(な、何だ？あのフォーシームジャイロの遅いバージョンは一体…。)

「藤浦、良く見て打て！」

俺は、藤浦に言った。

(ゴッッー！)

また、あの変化球だった。

「くっ！」

（ブンッ！）

（ボンッ！）

「ットライーク！バッターアウト！」

（そ、そんな馬鹿な！藤浦が三振するなんて。）

俺は、驚愕していた。すると、犀瀉兄が叫んだ。

「ダサっ！あんなスローボールも打てないとは、茉山の目も疑えるよ。ハハハっ！」

「くっ！」

藤浦は悔しく、バットを持って先端を地面に一回叩きつけた。

「5番：キャッチャー、高萩たかはぎ 荊太郎君けいたろう。」

まさか藤浦が三振するとは、思わなかった。

俺は、取りあえずストレートかスライダーを来るのを待った。

「君だっけ？あの武里から、奇跡のヒットを打ったのは。」

犀瀉兄は、俺を見下すように言った。

「お前、あんな奴からヒットを放ったって、凄くも何とも無いぜ！
フッ…フハハハハ！」

高らかと笑い声を上げた犀瀉兄は、大きく振り被った。

「今からな、本物の高速スライダーを投げてやるよ！俺は、お前のような奇跡野郎が大っ嫌いなんだよっ！」
(ビュッ！)

風を切り、唸^{うな}りを上げた剛球がベースの手前で急激に曲がった。

(ボンッ！！)

「すっ…ストライークッ！」

(う…嘘だろ…。)

「ヒヤハハッ！打てねえだろ？所詮、お前はマグレ野郎だったんだよ！」

「っ…！」

俺は、愕然としてしまった。

「マグレ野郎は、ホンモノの前に、脆^{もろ}くも崩れ去るだけなんだよっ！」

(ビュッ！)

(ボンッ！)

「ットライークッー！」

俺の頭の中は、既に真っ白になっていた。

「フッ！愚かな臆病者め！手を出さないなら、終わりにしてやるよっ！」

(ビュッ！)

こっちへ向かってくる剛球。俺は、もう打つ気が無かった。

だが次の瞬間、誰かが放った一言で、俺の真価が発揮された。

「高萩君っ！マグレじゃない事を証明してよっ！」

（ま…麻衣…か？）

ベンチから潮見が大声で放った言葉に、俺は我に返った。次の瞬間、俺は何も考えずにバットを思いっきり振った。

「ウォー！！！」

（カキーン！）

（ヒュンツ！）

「な、何い?!」

渾身の打球は左中間に落ちた。

「行けー！高萩っ！」

俺は、一塁を蹴って二塁に行こうとした。しかし、思わぬ奴が俺の進塁を阻んだ。

（シュツ…）

（パシッ！）

（ビュッ！）

「…えっ？」

（パシッ！）

「アウト！」

俺は、呆気に取られた。

「な、何で…。あの打球なら二塁まで行けた筈なのに…。」

「ナイス、レフトツ！」

俺はハツとして、レフト方向を見ると、暗い雰囲気をかもしだしている男が立っていた。

身長170ぐらいで、緑と黒色の混ざった色で剣山のような頭髪の男が、俺をツリ目で睨んでいた。

その男の身体からは、強い殺気を感じられた…。

俺は、電光得点板に映されている菜山のチームの打順を見た。

(8番。レフト、虔沼 亮也・けんぬま りょうや)

(け…虔沼っていう奴が俺をアウトにしたのか?)

俺は、ベンチへゆっくりと帰った。ベンチに戻ってきた俺は、驚いた。

何故かベンチには、千駄木の姿があったのだ。

「せ、千駄木?!何故、ここにいるんだ?」

俺が声を掛けると、千駄木が気付いて振り向いた。

「あ、高萩クン。惜しかったね!」

俺は、ポカンと口を開いたままだった。

「やっば、凄いよ…アイツ。」

「えっ?」

千駄木の意味深な言葉に俺は我に返り、彼女の目線の先を見た。

「うん?...え、ええっ!」

彼女の目線の先は、何とあの虔沼だったのだ！

「千駄木、つかぬ事を聞くが。」

「何？」

「あのレフトの…虔沼っていう奴を知ってるの？」

すると、千駄木はサラリと言った。知ってるなら、それ以上何も言わないが、しかし彼女は驚くべき発言をした。

「うん。だって、私はアイツの“元カノ”だもの。」

「そうなんだあ…って、ええー!？」

俺を含む、ベンチにいた皆が驚いた。

「嘘じゃないよ。私、アイツと一緒に中学だったし。」

「あ…ああ、そ、そうなんだ。」

俺は、動揺を隠せなかった。

「あのレフトの事で、知ってる事があつたら教えて貰えないかな？」

藤浦が、千駄木に言った。

「えっと…中学時代は2番で外野を守ってて、俊足で50m走で6秒4を出して良く白く四角い板の間を走ってたわ。」

あと…私が言うのもなんだけど、アイツ結構打ってたよ。見てる私の方も、爽快な気分させられたしね。」

「千駄木の言った事は要するに…盗塁も良くやるし、三振も少ないって事だな。」

「レフトの虔沼っていう人、かなり強敵ですね…。あ、落合。」
零園の言葉に皆が振り向くと、6番打者の落合がうつ向いて戻ってきた。

「…その様子だと、三振したんだな。」
「す…済いません。」

落合は、弱々しい声で謝った。

「良いよ、しょうがねえよ。さっ、攻守交代だ。」
「オー…!」「」

…藤浦の言葉に皆、奮起してフィールドに出ていったが、俺だけ新たな強敵、虔沼の事を考えながらキャッチャーボックスに入った。

f r i e n d s 4 9 : 先制…空虚な試合。(前書き)

3回の表。龍泉高校1アウトの場面で到頭、あの度沼がバッターボックスに現れた。

friends 49：先制…空虚な試合。

「3回表。龍泉高校の攻撃は7番。セカンド、日向ひゅうが 太一君たいち。」
「プレイツ！」

未だに攻撃を仕掛けてこない龍泉勢。

俺は、次の打席の虔沼の事を考えていた。

（ビュッ！）

（カキーン！）

「オーライ、オーライ…えいつ！」

「アウト！」

「ナイス、ライトツ！」

日向の打球は、ライトの潮見に捕られた。

そして、到頭…アイツの打席が回ってきた。

「8番…レフト、虔沼けんぬま 亮也君りょうや。」

異様な雰囲気をかもし出しながら到頭、虔沼がバッターボックスに入ってきた。

「…前か。」

「えっ？」

虔沼が何か言ったが、俺は聞き取れなかった。

「萌をたぶらかしてるのは、お前か。」

「えっ?! な、何言ってるんだ!」

俺は、虔沼の言葉にかなり驚いた。

「フツ… まあいい。過去の男が、何を言っても別に意味がないからな。」

「べ、別に俺は千駄木と付き合ってるねえよ!」

「黙れ。」

「えっ?」

「黙れと言った。」

「うっ。。。」

虔沼は、既にバッティングの準備をしてピッチャーの藤浦を見据えていた。

(くっ…こんな奴が相手なんて。)

俺は、内角にえぐり込むフォーシームジャイロを要求した。

(ビュッ!)

球は、螺旋回転をしながらスピードを上げてミットに入った。

「ットライーク!」

(やはり天才野球青年でも、これは打てねえだろ。)

俺はニンマリして、次に外角に逸れるスライダーを要求した。

(ビュッ!)

(バシッ!)

「ボールツ！」

しかし、度沼には見きられてボールになった。それを見ていた度沼が、ボソツと言った。

「…す。」

「えっ？」

「カス。逃げずに勝負しろ、チビ。」
「くっ！」

俺は挑発に乗ってしまい、フライにされやすい外角低めのフォーシームジャイロを要求した。

（ビュツ！）

「…空虚だ。」

「…え？」

（カキーンっ！）

一瞬だった。

「あっ…あっ…センターっ！」

「チビ、捕れねえよ。」

「えっ？」

（ガシャリ…）

打球はセンターのフェンスに当たり見失った。ホームランにはならなかったが、度沼は二塁まで進んだ。

「ボールデッド！エンタイトルツーベース！」

「…嘘だろ？」

俺は、呆然としながらキャッチャーマスクを被り直した。
既に、虔沼は二塁から少し三塁側に出ていた。

(まさか…三盗を試みる気じゃ?)

俺は、注意深く彼の様子を見る事になった。

「9番：セカンド、野尻のじり 智之君ともゆき。」

藤浦が振り被った時に、やはり虔沼が走り出した。

(ビュッ!)

(バシッ!)

「させるかっ!」

(ビュッ!)

俺は藤浦の投球を受け取って、直ぐに三塁に投げた。
しかし…思わぬ事が起きてしまった。

「ああっ!」

「…えっ?」

サードの屋代が捕球し損ねて、グラブで球を弾いてしまったのだ。

「そ、そんな…。」

「…よいしょっと。」

(ペタッ)

「ホームイン!」

「っ?!!」

俺が啞然と立っている内に、虔沼がホームベースに到達して、手でホームベースに触ってかざしていた。

「やはりこんな試合をやる事自体、空虚だ。」

「っ?!」

「帰るぞ、リル。」

(キュー。)

虔沼は、その言葉を佩き捨てると、バットを持ってゆっくりとベンチに帰って行った。虔沼が語り掛けたのは、ポケットから出てきたプリーリードッグのようだった。

しかし、俺はそんな事を気にする余裕が無かった。

「…う、嘘だ。嘘だ…こんなの。」

電光掲示板の龍泉高校の三回の所に、1の文字がゆっくりと光って映った。

f r i e n d s 5 0 : チーム解析。(前書き)

この話は、回想と解析が主なメインで話の続きは次回です。

friends 50：チーム解析

(これまでの回想)

俺達は日本有数のIT企業の一つ、プログレスグループの社長令息である茉山 卓にハメられ、俺達の学校の経営存続を賭けた野球の試合をする事となった。

全国から野球の各ポジションの兵(つわもの：強者)共達と自身も野球実力者である茉山を合わせたドリームチームに対し、俺達の芹沢学園高校の急造チームとの力の差は歴然としていた。

(茉山のドリームチーム：龍泉高校のメンバー、並びに打順、ポジション)

1番：ピッチャー(投手)

犀潟 真空

・右投左打

・犀潟 空平の実兄。

・調子が良いと、相手打者が手がつけられなくなる程の投球をする。

・茉山がピッチャーの時は、遊撃手、及び外野手を兼任。

・新潟県私立 頸城高等学校 東京都私立 龍泉高等学校。

・高3

2番：サード(三塁手)

上条 泰隆

・右投両打

・群津高校時は、俊足巧打の1番打者だった。

・内野安打が多い。

・福島県立 郡津高等学校 東京都私立 龍泉高等学校。

・高3

3番：ファースト（一塁手）

霜尻 賢基

・両投左打

・両投げであるため、特殊な構造をしているオリジナルグローブとミットを使い、左右両方の腕で投げられるようにしている。

・普段は左投でファーストとライトを兼任して守っているが、右投でキャッチャーやサードも守れる。だが、左投時に比べて失策数は多い。

・福島県立 郡津高等学校 東京都私立 龍泉高等学校。

・高3

4番：レフト（左翼手）

氷関 拓也

・右投右打

・高萩 荊太郎の幼馴染みで、外野兼キャッチャー（捕手）。

・全国屈指のスラッガーでもあるが、巧打で三振が少ない。

・守備も良く、俊足、強肩、堅守の三拍子揃った選手。

・東京都郊外の小学校 東京都楓川市立 楓川小学校 東京都楓川

市立 楓川中学校 北海道十勝郡山下町立 山下中学校 東京都私

立 龍泉高等学校。・高2

5番：ショート（遊撃手）

東 浩樹

・右投右打

・強肩、フィールディングが良い。

・バッティングは、フルスイングが心情。三振が多い。バント

も一応こなすが、あまり好きでは無い。

・千葉県立 館南高等学校 東京都私立 龍泉高等学校

・高2

6番：キャッチャー（捕手）

石橋 真司

・右投右打

・守備が良く、捕球能力も高い。強肩。しかし、リードに難点有り。

・打撃は、あまり得意ではない。パワーよりミート重視。

・徳島県立 阿波海郷高等学校 東京都私立 龍泉高等学校。

・高3

7番：セカンド（二塁手）

日向 太一

・右投右打

・バントが巧い。

・守備範囲は広いが、送球が不安定。

・秋田県私立 十和田学園高等学校 東京都私立 龍泉高等学校。

・高1

8番：センター（中堅手）

虔沼 亮也

・両投両打。

・霜尻と同じく両利きで両投げであり、さらにスイッチヒッターという非常に珍しい選手。

・守備位置によって投げる腕を決めており、投手・一塁手・右翼手時は左投げ、左翼手・中堅手・二塁手時には、右投げである。 3

つのクラブとファーストミットを持っている。

・千駄木 萌の元彼氏。

・藤浦 成一と昔、チームメイトだった（栗桜高校時）。だが、

両者共面識は無い。

・勝沼商業高校1年時、夏の甲子園に出場。1年生唯一のスタメン

で、エース。更に4番を打っていた相当の実力者。

・その実績は、彼の素晴らしい野球センスと、小学生時のリトルリーグと中学生時のシニアリーグから培ってきた俊足、巧打、堅守、強肩があるからこそ。

・秀才だが、無愛想、時に冷酷。普段から口数が少ない。

・父親の影響で、転勤族。

・東京都雪平市立 雪平第二中学校 山梨県私立 勝沼商業高等学校
校 神奈川県立 栗桜高等学校 東京都私立 龍泉高等学校
・高2

9番：ライト（右翼手）

野尻 智之のじり ともゆき

・左投右打

・元々は、右投右打の投手だったが故障し、左投げに変えて野手転向した。そのため、守備位置も外野手と一塁手に変わったが諦めきれず、サウスポー投手になる為に連日練習をしていた。

・やがて、ワンポイントリリーフを兼任出来る程の成長を遂げた。

・沖縄県立 名越高等学校 東京都私立 龍泉高等学校。

（控え）

茉山 卓まやま たく

・右投右打

・今回の試合の主催者。

・岩原とは、過去に因縁がある。

・藤浦とは、リトル時代に彼からバックスクリーンへのホームランを放っている。

・普段は学生だが、時には経営者の息子として会社でも重役のポジションを任されているエリート。

・元々投手だったが、中学の時のある試合から断念。以後、持ち前の才能と野球センスで野手として頭角を現した。

- ・東京都私立 龍泉高等学校
- ・高3

(東京都私立 芹沢学園高等学校チームの打順、及びポジション。)

1番：セカンド

美作 雅臣 みまさか まさおみ

- ・右投左打
- ・サッカー部所属なので、足が速い。
- ・東京都私立 芹沢学園中学校 東京都私立 芹沢学園高等学校。
- ・高1

2番：レフト

犀潟 空平 さいかた くうへい

- ・右投右打
- ・犀潟 真空の実弟である。
- ・俊足巧打。内野安打も多く、自慢の俊足を活かした盗塁やセーフティーバントの成功率がチーム内で最も高い。
- ・守備範囲、肩は普通だが送球は的確。
- ・打率は、チーム内でトップクラス(藤浦、岩原に続く3位)。
- ・バントも巧く、ライン上に転がす事が出来る。
- ・新潟県越後市立 越後小学校 東京都楓川市立 楓川中学校 東京都私立 芹沢学園高等学校
- ・高2

3番：サード

屋代 光太 やししろ こうた

- ・右投右打
- ・1年で野球経験者は、チーム内で彼一人。
- ・堅守で、サード以外にキャッチャーとファーストも守れる。 グ

ラブ裁きが巧い。

- ・大阪府豊中市立 船水中学校 東京都私立 芹沢学園高等学校
- ・高1

4番：ピッチャー

ふじつら 藤浦 せいいち 成一

スウィッチヒッター

・右投両打

- ・野球能力は、小学生の頃からやってきたお陰でチーム内一。
- ・キャッチャー以外なら、どこのポジションでも守れる程の堅守、俊足、強肩を持つ。

・使用可能な球種は、フォーシームストレート（ジャイロ回転）、カットボール、カーブ、フォーク。

・冷静沈着な性格上、どんな状況下でも仲間に対して的確な指示を出せる。

- ・神奈川県荏原区立 瀬弥川中学校 神奈川県立 栗桜高等学校
- 東京都私立 芹沢学園高等学校

・高2

5番：キャッチャー

たかはぎ 高萩 けいたろう 荊太郎

・右投右打

・今作の主人公

- ・藤浦と同じく、小学生の時から野球をやっており、リトルリーグ時に全国ベスト8。その時のチームメイトの中に氷関 拓也がいた。
- ・高萩がピッチャーをして、彼とバッテリーを組んだ事もある。
- ・元々、ポジションはキャッチャーでは無い。いつもはセカンド、あるいは中継ぎから抑えピッチャー（虔沼と同じナックルボーラー）。

- ・打撃は、パワーはあまり無いが、ミートが巧い。
- ・守備面は、守備範囲が広く堅守。俊足。肩は普通。

- ・東京都楓川市立 楓川小学校 東京都楓川市立 楓川中学校 東京都都立 芹沢学園高等学校
- ・高2

6番：ファースト
おちあひ ただし
 落合 正

- ・左投左打
- ・身長185cmで長身。
- ・中学校時は、バスケット部所属。
- ・パワーも中々あり、練習でバッティングセンターを訪れた時には、10球中3本がホームランになった。
- ・守備範囲は狭いが、一定の捕球力はある。
- ・滋賀県密帰市立 密帰北中学校 東京都都立 芹沢学園高等学校
- ・高1

7番：ショート
れいその ひょうた
 零園 彪彦

- ・右投左打
- ・チームのムードメーカー的存在。
- ・中学校時には、男子バレーボール部の主将。
- ・脚力があり、守備範囲には問題が無い。しかし、捕球に現実性が無く、エラーが多い。
- ・彼女（新川 亜華梨）に応援されるが：逆に有頂天になり、とんでもないミスを冒してしまう。
- ・中学校時、高萩の後輩で過去のある出来事で彼を尊敬し続けている。

- ・東京都楓川市立 楓川中学校 東京都都立 芹沢学園高等学校
- ・高1

8番：ライト

潮見 麻衣しおみ まい

・左投左打

・チーム内で、唯一の女子選手。

・捕球能力は平均的だが、ミート、パワー、走力、肩力、守備範囲は、チーム内最下位。

・気が弱く、泣き虫だがここぞという所で思わぬ力を発揮する事がある。

・チームに入った理由は、好きな高萩と一緒に野球がしたかったから。

・茨城県つくば市立 鹿本かもと中学校 東京都酒樽市立 酒樽南中学校

東京都私立 芹沢学園高等学校

・高2

9番：センター

岩原 克彦いわはら かつひこ

・右投両打スウィッチヒッター

・最後までチームに入りたくなかった人物。

・中学校時に、富山シニアに所属していた事はチーム内で誰も知らない。

・凄まじい強肩で、氷関のタッチアップを封殺した。

・野球センスは、藤浦以上だと推測される。

・どこのポジションも、堅実に守れる器用さを併せ持つ。

・茉山とは、過去のとある出来事でお互いに因縁がある。

・富山県滑川市立 旋羽せんぱ中学校 東京都私立 芹沢学園高等学校

・高3

果たして、高萩達は茉山達のチームに見事勝利し、無事に自分達の学校を護る事が出来るのか？

f r i e n d s 5 1 : 振出(ふりだし)。(前書き)

龍泉勢に、先制点をあげてしまった芹沢勢。

その裏、龍泉勢がピッチャー交代の申し立てをしたのだ。

犀潟兄に代わり、ピッチャーを務めるのは意外な選手^{やつ}だった…。

f r i e n d s 5 1 : 振出 (ふりだし)。

(スコアボード)

龍泉：1 - 0：芹沢

到頭、俺達は茉山率いる龍泉に先制点を許してしまった。

何とか、続く9番を三振に仕留め、1番バッターの犀潟兄もセカンドゴロで抑えてチェンジになった。

犀潟：

「…あーあ、先制点あげちまった。」

犀潟が電光得点板を見て、溜め息混じり言った。

潮見：

「ま…まだ3回だし…や、野球つて9回の裏まであるよ…。」

高萩：

「まあ…潮見の言う通り、まだ3回だ。逆転は充分に有り得るぜ。」

藤浦：

「そうだ、次のバッターは…。」

藤浦が電光得点板を見た途端、啞然とした。

藤浦：

「ピッチャー…交代だと？」

高萩：

「えっ？」

ウグイス嬢：

「ここで、龍泉高校の守備変更をお知らせ致します。ピッチャーの犀潟君がライト、ライトの野尻君がピッチャーに入ります。」

野尻：

「……………」

龍泉勢の動きが全く読めない俺達は皆、呆然と守備交代を見ていた。

アナウンス：

「3回裏、芹沢学園高校の攻撃は7番ショート、零園れいその 彪ひょうた君。」

主審：

「プレイっ！」

あの1年のライトが、一体どんな球を放るのかを藤浦を含め、チーム全員が見つめていた。

野尻：

「…っ！」

（ビュッ！）

彼の投げた球は、ストレートの速さで真っ直ぐの軌道からベースの近くでいきなり急激に落ちた。

（スパンっ！）

主審：

「ットライーク！」

フォークボール…しかも、落差も大きい。敵が、そんなのを隠し持っていたなんて思いもしなかった。

藤浦：

「こりゃ、攻略が難しそうだな。」

岩原：

「…猿の一覚えか。」

高萩：

「何か言いました?」

岩原：

「いや、別に…」

そう言うと岩原は、一旦ベンチを出ていった。

高萩：

(?…何だ?)

(スパンツ!)

主審：

「ットライーク!アウツ!」

バットを提げながら、零園が帰ってきた。

零園：

「駄目だったツス。あの落ちる球に、全く当たらなかったツスよ。」

潮見：

「うー…エイッ!」

(ブンツ!)

(スパンツ!)

主審：

「ットライーク!アウツ!」

潮見も、あのフォークに手も足も出ず。

岩原：

「そろそろ…あのガキの調子鼻をへし折ってやるかな。」

いきなりベンチに戻ってきた岩原は、バットを持って打席に入った。

ウグイス嬢：

「9番。センター、岩原 いわはら 克彦君 かつひこ。」

主審：

「プレイツ！」

主審が言い終わると、野尻はwindアップで球を放った。

(ビュッ！)

やはり、決め球のフォークだった。だが、岩原はバットを短く持って待ち構え、そして…。

(カキーンッ！)

心地よい快音が、球場内に聴こえた。

藤浦：

「う…嘘だろ？」

打球はグングンと伸びていき、ライトとセンター間のフェンスを…越えた。

芹沢側ベンチ：

「「うおー！！！」」

何と、岩原がああ落差の大きいフォークをいとも簡単にホームランにしたのだ。

野尻：

「……………」

岩原：

「…フンッ！」

(龍泉高校側ベンチ)

茉山：

(ほう…やはりあの長身の根暗男は要注意だな。)

藤浦：

「凄いですね、先輩。」

岩原：

「別に。」

これで、1-1の同点に追いついた。

美作：

「だぁー！」

(ブンッ！)

(スパンッ！)

主審：

「ットライーク！バッターアウト！スリーアウトチェンジ！」

しかし、この回は岩原のソロホームランで終わった。

藤浦：

「皆、同点に追いついた。まだ4回だが、油断するな。深く守れ。

外野は…まず犀潟、お前は三遊間(さんゆうかん)：サードとショー
ト)を抜かれないようにしっかり守れ。」

犀潟：

「了解。」

藤浦：

「岩原先輩は、二遊間（にゆうかん：セカンドとショートの間）と若干のライト方向は潮見だけじゃ危ないんで岩原先輩、捕れそうだったらお願いします。」

岩原：

「面倒だな、この嬢ちゃんは。」

潮見：

「むう…。」

高萩：

「で…潮見は、ファールライン際において出来るだけ捕れ。捕るのが無理そうな打球は美作か先輩に頼め。」

潮見：

「う…うんっ、出来るだけ捕れるように…あたし頑張るう。」

藤浦：

「内野の美作以外は、間を抜かれないようにしっかり守れ。」

落合・美作・零園・屋代：

「…はいっ…！」

高萩：

「しっかり守って、逆転しようぜ！」

岩原以外全員：

「…オーツ…！」

岩原：

「…フツ。」

こうして、試合は振出に戻った。

f r i e n d s 5 2 : 心 理 戦 。 (前 書 き)

試合は中盤に差し掛かり、前の回のホームランで高萩達のモチベーションは上がっていた…。

friends 52：心理戦。

ウグイス嬢：

「4回表。龍泉高校の攻撃は、2番。サード、上条君。」

上条の心の声：

「さて、そろそろ本気出させて頂くよ…：茉山？」

主審：

「プレーツッ！」

(ビュッ！)

(スパンツッ！)

主審：

「ストライークッ！」

俺達はこの回、クリーンアップが回ってくる事が解っていたので、取りあえずこの上条を抑えておきたかった。

藤浦の心の声：

「やるしかねえよな！」

高萩の心の声：

「こい、藤浦っ！」

(ビュッ！)

上条の心の声：

「ふざけるなよ、俺達を簡単に抑えられる訳じゃねえ事ぐらい、理^わ解^かれよ！」

(カキーンッ！)

高萩：

「っ！？レフトーッ！」

犀潟：

「オーライ…よしっ！」

(パシッ！)

三壘審：

「アウツ！」

上条：

「な、何い?!」

高萩：

「ヨッシャー！」

茉山の心の声：

「確かに、上条のバットにジャストミートした。が、アイツら自身の心の方が強かったようだな。」

上条：

「霜尻。あのストレート、ベース付近で急に伸びてくるぞ。気をつける！」

霜尻：

「…ああ。一打席で把握したから、今度こそスタンドに叩き込んでやるよ。」

ウグイス嬢：

「3番。ファースト、霜尻君。」

高萩の心の声：

「誰が相手だろうと、打たせない。いくぞ、藤浦！」

俺は、真ん中から外角に逃げるカーブを要求した。

(ビュッ!)
(カキーン!)

高萩：
「っ?!」

一塁審：
「ファール!ファール!」

打球は、ライトポールをほんの少し逸れてファールになった。が、初球から飛ばされるとは予想外だった。

霜尻：
「チツ!逸れたか。」

高萩の心の声：
「カーブは危険…そしたら、わざと打たせてフライにするしかないな。」

(直球のサイン)
(ビュッ!)

霜尻：
「俺は、二度も…へましねえんだよっ!」

(ブンッ…)

上条：
「捉えた!」

(カキーン!)

藤浦：

「せ、センター!!!」

打球は、大きく放物線を描いて飛んでいく…。

岩原：

「くっ…。」

打球は、センターフェンスを越え、電光得点板の麓ふもとに当たった。

龍泉群：

「ヨッシャー!!!」

(霜尻が内野・ダイヤモンドを回って帰還し、龍泉群の電光得点板に1が映った)

氷石：

「ナイスバッチです、先輩。」

霜尻：

「フツ…次はお前が放て。」

氷石：

「…了解です。」

ウグイス嬢：

「4番。センター、氷石君。」

藤浦は、霜尻にあっさりストレートを打たれて唾然としていた。俺は、藤浦に掛ける言葉を必死に探したが、こういう時に限って見つけられなかった…。

氷石：

「おや？ あのピッチャー…バテてる様子だね、荊太郎君？」

バッテリーボックスに入ってきた氷石が、困惑している俺に向かって言った。普通なら、ここで言い返せるのだが、今の俺には氷石に言い返せる言葉なんか無かった。

氷石の心の声：

「この様子じゃ、バッテリーは相当参っているな。今が攻め時だな…。」

主審：

「プレー…！」

氷石の心の声：

「遠慮なく行かせて貰うよっ！」

(ビュッ！)

(ブンッ！)

(スパンッ！)

主審：

「ストライーク…！」

氷石の心の声：

「っ？！ う、嘘だろ…？」

(高萩がニヤリと笑う。)

氷石：

「っ！？ は、ハツタリだと？」

高萩：

「…悪いな、幼なじみ。」

氷石：

「っ!？」

高萩：

「さっきのお前の一言で、俺らの闘争心に火が点いちまった。今から、お前ら全員を全力で潰してやっから…覚悟しとけ!！」

f r i e n d s 5 3 : ガチンコ勝負!! (前書き)

野尻の変化球、フォークに岩原以外の芹沢勢は悪戦苦闘していた…。

friends53:ガチンコ勝負!!

氷石の心の声:

「そ、そんな…。まさか、あれがハツタリだったなんて…。」

(ビュッ!)

(スパンッ!)

主審:

「ストライークツ―!!」

高萩:

「どうした? 打たないのか?」

氷石:

「…ふ、ふざけるなっ!! ぼ、僕はこのチームの4番打者なんだ…。さ、三振してたまるかっ!!」

高萩:

「来いよ、チームとか4番とか関係なく…俺達の球を全力で振ってみるよっ!!」

(ビュッ!)

氷石:

「ウォーッ!!!!」

(ブンッ!)

藤浦が投げたボールは、氷石のフルスイングしたバットの下を通り抜けた。

(スパンツ！)

龍泉勢：

「ああっ!?!」

(シユ…。)

主審：

「す…ストライク!!!バッター、アウト!!!」

氷石：

「っ?!」

内野勢：

「ナイスピッチ!!!」

俺が、氷石へ向けて藤浦に投げさせたボールは、三球全て直球ストレートだった。

(龍泉勢ベンチ)

茉山：

「どうした? 珍しいじゃないか、君が三球三振とは。全部、ストレートじゃなかったか?」

氷石：

「ええ。でも、このチームで茉山さん以外の人が一打席で打てませんよ、あの球は。」

茉山：

「ふう…厄介だな、あのバッテリーは。」

(スパンツ!)

主審：

「ストライク！！バッター、アウト！！ スリーアウト、チェンジ！！」

（芹沢勢ベンチ）

千駄木：

「スゴいじゃん！！ あの氷石君を三振に仕留めるなんて！！」

高萩：

「ま、まあな…。」

千駄木に言われ、俺は性に合わず照れてしまった。

（パコッ！）

高萩：

「痛っ！ …な、何すんだよ、藤浦！？」

藤浦：

「デレデレしてる暇があったら、あの落差の大きいフォークの攻略法を考えとけ！！」

高萩：

「わ、解ってるさ！！」

潮見の心の声：

「…高萩君。」

俺達は、何とかしてあのフォークを打ちたかった。だが、そう簡単に打てる球では無かった。

ウグイス嬢：

「4回裏。芹沢学園高校の攻撃は、2番。レフト、犀潟君。」

(ブンッ!)

(スパンッ!)

主審：

「ストライークツー!!」

高萩の心の声：

「やはり、犀潟でも無理か…。」

(スパンッ!)

主審：

「ボール!」

(スパンッ!)

主審：

「ボール!」

高萩：

「…ん?」

(スパンッ!)

主審：

「ボール!ツー、スリー!!」

石橋：

「た、タイムお願いします!」

主審：

「タイム!!」

先程から、相手ピッチャーのピッチングが定まらなくなってきた。フォークが、ストライクゾーンより下など地面スレスレだったり、ワンバウンドだったり…。

ようやく相手バッテリーの話も終わり、キャッチャーが戻ってきた。

主審：

「プレーー!!」

(ビュッ!)

高萩：

「振るな、犀潟!」

犀潟：

「…えっ?」

(パシッ!)

主審：

「ボール…フォアボール!」

石橋：

「…チッ!」

高萩の心の声：

「…やはりな。あのピッチャー、フォークをあまり使い慣れていない!」

ウグイス嬢：

「3番。サード、屋代君。」

俺は、彼がバッターボックスに入る前に呼び寄せた。

屋代：

「何ですか、先輩？」

高萩：

「良いか？ ゴニョゴニョゴニョ。」

屋代：

「…解りました。」

高萩：

「よし、行ってこい！！」

俺は、屋代の背中をポンツと押した。

主審：

「プレー！！」

(芹沢勢ベンチ)

高萩：

「ちよつと一塁コーチャーに行ってくるわ。」

(一塁)

犀瀧：

「…た、高萩！？」

高萩：

「シー！ …良いか？俺の合図で、走れ(盗塁しろ)！」

犀瀧：

「大丈夫か？ 刺されないか(アウトにならないか)？」

高萩：

「二盗は、大丈夫。あのピッチャーなら、パスボール(補逸)も有り得るからな。」

犀瀧：

「…解った。 合図、頼んだぞ。」

高萩：
「…行くぞ。」

俺は、相手ピッチャーのモーションを見ながら走るタイミングを
図った。

高萩：

「よし！ リーリーリーリーリー…。」

(ビュッ！)

高萩：

「バック！！」

(ザザー！！)

(パシッ！)

一塁審：

「セーフ！」

さすがに、相手バッテリーは警戒しているようだ。
再び、モーションに入る。

高萩：

「リーリーリーリー…。」

その時、ほんの一瞬だけ相手ピッチャーに大きな隙が出来た。

高萩の心の声：

「わ…：ワインドアップ！」

高萩：

「ゴォー！！！」

（ダッ！）

俺の合図と共に、犀潟が二塁へ走り出した。

石橋の心の声：

「盗塁！？ させるかよ！」

（ビュッ！）

（パシッ！）

（ビュッ！）

相手キャッチャーのクイック投法も完璧だったが、犀潟の方が一枚上手だった。

（ザザー！！！）

（パシッ！）

二塁審：

「セーフ！セーフ！」

高萩：

「ヨッシャー！！！」

（二塁）

犀潟：

「へへッ、儲けたぜ。」

野尻：

「……………」

野尻が、無言で足でマウンドの土を蹴り散らした。

野尻：

「…盗塁された…盗塁された…俺から盗塁された…ブツブツブツ…」

「

石橋：

「た、タイム!!」

野尻：

「…っおおおおー!!」

高萩：

「っ?!」

いきなり野尻が雄叫びを上げ、場内は騒然となった。

(龍泉勢ベンチ)

茉山：

「チツ、…つたく。」

石橋：

「落ち着け、野尻!!」

野尻：

「うるせっ!!邪魔するなあ!!戻れえー、へボキャツチャー!!」

石橋：

「っ!?! の、野尻…。」

石橋は、キャッチャーボックスに戻った。

主審：

「プレー!!」

野尻の心の声：

「俺は…俺は…誰よりも強いんだあ!!!!」

(ビュッ!)

(スパンッ!!)

主審：

「ストライーク!!」

藤浦の心の声：

「さ、さっきより…速くなってないか？」

高萩の心の声：

「嘘だろ?! ここで立ち直られたら、俺達はまた三振でねじ伏せられちまう!!」

(スパンッ!!)

主審：

「ストライークツ―!!」

俺は、必死にアイデアを考えた。

高萩の心の声：

「…そうだ!!」

一か八か、俺は賭けに出た。

高萩：

「犀潟っ！！ 走れえ（三盗しろ）ー！！」

（二塁）

犀潟の心の声：

「えっ！？ 三盗だと！？」

（ビュッ！）

（ダッ！！）

野尻：

「サードッ！！」

石橋：

「っ？！ …… あっ！？」

（カツ！）

石橋のキャッチャーミットが、暴投気味のフォークを捕らえられず補逸した。

（ザザーー！！）

高萩：

「っ！？ やったー！！」

（三塁）

三塁審：

「セーフ！セーフ！」

犀潟：

「…三盗成功。」

(本墨)

石橋：

「っ?! そ、そんな…。」

(龍泉勢ベンチ)

茉山：

「…使えねえバッテリーだな。おい滝本、そろそろ準備するから、ブルペンの奴らに連絡だ。」

茉山の部下、滝本：

「ハッ!!！」

茉山の心の声：

「楽しいよ、こんなに俺を不愉快にさせるゲームなぞ、今までに無かった!! たっぷり楽しもうじゃないか…。」

(マウンド)

野尻の心の声：

「あっ、あれは滝本さん! ふ、ふざけるな!! こんな奴らの所為で、易々と交代させられてたまるかよ!!！」

(ビュッ!)

高萩：

「打て、屋代!!！」

屋代の心の中：

「…中学三年間、俺は補欠のそのまた補欠の身だった。だから、チームの為に必死にバットを振る事なんて考えた事が無かった。だけど…。」

石橋の心の中：

「っ?! お、落ちない!!」

野尻の投球は、ホームベース付近で落ちずに進んでいった。

屋代の心の中：

「今こそ俺は、皆の為に全力で…。」

石橋：

「っ?!」

屋代の心の中：

「打つ!!」

(カキーン!!)

高萩：

「あつ!!」

バッテリー(野尻・石橋)：

「な、何い?!」

茉山：

「…フツ。」

屋代の打球は、レフト方向に大きなアーチを描いた。

屋代：

「落ちろー!!」

藤浦：

「…っ!？」

芹沢勢：

「「入れえー!!!」」

(ガサツ…トンツ…トンツ…)

屋代の打球は、レフト後方のフェンスを越え、スタンドインした。

屋代：

「や…やったあー!!!」

芹沢勢：

「「入ったあー!!!」」

芹沢の電光得点板に、2の数字が光った。

俺は、ダイヤモンドを回り終えてきた二人に、ホームでハイタッチした。

高萩：

「よくやった、屋代!!!」

屋代：

「お、俺…役に立ちましたよね？」

高萩：

「ああ！ 凄かったぜ、あのホームランは。」

(ブルペン)

茉山の心の声：

「滝本、伝えに行け。」

滝本：

「ハッ!」

俺と屋代が話している途中で、アナウンスが場内に響いた。

ウグイス嬢：

「龍泉高校。ポジション、並びに選手交代のお知らせを致します。

」

高萩：

「えっ?!」

ウグイス嬢：

「ライト、犀鴻 真空君に代わりまして、まぎま 茉山 すくめ 卓君。キャッチャーの石橋君がファースト。ファーストの霜尻君が、キャッチャー。ピッチャーの野尻君が、レフトに入ります。」

芹沢勢：

「っ!?!」

高萩の心の声：

「あいつ…ピッチャーも出来たのかよ?!」

俺は、虔沼の才能に半ば羨ましい気持ちだった。

ウグイス嬢：

「4番。ピッチャー、藤浦君。」

主審：

「プレーー!!」

俺は、バッターサークルに入って、虔沼から打てる球を見極める事にした。

(ビュッ!!)

(スパンッ!!)

主審：

「ストライーク!!」

高萩の心の声：

「な、何なんだ…あの変化球は!？」

藤浦の心の声：

「スクリューボール…。厄介だな。」

(芹沢勢ベンチ)

潮見：

「先輩？ 今の変化球って何ですか？」

岩原：

「スクリューボール。左ピッチャーが投げられる、右ピッチャーが投げるシュートと対称的な変化球だ。右打者だとベース付近で手元で沈んで見えにくくなるから、空振りになりやすい。」

潮見：

「凄い…。」

(パコッ！)

潮見：

「いたーい!!」

岩原：

「感心してる場合じゃねえ。俺でさえ、攻略に困難な変化球だ。いかに打てるか、考えろ！」

潮見：

「グスン…ふあ、ふあい。」

(本塁)

藤浦の心の声：

「マジかよ…、スクリューは右打者にとって打ちにくいんだよな。」

(マウンド)

虔沼の心の声：

「俺の球は、これだけじゃねえぞ！」

(ビュッ！)

(カキーン！！)

一塁審：

「ファール！ファール！」

高萩：

「追い込まれた…。藤浦、打ってくれ！」

(マウンド)

虔沼の心の声：

「変化球って、決まった変化はしないんだよ。」

(ビュッ！)

藤浦：

「っ？！」

(ブンッ！)

(パシッ！)

主審：

「ストライク！！ バッターアウト！！」

高萩：

「う、嘘だろ！？」

度沼の心の声：

「一丁上がり。」

何と、藤浦が空振りしてしまったのだ。果たして、度沼が最後に投げた魔球とは…。

friends 54 : 決意。(前書き)

新たな魔球、ナックルカーブを持つ虔沼。 それに立ち向かう芹沢
ナイン。 だが、高萩すらまともに当てられない状況である。

friend 54 : 決意。

ウグイス嬢 :

「5番。 キャッチャー、高萩君。」

俺は、バッターサークルからアイツの球を見ていたが、藤浦を空振りさせた変化球が解らなかつた。

主審 :

「プレー！」

(ビュッ！)

(スパンッ！)

主審 :

「ストライーク！」

アウトコース高めめ、ストレート。

(ビュッ！)

高萩 :

「…くっ！」

(カンッ！)

主審 :

「ファール！」

インコース低めに食い込んでくる、スクリーンボール。

虔沼：

「…よくバットに当てたな。　誉めてやるよ。」

高萩：

「ハハツ…これでも精一杯なんだけどな。」

虔沼：

「なら、俺の抑え球は打てないな。」

高萩：

「抑え球…だと？」

虔沼：

「行くぜ？」

(ビュッ！)

高萩：

「っ?!」

虔沼が投げた球は、無回転でゆっくりとベース付近で曲がりながら落ちた。

(パシッ！)

主審：

「ボール！」

虔沼：

「チッ！…ボール一個分外れたか。」

高萩の心の声：

「こっ、これが…なっ、ナツクルなのか?!」

(芹沢勢ベンチ)

岩原：

「ふう…これまた厄介なボールを投げてくるな。」

藤浦：

「あれは…ナツクルですよね?!」

岩原：

「…ああ。だが、奴のナツクルは、ただのナツクルじゃない。

おそらく、奴が投げてるのは…ナツクルカーブ。」

藤浦：

「ナツクルカーブって…取得するのに苦労するが、ナツクルより不規則に落ちる変化、更に弧を描くように曲がる高精度魔球。」

潮見：

「ふ…藤浦君?」

藤浦：

「何だ、潮見?」

潮見：

「な、ナツクルって…高萩君も投げてる、無回転ボールの事だよな?」

藤浦：

「ああ。だが…高萩の投げてるナツクルと比べて、奴のナツクルは精密で、厄介な変化球だ。打ち崩すのは、大層難しいだろうな。バットに当たるかどうか…。」

潮見の心の声：

「た…高萩君、頑張ってる!」

(バッターボックス)

高萩の心の声：

「カウント、ツーワン。しかも、アイツが投げるのは、食い込む

スクリューと、魔球：新型ナックル。 藤浦が空振りするのも、無理ない。」

(ビュッ！)

高萩の心の声：

「だが、確実にあの魔球に当てる方法がある…それは。」

(芹沢勢ベンチ)

藤浦：

「バント?!」

(カーンッ！)

高萩：

「あぁっ?!」

(パシッ！)

主審：

「アウトッ！」

度沼：

「…打ち上げたか。」

茉山：

「バカだな。バントで、その場しのぎしたのかよ。やはり、俺の見込み違いだったか。」

ウグイス嬢：

「6番。ファースト、落合君。」

(芹沢勢ベンチ)

高萩：

「済まない…。バントで、何とか相手の守備陣をかき回そうとしたが…無理だった。」

犀潟：

「しょうがねえよ。当てただけでも、凄いな。」

藤浦：

「高萩。あの変化球…。」

高萩：

「ああ、新型ナックルの事か？」

岩原：

「あれは、ナックルカーブだ。たく…厄介なピッチャーを敵に回しちまったな。前のガキのフォークは、出来損ないだったからジャストミート出来たが…あれは、俺でも打てるか解らん。」

高萩：

「無理に打ちに行くと、俺達自身のバッティングフォームを崩してしまいますからね…。」

藤浦：

「逆に、打ちに行かなければ、フォアボールやデッドボール(死球)が無い限り…三振。」

零園：

「俺は…。」

屋代：

「…零園？」

零園：

「俺は、勝ちたいです！ あんな変化球でも、バットに当てさえすれば良いんですね?!」

潮見：

「あ…あたしも、頑張るから!」

高萩：
「二人共、確率とか頑張りとかであの魔球を打てるか？ 打てるなら、とつくに打ち崩してるよ…。」

(三塁)

三塁審：

「フェア！」

(芹沢勢ベンチ)

岩原：

「う、嘘だろ？」

俺がフィールドの方を見ると、落合が一塁で立っていた。

藤浦：

「た、タイムっ!!！」

藤浦が、落合の元に走っていった。

高萩：

「うっ、打ったのか?! あの魔球を？」

(一塁)

藤浦：

「どっやって打った、あの球を？」

落合：

「いや…ただ適当に振ったら当たっただけで。」

藤浦：

「適当に…?」

ウグイス嬢：

「7番。ショート、零園君。」

(本塁)

主審：

「プレー!」

零園の心の声：

「俺だって…、打てるんだ!」

(ビュッ!)

(ブンッ!)

(パシッ!)

主審：

「ストライク!」

(ビュッ!)

零園の心の声：

「クソッ! 何で当たんねえんだよ!」

(ブンッ!)

(パシッ!)

主審：

「ストライク!」

虔沼：

「…ただ振っても、当たらない。」

(ビュッ!)

零園の心の声：

「何だよ…結局、俺は三振で皆に迷惑掛けちまうのかよ。嫌だ、俺だって…。」

(零園の目が開く。)

零園の心の声：

「勝ちてえんだ!」

(カキン!)

虔沼：

「っ?!」

(芹沢勢ベンチ)

潮見：

「当たった!?!」

藤浦：

「走れえー、零園!」

零園の打球は、二遊間を抜けた。

高萩：

「ストップ!」

これでツーアウト、ランナーは一、二塁になった。

高萩の心の声：

「ランナーが得点圏に入った！ 次のバッターは…。」

俺は、電光掲示板を見た。

高萩の心の声：

「ま…麻衣かよ。」

（芹沢勢ベンチ）

岩原：

「せつかくのチャンス、逃したな。」

藤浦：

「…当たってくれば、良いんですけどね。」

ウグイス嬢：

「8番。ライト、潮見さん。」

（本塁）

潮見：

「よ…よっしゃ、こっ来い。」

度沼：

「…お手柔らかに。」

主審：

「プレー！」

（ビュッ！）

潮見：

「えいつ！」

(ブンッ！)

(パシッ！)

主審：

「ストライク！」

(一塁)

高萩：

「…ダメだこりゃ。」

(ブンッ！)

(パシッ！)

主審：

「ストライク！」

さすがに、ラッキーが続く事が無いと思い、俺は諦めていた。

(芹沢勢ベンチ)

美作：

「次の回の守備の用意をしておきます。」

藤浦：

「そうだな、頼む。…おいつ！千駄木、どこ行くんだよ！
そ
う
ち
は…っ
て、お
い
っ
！
無
視
す
る
な
よ
！」

(本塁)

潮見の心の声：

「何で…何で打てないのよ！ あたしだって、皆の役に立ちたいの
に…。 また、あたしは足手まといになるの？」
「……………」

「主審、タイムをお願いします。」

主審：

「たっ、タイム！ ……何だね、君？」

（一塁）

高萩の心の声：

「せ…千駄木?! 何やってんだ、アイツは？」

（本塁）

潮見：

「せつ、千駄木さん?!」

虔沼：

「…萌？」

千駄木：

「芹沢高校、10番。 私、千駄木が潮見さんの代打になります。」

潮見：

「えっ?!」

芹沢勢：

「えーっ?!」

虔沼：

「正気か…お前？」

千駄木：

「私、亮也と一度勝負してみたかった。 それに…。」

潮見：

「せ…千駄木さん？」

千駄木：

「これは私自身、亮也への区切りをつけるモノになるの。だから潮見さん、身勝手に申し訳ないけど…私と変わってくれないかな？」

虔沼：

「……………」

潮見：

「…解った。」

潮見と千駄木が話を終え、主審が球場スタッフからウグイス嬢へ伝えに行った。

ウグイス嬢：

「ここで、バッター交代のお知らせを致します。バッター、潮見さんに変わりました、千駄木 萌さん。背番号、10番。」

主審：

「ツーアウト。カウント、ツー、ナッシング。続行！ プレー！」

(一塁)

高萩の心の声：

「千駄木…、打ってくれ！」

(本塁)

千駄木の心の声：

「アイツと別れてから…、今まで思い詰めてた。あの時、伝えな

ければならなかった事が沢山あったのに…とか。」

(ビュッ！)

(パシッ！)

主審：

「ボール！」

虔沼の心の声：

「クソッ！ アイツがあそこに立っていると、雑念が入って…。」

霜尻の心の声：

「どうしたんだ！？ 虔沼の今のナックル、精度が落ちてる…。」

(ビュッ！)

千駄木の心の声：

「だけど…今、この場でハッキリさせる！ 私は…私は…。」

霜尻の心の声：

「っ？！ へ、変化しない！？」

虔沼：

「しっ、しまった…！」

千駄木の心の声：

「亮也。本当に…。」

(ブンッ！)

千駄木の心の声：

「ありがとう！」

高萩：

「当たれえー…！」

千駄木：

「えーいつ!!」

(カキーン!!)

度沼：

「……………くっ!!」

(ヒュンツ!!)

芹沢勢：

「…あっ!?!」

この球場に、一瞬だけ静けさが漂った。

(トンツ…トンツ…。)

高萩：

「走れえー、千駄木!!」

茉山：

「クソツ!!」

千駄木の渾身の打球は、右中間の深い所に落ちた。

(本塁)

(ドシツ!!)

落合：

「4点目っ!!」

(芹沢勢ベンチ)

藤浦：

「よっしゃー!!! 続け、続けえ!!!」

岩原：

「回れー、一年ー!!!」

(本塁)

(ドシッ!)

零園：

「5点目っ!!!」

(一塁)

高萩：

「千駄木いー、サードに突っ込めえ!!!」

(外野)

茉山：

「そつは…させるかーよお!」

(ビュンッ!)

(三塁付近)

千駄木：

「届けえー!!!」

(ビュンッ!)

(ザザーッ!!)

上条：

「フンッ!」

(パシッ!)

三墨周辺は、砂埃や粉塵が舞い上がって外からよく見えなかったの
で、アウトかセーフかどうか、解らなかった。果たして…。

三墨審：

「…っ!? あっ、アウト!! スリーアウト、チェンジ!!」

(一墨)

高萩：

「あー、惜しい…。」

(芹沢勢ベンチ)

岩原：

「やはり…。あの茉山の前じゃ、奇跡も消えるのか。」

藤浦：

「…あっ、お帰り。千駄木。」

千駄木：

「走りには、自信があったのにな…。しかも…あーっ!! 服が

ドロドロ…。」

藤浦：

「せ、千駄木…。」

千駄木：

「ほらっ、そんな顔してないで！ チェンジだってよ！ 点を追加したんだから、しっかり守ろうね！」

藤浦：

「あ、ああ…。」

(フィールド)

ウグイス嬢：

「5回表。 龍泉高校の攻撃は、6番。 ファースト、石橋君。」

こうして俺達は、代打の千駄木に追加点を貰い、守備についた。果たして、このまま俺達は茉山のチームを破る事が出来るのか…。

f r i e n d s 5 5 : 茉山の実力。(前書き)

5回に入り、全力投球してきた藤浦の体力はかなり消耗してきた時、あの茉山が勝負を仕掛けてきた…。

f r i e n d s 5 5 : 茉山の実力。

主審：

「プレー！」

前の回、代打千駄木によって2点追加した俺達。だが、茉山達は動揺一つしていなかった。

高萩の心の声：

「しかも、交代時に茉山がナインを囲んで何か話してたのも気になる…。」

俺は、取りあえず藤浦にインコース高めのジャイロを要求した。

(ピュッ！)

石橋の心の声：

「…やはり、茉山の言う通りだ。」

(バシッ！)

主審：

「ボール！」

高萩の心の声：

「嘘?!」

俺は、明らかに動揺していた。

高萩の心の声：

「まさか…、アイツ疲れているんじゃない？」

俺は心配し、カーブを要求した。

(ビュッ！)

高萩：

「っ！？」

何と、藤浦のカーブの精度が落ちていたのだ。

石橋の心の声：

「貰った！」

(カキーン！)

藤浦：

「…あっ！？」

石橋の打球は、レフト前に落ちた。

高萩：

「タイム、お願いします！」

主審：

「タイム！」

俺は、藤浦の所に向かった。

高萩：

「大丈夫か？」

藤浦は肩を揺らしながら呼吸していた。疲労しているのは、目に見えていた。

藤浦：

「大丈夫だ。もし俺が降板したら、ピッチャーはお前がやれる。

だが、キャッチャーはどうする？ キャッチャーがいないんじゃない、試合を続行出来ないんだ！」

高萩：

「だが：無理はするなよ。これから、少し配球を考えてみる。」

藤浦：

「頼んだぜ：、名キャッチャー。」

高萩：

「ハハツ。」

俺は、藤浦の胸をポンと軽く叩いてキャッチャーの正位置に戻った。

ウグイス嬢：

「7番。セカンド、日向君。」

主審：

「プレー！」

高萩の心の声：

「藤浦、踏ん張ってくれ！」

(ビュッ！)

日向の心の声：

「球速：キレ、菜山さんが指摘した通り、落ちている。：：なら。」

高萩の心の声：

「バント!?!」

(コンッ！)

日向がバントした打球は、三塁線の深い所で止まった。

主審：

「フェア！」

高萩：

「っ！？ 藤浦、サードに任せろ！」

藤浦：

「俺のミスを、他の奴に尻拭いさせてたまるかあよっ！」

(ビュッ！)

藤浦：

「っ！！ しまった！」

落合：

「うわっ！」

(パシッ！)

一塁審：

「セーフ、セーフ！」

藤浦：

「クッ！！」

高萩の心の声：

「藤浦の悪送球を、落合が捕るために、アイツの足がベースから足が離れていたんだ…。」

これで、ノーアウト、一、二塁になった。

その内の一人がスコアリングポイントに到達している。

高萩の心の声：

「ここでゲッツー（併殺）、最低でもアウト一つは取らないといけないな。しかし…。」

ウグイス嬢：

「8番。ピッチャー、虔沼君。」

相手バッターは、先制点を入れた虔沼。簡単にアウトを取れるとは思わなかった。

主審：

「プレー！」

高萩の心の声：

「ここは、打たれて大量点を採られるより、フォアボール（四球）を選んだ方が良い。」

（パシッ！）

（パシッ！）

（パシッ！）

（パシッ！）

主審：

「フォアボール！」

虔沼：

「…分が悪くなっただけだな。」

（コン…コロコン…）

ウグイス嬢：

「9番。レフト、野尻君。」

高萩の心の声：

「ノーアウト、満塁。藤浦、コイツを何とか抑えよう。最悪、点をあげても良い。」

(ビュッ！)

(カキンッ！)

美作：

「おりゃっ！」

(パシッ！)

(ビュッ！)

零園：

「オーライッ！……ようっ！……と。」

(パシッ！)

二塁審：

「アウト！」

零園：

「落合っ！」

(ゴュッ！)

落合：

「ようっ！……と。」

(パシッ！)

一墨審：

「アウト！」

(芹沢勢ベンチ)

潮見：

「やった！」

(本塁)

主審：

「ホームイン。」

石橋の心の声：

「点をあげても、芹沢がリードしている。だから……。」

高萩：

「ツーアウト、ツーアウト！」

(バッターサークル)

菜山の心の声：

「チャンスに滅法強い度沼を歩かせて、確実に打ち取れる相手を選んで、被害を最小限に留めたっていう訳か……。」

ウグイス嬢：

「1番。ライト、まかせ菜山 すくぬ卓君。」

とうとう、菜山がバッターサークルに現れた。

(龍泉側ベンチ)

犀潟兄：

「茉山、俺を下ろしたからには、何と少しでも点採れよ！」

（本塁）

主審：

「プレー！」

茉山は、バッターボックスに入ってから無表情だった。マウンドには、宿敵である藤浦がいるのに、だ。

犀潟の心の声：

「未だ、ツーアウトでも三塁にランナーがいる。一打打たれたらヤバいぞ、高萩、藤浦！」

俺は、カーブを要求した。

（ビュッ！）

茉山：

「フンッ！」

（カキーン！）

一塁審：

「ファール！ ファール！」

茉山：

「チッ！ 外したか。」

二球目、藤浦にフォーシームジャイロを要求した。

(ビュッ!)

(カキンッ!)

主審：

「ファール!」

バックネットに、打球が掛かった。

高萩の心の声：

「藤浦のフォーシームを楽々とカットしてる…何て奴だ!」

それから、藤浦がどんなに際どいコースに投げてても、菜山にボール球として見送られたり、弾かれたりした。もう彼の体力が残り少ないのを考え、俺は苦渋の決断をした。

高萩の心の声：

「藤浦、もう良い。歩かせよう(四球)。」

俺は、そうサインして立ち上がった。が、しかし…。

藤浦：

(首を横に振る。)

高萩：

「っ!?!」

嘘だろ、と思った。まさか、藤浦が勝負しようと思っているとは…。

高萩：

「主審、タイムお願いします！」

俺は、マウンドにいる藤浦へ駆け寄った。

高萩：

「どついつつもりだよ！ もしホームラン打たれたら、同点になっ

…。」

藤浦：

「打たせやしない！」

高萩：

「っ！？」

藤浦：

「打たせやしない。必ずアイツを三振に仕留めてやる！」

高萩：

「だ、だがお前の残りの体力では…。」

藤浦：

「俺は、アイツと全力で勝負して、ぶっ潰したいんだ！」

高萩：

「ピッチャーは、藤浦しか居ないんだ！ お前が降板したら、どう

するんだよ！」

藤浦：

「その時は…高萩、お前がマウンドに上がれ。」

高萩：

「バカ野郎！ 俺じゃ、龍泉打線を抑えられない！」

藤浦：

「それは、ヘボキャッチャーが恋女房だったらの話だろ？」

高萩：

「だが、そのキャッチャーすら、俺らのチームには居ないんだぞ！

？」

藤浦：

「居るよ。とっておきの、キャッチャーがね。」

高萩：

「えっ！？まさか…。」

藤浦：

「…解るよな。もう俺にはまともに投球出来る体力は残っちゃいない。次が俺のラストボールになると思う。例え、アイツに打たれても同点。大丈夫。また打って、アイツらを突き放す。

行くぜ…全力投球、真っ向勝負だ、高萩！」

高萩：

「……………」

俺は、無言で藤浦にボールを渡し、キャッチャーボックスに戻った。

主審：

「プレー！」

俺は、勝負に出た。ど真ん中の渾身のフォーシームジャイロボールを要求した。

藤浦の心の声：

「行くぜ、茉山！」

（ビュッ！）

茉山：

「バーカ。」

（カキーン！）

球場内に轟く金属音。

高萩の心の声：

「…よくやった、よくやったよ藤浦。」

藤浦や俺の目から、少し涙が出ていた。

（ガッツ！）

茉山の打球は、場外の雑木林に消えた。

（大歓声）

（茉山がホームに帰還する。）

主審：

「ホームイン。」

これで、とうとう同点に追いつかれた俺達。
スに持ってかれてしまうのか？

このまま龍泉のペー

f r i e n d s 5 6 : 仲間である事…。 (前書き)

俺の勝負所を誤った配球ミスで、茉山にホームランを打たれ、藤浦がノックアウトされた。

俺は、ピッチャー交代させようと提案するが…。

f r i e n d s 5 6 : 仲間である事…。

茅山に同点ホームランをくらった藤浦は、マウンドに呆然と立ち尽くしていた。俺や内野手陣は、タイムを取って藤浦の元へ向かった。

高萩：

「…藤浦、しょうがねえよ。限界だったんだ。」

藤浦：

「ハア…ハア…、す、済まない…済まなかった、皆。」

高萩：

「…よく頑張った、あとは任せろ。」

藤浦：

「…頼んだぞ、高萩。」

藤浦は、ベンチに下がっていった。

俺は、零園に頼んでセンターの岩原を呼んだ。

高萩：

「先輩、キャッチャー出来ますよね？」

岩原：

「やだ。」

高萩：

「先輩、お願いします!!」

岩原：

「やるとしても、必然的にセンターが空くぞ。センター、誰がやるんだよ!？」

そうだ、こっちはメンバーギリギリでやっている。一人空くと、

ベンチには潮見しか居なかった。

岩原：

「どうすんだよ!? クソガキ!!」

高萩：

「くっ...」

?????

「高萩いー!!」

高萩：

「っ!?!」

突然、背後から俺の名前を誰かが大声で叫んだ。振り向くと、そこには...。

福本：

「水臭いな、まったく!」

魚谷：

「事情は、大体校長から聞いたぞ!」

律塔：

「俺達の学校を、のこのことあんな奴らに支配されるなんて御免だからな。」

瀬戸：

「よくこのメンバーで好戦してるな、凄いぞ高萩!」

川端：

「俺様が来たからには、もう安心だ!」

榎故：

「俺達も一緒に戦うぞ!」

高萩：

「み、皆...、おう!...!」

これで、反撃準備は整った。

ウグイス嬢：

「ここで芹沢学園高校、選手及びポジションの交代を御知らせ致します。キャッチャー、高萩君に変わりました、福本 秀太君。ファースト、落合君に変わりました、瀬戸 有騎君。セカンド、美作君に変わりました、榎故 草太君。ショート、零園君に変わりました、川端 康介君。サード、屋代君に変わりました、魚谷 允矢君。ライト、千駄木さんに変わりました、律塔 条君。そして、キャッチャーの高萩君がピッチャーとなります。」

これからが、本当の芹沢野球だという事をあいつらに見せてやると心に誓った。

f r i e n d s 5 7 : 容赦無し！ 兵（つわもの）達の反撃、始動。（前書き）

疲弊と打ち込まれでマウンドを降りた藤浦に変わって登板した高萩。

リリースでしか投球してこなかった彼に、龍泉の上位打線が容赦なく畳み掛けてくる…。

friends 57：容赦無し！ 兵（つわもの）達の反撃、始動。

ウグイス嬢：

「2番。サード、上条君。」

主審：

「プレー！」

藤浦の代わりに、俺が登板する事になったが、正直言って無得点で切り抜けられるとは思って無かった。

高萩の心の声：

「まずは、様子見で…。」

（ビュッ！）

（パシッ！）

主審：

「ボール！」

スローボールをストライクゾーンギリギリで投げたが、振ってこなかった。振る気配もなかった。どうやら、優れた選球眼は、龍泉ナイン全員が持ち合わせてるらしい。

高萩の心の声：

「なら、確実に打ち取るしかないな。」

俺は、度沼より精度が低いナックルを投げた。

（ビュッ！）

(カキンッ！)

一塁審：

「ファール！」

福本：

「ま…マジかよ…。」

上条が、ナックルを易々とカットしてきた。 凄いセンスだ。

高萩の心の声：

「なら、さっさとねじ伏せるだけだっ…！」

(ビュッ！)

力強く放ったフォーシーム。 だが…。

上条：

「フッ…。」

(カキーン！)

魚谷：

「クソッ！」

打球は三遊間を破り、左中間に転がった。 レフトの犀潟が捕って内野へ送球した時には、既に上条は二塁に到達していた。

ウグイス嬢：

「3番。 キャッチャー、霜尻君。」

次のバッターは今試合、菜山以外にホームランを放っている強打者の霜尻。ツーラン（2点ホームラン）を打った相手なので、何とかゴロかフライに打ち取りたい。

高萩の心の声：

「ぜってえ抑えるっ！」

（ビュッ！）

霜尻：

「俺を嘗めて貰っちゃ困る…っよっ！！」

（カキンッ！）

葎塔：

「オーライ…はいよっ。」

（パシッ）

一塁審：

「アウト！」

霜尻：

「…チッ、打ち損じちまったぜ。」

高萩：

「…ふう。」

霜尻の打球は、風に押し戻されて前もって後退していたライトの葎塔のグラブに収まった。しかし、今のフライで上条がタッチアップで三塁に進塁してしまった。

ウグイス嬢：

「4番。センター、氷石君。」

そして、遂に一番勝負したくない奴との対決になった。

氷石：

「荊太郎君。君のフォーシーム、僕にとっちゃ絶好球なんだよね。

さつき、僕をコケにしてくれたお返しに、このバットで今度こそバックスクリーンに叩き込んで君を再起不能までに追いやってやるよ！」

高萩：

「：お前、変わったな。」

主審：

「プレーー!!！」

氷石の苦手なコースは解っていたので、そこにフォーシームを一球投げ込んだ。

(ビュッ!)

(スパンッ!)

主審：

「ストライクッ！」

高萩の心の声：

「昔、氷石はインハイ（内角高め）は手を出さなかった。唯一、手を出した試合があったが、確か結果は凡退だったはず。」

二球目も、同じ箇所にフォーシームを投げ込む

(スパンツ！)

主審：

「ットライーク！」

高萩の心の声：

「氷石が打てると言ったフォーシームを二球続けて投げたけど、奴は手を出してこない。やはり、苦手なコースだから、手を出さないのか……うん？ あれは……。」

氷石の方を見ると、彼は目を瞑っていた。

高萩の心の声：

「まさか、さっきの2球共に目を瞑っていて見てなかったんじゃ……。ヤバいぞ、奴がそれをする時は……。」

リトル時代の氷石は一番の勝負の際、打席に入った途端目を瞑り、初球と2球目を見送って、3球目に目を開いて打撃を開始していた。死球を恐れないそれをする訳は、相手投手に集中する為に何もかも視界をシャットアウトしたい彼なりの方法だった。集中度からすれば味方のサインを無視する程で、昔の氷石の癖だった。

高萩の心の声：

「この状態に入ると、粘って四球選びの粘りの打法から、氷石自らが嫌う三振を省みないデカい一発狙いに変わるんだっけ……。なら、甘い球を投げる前にさっさと三球で終わらすっ！」

(ゴッッー)

俺は、緩急で三振させるためにナックルをインハイ気味に放った。
しかし…、

氷石：

「フンッ！」

(キーンッ！)

高萩：

「っ？！」

何と、氷石が苦手とするインハイに入ったナックルをジャストミートしたのだ！！

高萩：

「センターっ！！！」

打球は、センター方向に上昇し…そして、

(ザッ)

球場奥の雑木林の中に、吸い込まれるように落ちていった。

高萩：

「…場外…ツーラン。」

俺は、呆気にとられてマウンド上でへたり込んでしまった。それを後目に、氷石はダイヤモンドを悠々と回っていった。

(龍泉側ベンチ)

茉山：

「ったく、オイシいところを持っていきやがって…あのコワッパめ。

」

これ以上、打たれてはいけなかったのに打たれてしまった。しかも、旧友が放った特大場外ホームランに、俺は投げる気力を失くしてしまいそうになってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844b/>

友達ともだちの存在...

2010年12月20日00時41分発行